ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

X－1

1983

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書
X－1

1983

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

001.2
ほ27

序

滋賀県下のほ場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、はや10年目を迎えることになりました。この間ほ場整備事業の拡大に伴い発掘調査件数も年々増加をしてきました。

このような状況のもとで発掘調査と開発事業との間で大きな問題が生じることなく発掘調査が円滑に実施出来ておることは関係機関の御理解の賜ものと感謝いたします。

発掘調査で得られた資料や成果を公開し、広く県民に資料提供するため、ここに昭和57年度に実施しました発掘調査の報告書を刊行することにいたしました。

この報告書が、滋賀の埋蔵文化財に関する理解を深めていただく一助になれば幸いであります。

最後にこの調査に御協力をいただきました地元関係者および関係諸機関の方々に対し厚くお礼申し上げます。

昭和58年３月

滋賀県教育委員会事務局
文化部文化財保護課長
外　池　忠　雄

例　　言

１．本書は、滋賀県の実施する県営ほ場整備事業に係る法養寺遺跡・薬師堂遺跡・矢守遺跡・軽野遺跡の発掘調査報告書で、ほ場整備関係発掘調査報告書のＸ－１に当る。

２．本調査は滋賀県教育委員会の指導により財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。

３．調査および整理・報告は滋賀県教育委員会文化部文化財保護課技師葛野泰樹が担当し、主任調査員として財団法人文化財保護協会嘱託調査員徳網克己が当った。

４．各遺跡の調査・整理には下記の協力を得た。

法養寺遺跡

・調査補助員：北川利孝（大阪学院大学）、入野隆治・原田弘文・奥村義治（立命館大学）、端矩勇貴・山田幸夫（滋賀県立短期大学）、林　浩司（仏教大学）、小山みのり・中村康子・小倉美奈子（京都女子大学）、北川ともえ（京都和裝学園Ｏ．Ｇ）

薬師堂遺跡

・調査補助員：西村武史（大阪学院大学Ｏ．Ｂ）林　浩司・西川　健・吉備浩子（仏教大学）、入野隆治（立命館大学）、中村康子・小倉美奈子（京都女子大学）

矢守遺跡

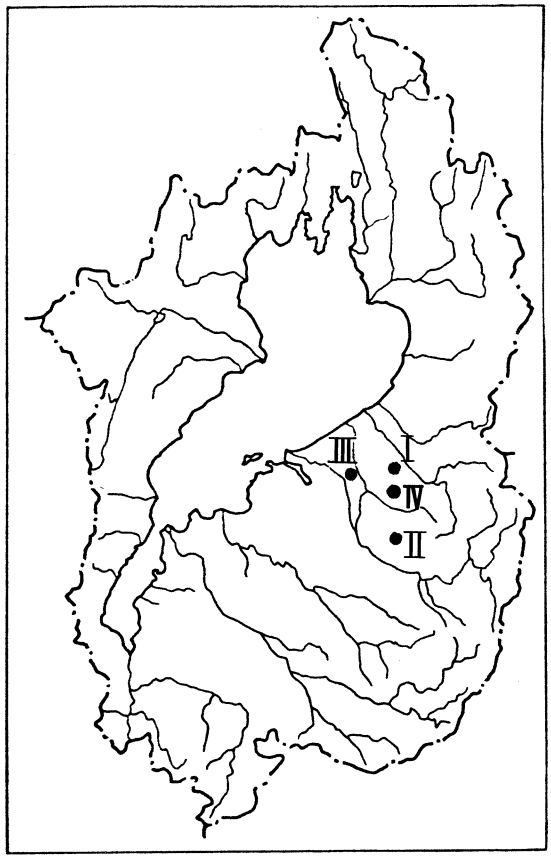
・調査補助員：西村武史（大阪学院大学Ｏ．Ｂ）、西川　健・林　浩司（仏教大学）中村康子・小倉美奈子（京都女子大学）

軽野遺跡

・調　査　員：西村武史（大阪学院大学Ｏ．Ｂ）

・調査補助員：西川　健・林　浩司・吉備浩子（仏教大学）、北川利孝（大阪学院大学）、三浦正博・重田和良（岐阜経済大学Ｏ．Ｂ）、端世志彦（大阪工業大学）、椙森勝宏（大阪学院大学Ｏ．Ｂ）、西村和英（大阪電気通信短期大学）、端矩勇貴・吉川勝行・紀平純一・山田幸夫・奥村義治（滋賀県立短期大学）、小倉美奈子（京都女子大学）

５．本書の編集・執筆は葛野が当った。図面の整理には林　浩司、遺物の整理には小倉美奈子・中村康子・吉備浩子の尽力があり、遺物写真については寿福　滋氏の協力を得た。また、本稿の校正については、滋賀県埋蔵文化財センター目片さち氏の協力を得た。



本報告所収遺跡位置図

Ⅰ．法養寺遺跡　Ⅱ．薬師堂遺跡

Ⅲ．矢守遺跡　　Ⅳ．軽野遺跡

目　　次

第１章　犬上郡甲良町法養寺遺跡

1．はじめに…… 1
2．位置と環境…… 2
3．調　　査…… 5
　1．調査経過…… 5
　2．調査日誌（抄）…… 5
4．遺　　構…… 9
5．遺　　物…… 11
6．まとめ…… 15

第２章　愛知郡湖東町薬師堂遺跡

1．はじめに…… 17
2．位置と環境…… 19
3．調　　査…… 21
　1．調査経過…… 21
　2．調査日誌（抄）…… 21
4．遺　　構…… 23
5．遺　　物…… 26
6．まとめ…… 28

第３章　愛知郡秦荘町矢守遺跡

1．はじめに…… 31
2．位置と環境…… 31
3．調　　査…… 34
　1．調査経過…… 34
　2．調査日誌（抄）…… 34
4．遺　　構…… 36
5．遺　　物…… 41
6．まとめ…… 47

第４章　愛知郡秦荘町軽野遺跡

1．はじめに……49
2．位置と環境……51
3．調　　査……54
　1．調査経過……54
　2．調査日誌（抄）……54
4．遺　　構……56
5．遺　　物……60
　1．瓦　　類……60
　2．土器類……65
6．まとめ……68

図版目次

法養寺遺跡

図版一　1　法養寺遺跡調査地遠景（南から）
　　2　法養寺遺跡調査地遠景（北から）
図版二　1　Ａトレンチ ＳＢ8201（東から）
　　2　Ｃトレンチ ＳＢ8202・8203（南から）
図版三　1　Ｊトレンチ ＳＢ8204（西から）
　　2　Ｓトレンチ ＳＢ8205（西から）
図版四　1　Ｇグリット ＳＤ8201（東から）
　　2　Ｐグリット ＳＤ8202（西から）
図版五　1　Ｒトレンチ ＳＲ8201（北西から）
　　2　Ｑトレンチ（北西から）
図版六　1　Ｋグリット（北東から）
　　2　Ｔグリット（南西から）
図版七　1　Ｃトレンチ ＳＫ8201（南から）
　　2　Ｓトレンチ ＳＢ8205柱穴遺物出土状況
図版八　　出土遺物

薬師堂遺跡

図版一　1　薬師堂遺跡遠景（東から）
　　2　薬師堂遺跡遠景（西から）
図版二　1　Ｈトレンチ掘立柱建物群・溝（南から）
　　2　Ｈトレンチ掘立柱建物群（東から）
図版三　1　ＳＢ8201・8202（北から）
　　2　ＳＢ8203・ＳＡ8201（東から）
図版四　1　ＳＤ8201（南から）
　　2　ＳＤ8201（北から）
図版五　1　Ｃトレンチ ＳＲ8201（南東から）
　　2　Ｆトレンチ ＳＲ8201（北西から）
図版六　1　Ｇトレンチ ＳＲ8201（北から）
　　2　現地説明会風景
図版七　　出土遺物

矢守遺跡

図版一　1　矢守遺跡調査地遠景（東から）
　　2　矢守遺跡調査地遠景（南西から）

図 版 二　1　Ｂトレンチ掘立柱建物群（南から）
　　2　Ｂトレンチ掘立柱建物群（北東から）
図 版 三　1　Ｂトレンチ掘立柱建物群（北から）
　　2　ＢトレンチＳＢ8204（南から）
図 版 四　1　ＣトレンチＳＢ8206（北から）
　　2　ＣトレンチＳＢ8205（北から）
図 版 五　1　ＤトレンチＳＢ8207（南から）
　　2　ＢトレンチＳＫ8201（南から）
図 版 六　1　ＢトレンチＳＫ8203（東から）
　　2　ＢトレンチＳＫ8204（南から）
図 版 七　1　ＢトレンチＳＫ8205（南から）
　　2　ＫグリットＳＤ8214（東から）
図 版 八　1　ＫグリットＳＤ8216・8218（北東から）
　　2　Ｄトレンチ（南西から）
図 版 九　1　Ｃトレンチ（南東から）…
　　2　Ｃトレンチ拡張部（南東から）
図 版 十　出土遺物(1)
図版十一　出土遺物(2)
図版十二　出土遺物(3)

軽　野　遺　跡

図 版 一　1　軽野遺跡遠景（北東から）
　　2　１Ｂ－１トレンチ礎石（北西から）
図 版 二　1　１Ｂ－１トレンチ礎石（南西から）
　　2　１Ｂ－１トレンチ礎石（北西から）
図 版 三　1　１Ｂ－１トレンチ礎石（南東から）
　　2　１Ｂ－１トレンチ礎石横瓦列
図 版 四　1　１Ｂ－１トレンチ礎石横溝（南東から）
　　2　１Ｂ－７トレンチ瓦窯、左：１号窯、右：２号窯（東から）
図 版 五　1　１号瓦窯、灰原（東から）
　　2　１号瓦窯（東から）
図 版 六　1　１号瓦窯燃焼室縦断面（南から）
　　2　１号瓦窯燃焼室横断面（東から）
図 版 七　1　２号瓦窯（北から）
　　2　１Ｂ－１トレンチ瓦堆積状況（北西から）
図 版 八　1　１Ｂ－５トレンチ（南西から）
　　2　１Ｂ－４トレンチ（南西から）
図 版 九　1　２Ａ－４トレンチ（北東から）

2　２Ｂ－２トレンチ（南西から）
図版十　1　２Ａ－３トレンチ旧河川跡（南から）
2　１Ｂ－５トレンチ旧河川跡（南から）
図版十一　出土遺物（軒丸瓦）
図版十二　出土遺物（軒丸瓦）
図版十三　出土遺物（軒丸瓦・丸瓦）
図版十四　出土遺物（軒丸瓦）
図版十五　出土遺物（土器）

挿図目次

法養寺遺跡

第１図　法養寺遺跡位置図および周辺の遺跡…… 1
第２図　法養寺遺跡測量図および調査範囲図…… 3
第３図　法養寺遺跡グリット・トレンチ位置図および地区割り図…… 4
第４図　Ｅトレンチ掘削作業風景…… 5
第５図　Ａトレンチ遺構検出状況…… 5
第６図　法養寺遺跡Ａ～Ｃ・Ｆ・Ｇ・Ｊグリット、トレンチ平面実測図…… 7
第７図　法養寺遺跡Ｇ・Ｋ・Ｌ・Ｎ・Ｐ～Ｕグリット、トレンチ平面実測図…… 8
第８図　法養寺遺跡ＳＲ8201断面実測図…… 10
第９図　法養寺遺跡出土遺物実測図(1)…… 12
第10図　法養寺遺跡出土遺物実測図(2)…… 13

薬師堂遺跡

第１図　薬師堂遺跡位置図および周辺の遺跡…… 18
第２図　薬師堂遺跡測量図およびグリット・トレンチ位置図…… 20
第３図　薬師堂遺跡Ｈトレンチ平面実測図…… 23
第４図　薬師堂遺跡掘立柱建物平面実測図…… 24
第５図　薬師堂遺跡ＧトレンチＳＲ8201断面図…… 24
第６図　薬師堂遺跡出土遺物実測図…… 26

矢守遺跡

第１図　矢守遺跡位置図および周辺の遺跡…… 32
第２図　矢守遺跡測量図および調査範囲図…… 33
第３図　矢守遺跡Ａトレンチ掘削作業風景…… 34
第４図　矢守遺跡Ｂ～Ｄ・Ｈトレンチ平面実測図…… 36•37
第５図　矢守遺跡ＳＫ8201～8205平面実測図…… 37
第６図　矢守遺跡Ｆ・Ｋトレンチ平面実測図…… 39

第７図　出土遺物実測図(1)……42
第８図　出土遺物実測図(2)……43
第９図　出土遺物実測図(3)……44

軽　野　遺　跡

第１図　軽野遺跡位置図および周辺の遺跡……50
第２図　軽野遺跡調査範囲図……52
第３図　軽野遺跡トレンチ位置図……53
第４図　暗渠排水工事状況……54
第５図　１Ｂ－１トレンチ調査状況……54
第６図　１Ｂ－１トレンチ平面実測図……56
第７図　１Ｂ－１トレンチ礎石周辺平面実測図……57
第８図　軽野遺跡瓦窯平面実測図……57
第９図　軽野遺跡１号瓦窯実測図……58
第10図　軽野遺跡１Ｂ区トレンチ断面図……58
第11図　軽野遺跡出土遺物（軒丸瓦）実測図……63
第12図　軽野遺跡出土遺物（軒平瓦）実測図……64
第13図　軽野遺跡出土遺物（丸瓦）実測図……65
第14図　軽野遺跡出土遺物（土器）実測図……66

第１章 犬上郡甲良町法養寺遺跡

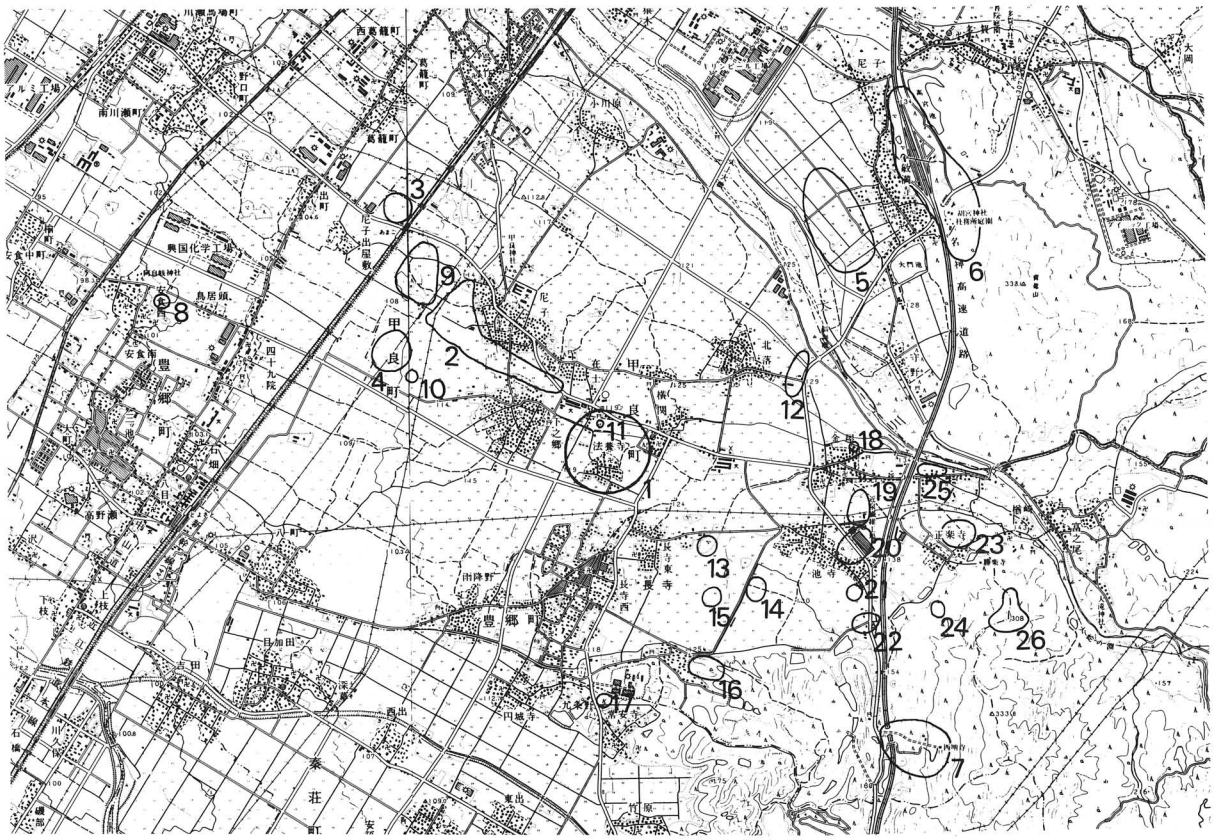
1．はじめに

本調査は、滋賀県が実施する県営ほ場整備事業（法養寺第１工区）に伴うものである。法養寺遺跡は以前から遺物の散布が知られ、字名に大字法養寺小字番城寺・舞台・下窪葛城・堂前等の名をみることから、寺院跡の可能性がある遺跡として周知されていた。遺跡の範囲は現法養寺集落とかなり重複しているとみられているが、範囲、性格、時期等は明らかにされておらず、工事実施前に発掘調査を行ない遺跡を明らかにし、その保存を講じることにした。

今回ほ場整備の対象となるのは法養寺集落の東側約4.9 ha であり、発掘調査は工事実施地区全域を対象とした。

調査は文化財保護課が県農林部耕地建設課より予算（2,220,000円）の再配当をうけ、財団法人滋賀県文化財保護協会へ委託して実施した。調査、整理期間は昭和57年７月～昭和58年３月までとした。

なお、この調査にあたっては甲良町教育委員会をはじめ地元法養寺、下ノ郷の方々にお世話になった。ここに記して謝意を表します。



第１図　法養寺遺跡位置図および周辺の遺跡（S＝1/50000）

１．法養寺遺跡　２．尼子南遺跡　３．長畑遺跡　４．下の郷西遺跡　５．水沼荘跡　６．敏満寺遺跡　８．安食西古墳　９．尼子古墳群　10．下の郷古墳群　11．宮後西古墳　12．北落古墳群　13．三博古墳群　14．四ツ塚古墳群　15．横枕古墳群　16．西ヶ丘古墳群　17．二子塚古墳　18．金屋北古墳　19．金屋南古墳群　20．外輪古墳群　21．堀之内古墳群　22．寺道古墳群　23．正楽寺古墳群　24．狐塚古墳　25．金屋遺跡　26．正楽寺山城跡

2．位置と環境

法養寺遺跡は、滋賀県犬上郡甲良町大字法養寺地先に所在する。法養寺は犬上川によって形成された洪積地にあり、標高約118mを測る。遺跡は現集落を中心に半径約500mの円形をえがく規模をもつとみられるが、詳細な範囲は明らかでない。

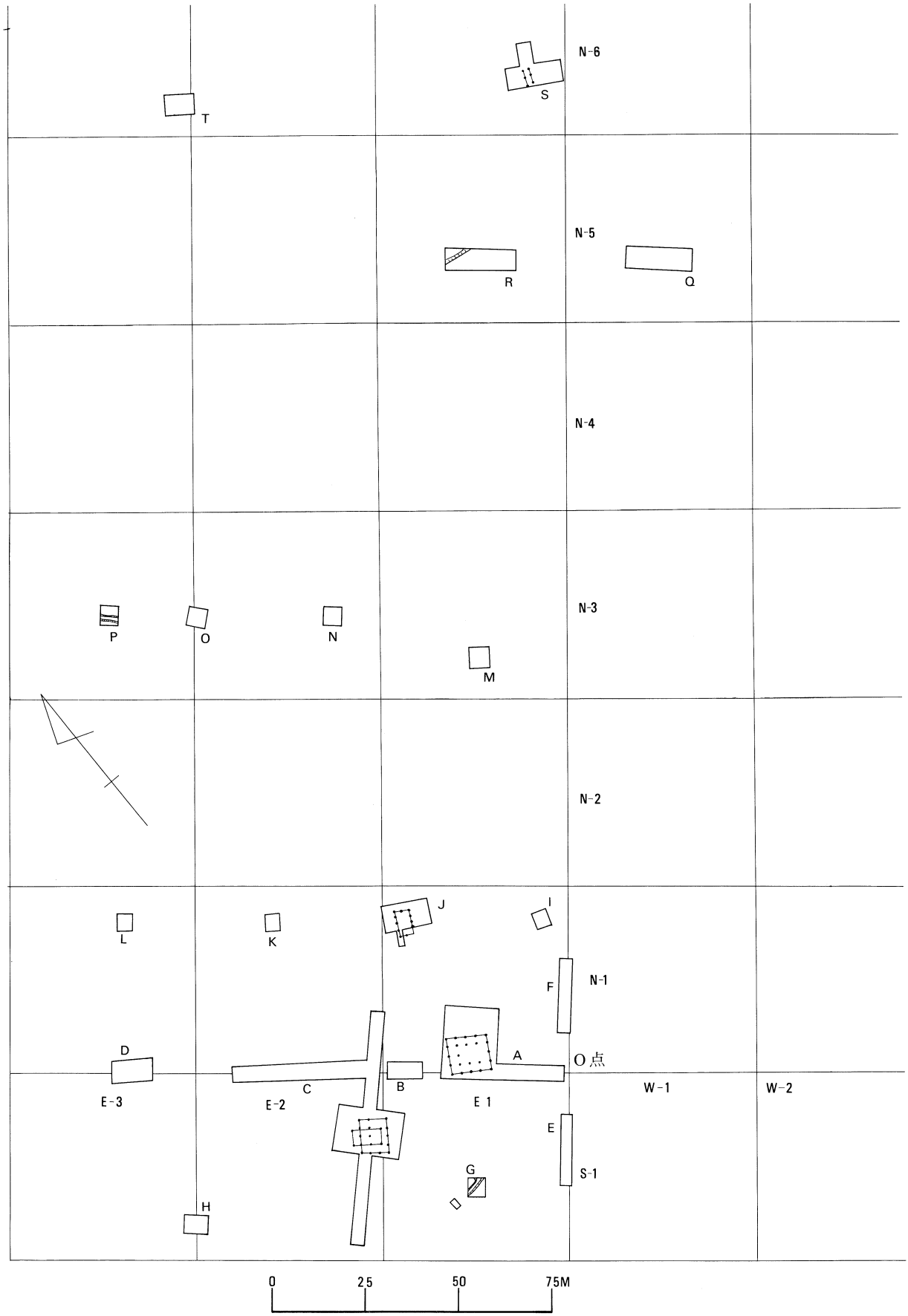
法養寺集落は慶長年間(1596～1615)に犬上川の大洪水を避け、全村をあげて約300m南東の現在地に移住したと伝えている。旧集落跡地には神明神社が祀られている。神明神社の南側に小字橋ノ向、橋渠があり、現在水田となっているものの、周囲の地形より1段低く河川があったようである。

当遺跡の周辺をながめてみると、北側に県指定甲良神社がある。甲良神社は治暦年間(1065～69)に甲良荘総社甲良神社としてその名を創記にのせている①。甲良神社と当遺跡との間にはわずかに墳丘を残す宮後西古墳がある。

古墳は甲良町東方の金屋、池寺、正楽寺、九条野にかけて数多くの古墳群をみることができ、その数は100基は下らないといわれている。金屋には縄文土器の出土する金屋遺跡もある②。

集落跡は、当遺跡の西方に在土北、尼子南遺跡が位置し、奈良時代から平安時代にかけての集落跡とみられている③。荘園関係では、甲良町は「正倉院文書」でいう甲良郷と尼子郷に相当し、当地は旧甲良郷に属する。甲良町には犬上郡条里制地割を所々に見ることができ、平安時代には延暦寺・日吉神社・園城寺・東大寺・興福寺等の荘園が存在している④。甲良荘はかなりの規模を有していたと思われる。これら寺領の荘園成立については、犬上郡を本拠地としていた犬上氏や諸豪族との関係にも検討をはらうことも必要であろう。

第２図　法養寺遺跡測量図および調査範囲図



第３図　法養寺遺跡グリット•トレンチ位置図および地区割り図

3．調　　査

1．調査経過

昭和57年度の調査は、法養寺工区約4.9 ha を対象とし、排水路施行部分と50～100m間隔に任意の試掘用グリットを設定した。さらに、各グリット、トレンチ検出の遺構の拡がりに基づき調査面積を拡張し、遺構、遺物の追求を行なった。

調査の基準点は第５号排水路と第５号支線道路の交点を０点と定め、西にのびる第５号小排水路の中心線を基準に50m間隔にＥ１・２・３……、Ｗ１・２・３……とし、第５号支線道路の中心線を基準に50m間隔にＮ１・２・３……、Ｓ１・２・３……と地区割をした。さらに、便宜的に各グリット、トレンチをＡ・Ｂ・Ｃ……Ｔと番号を付した。グリット、トレンチは合計で20本設定し、遺構の認められたＡ・Ｃ・Ｊ・Ｓトレンチを拡張した。（第３図）

今回調査をした地区の基本土層はＡ・Ｃトレンチ付近は耕作土下はすぐ黄褐色土層の遺構面となる。Ｊ・Ｒトレンチは砂礫層の堆積をみる。Ａ・Ｃ・Ｊ・Ｓトレンチからは掘立柱建物を検出し、Ｋ・Ｌ・Ｎ・Ｑトレンチには数基の柱穴をみた。さらにＧグリットには東西方向にのびる溝があり、Ｒトレンチからは河川跡を検出した。

2．調査日誌（抄）

昭和57年

７月１日　本日より発掘調査に入る。運具搬入とテント設営および遠景写真撮影。

７月２～６日　基準杭の設置とトレンチ、グリットの設定。

７月９・10日　Ｅ・Ｆトレンチ掘削。表土下0.4mで明灰褐色粘土の地山面となる。Ｆトレンチから柱穴数基検出。

７月12～14日　Ａ～Ｃトレンチ掘削。Ａトレンチから掘立柱建物検出。Ｃトレンチには柱穴を多くみる。

７月15～17日　Ａ・Ｃトレンチ拡張。

７月20日　Ａトレンチ遺構検出作業。Ｇ～Ｌグリット掘削。

７月21・22日　Ａ・Ｃトレンチ柱穴掘り下げ作業。

Ｍ～Ｐグリット掘削。

７月23日　Ｑ～Ｔグリット、トレンチ掘削。Ａ～Ｃトレンチ写真撮影。

７月26～28日　Ｏ～Ｔグリット、トレンチ再度

第４図　Ｅトレンチ掘削作業風景

第５図　Ａトレンチ遺構検出状況

掘削し地山面を検出する。Ｒトレンチから河川跡検出。

他のグリットから数基の柱穴を検出。

7月29日　Ｓトレンチから掘立柱建物検出。

7月30・31日　Ｃトレンチ再度拡張。掘立柱建物２棟と土壙検出。

8月４～６日　各グリット写真撮影。

8月７日　Ｊグリットの柱穴は掘立柱建物としてまとまる。Ｒトレンチの河川跡から多数の遺物が出土する。

8月９～11日　グリット、トレンチの平板測量（Ｓ＝１／500)。

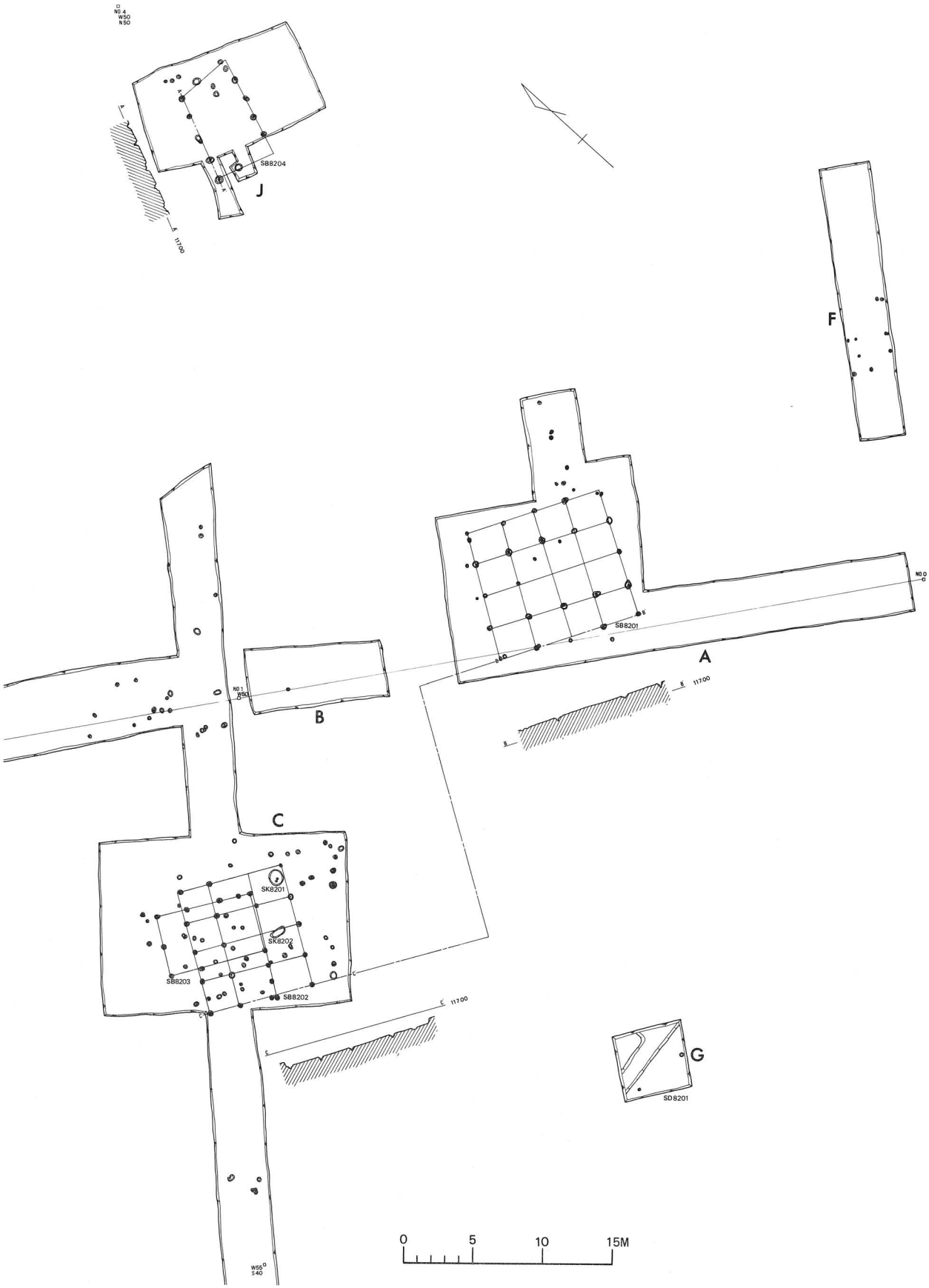
8月12日　Ｑ～Ｔグリット、トレンチの実測用割り付け作業。

8月21日　Ａトレンチ実測作業。

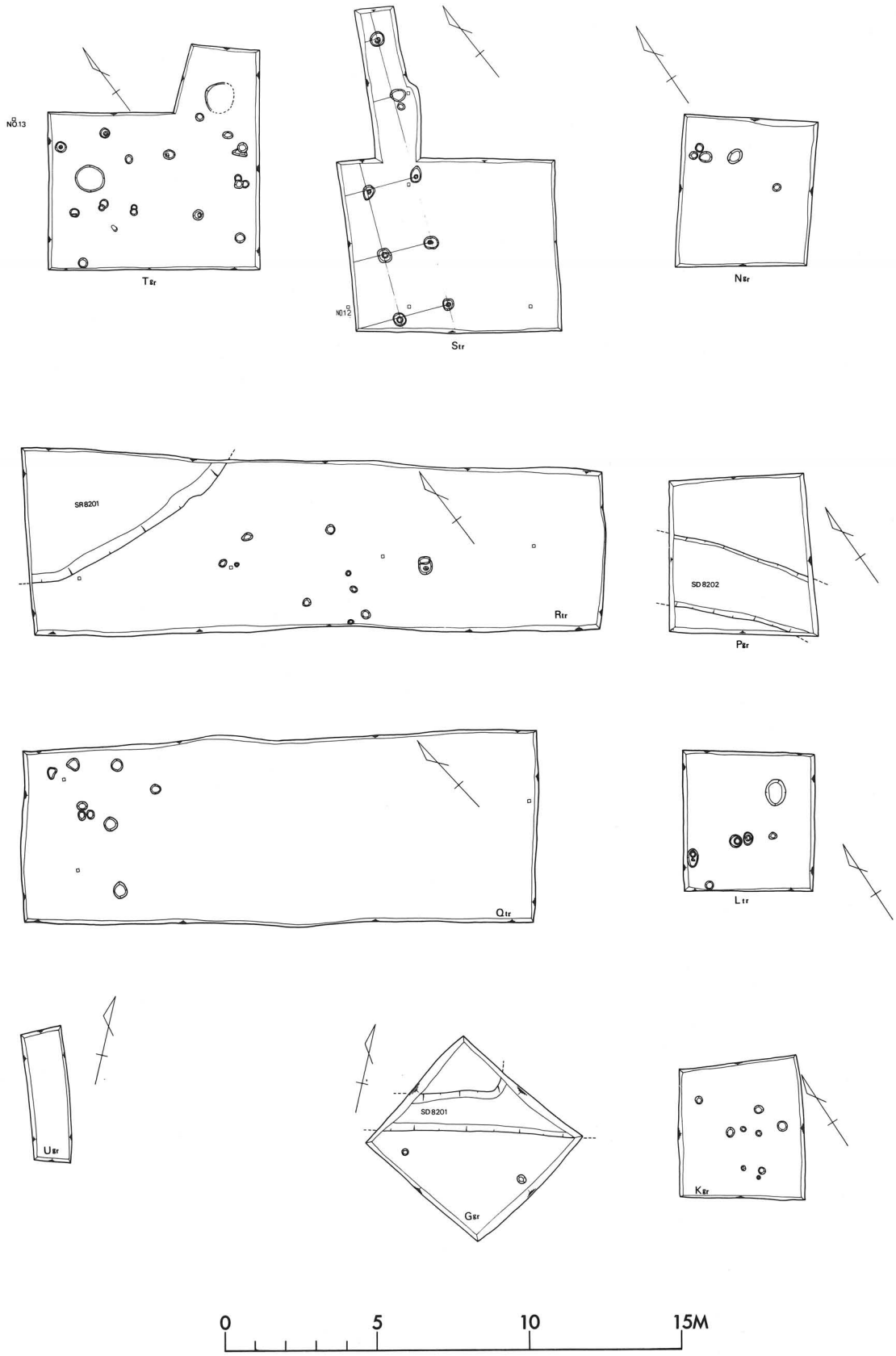
8月22～25日　Ｃ・Ｆ・Ｊトレンチ実測作業。

8月26～28日　Ｄ～Ｋグリット実測作業。

8月30・31日　Ｉ～Ｔグリット、トレンチ実測作業。本日をもって現地調査を完了する。



第6図　法養寺遺跡A～C・F・G・Jグリッド・トレンチ平面実測図



第７図　法養寺遺跡G・K・L・N・P～Uグリッド・トレンチ平面実測図

4．遺構（第6～8図、図版二～七）

今回検出した遺構は掘立柱建物５棟、土壙２基、溝２条、河川跡１条等と数基の柱穴群である。

Ａトレンチ　掘立柱建物１棟を検出した。

ＳＢ8201　桁行４間（9.8、10.3m）、梁行４間（9.3m）、床面積約93.5㎡の規模をもつ東西棟建物である。建物内に束柱が認められ、総柱建物に近い。建物の方位はＮ33°50′Ｅを示す。柱間は桁行2.6m、梁行2.3mを測り、柱穴は平面円形を呈し、掘方は直径0.3～0.5m、柱痕は約0.15mを測る。建物はやや台形を呈するものの、各柱列はよく揃う。

Ｃトレンチ　掘立柱建物ＳＢ8202・8203、土壙ＳＫ8201・8202と数基の柱穴とがある。

ＳＢ8202　ＳＢ8201の西側約21mにあり、桁行４間（8.8m）、梁行３間（7.6m）の南北棟建物で、床面積約66.9㎡を測る。この建物も束柱をもち総柱建物に近い。方位はＮ34°Ｅを示し、ＳＢ8201とほぼ同値である。柱間は桁行2.0～2.3m、梁行2.2～2.6mを測り、建物西側の柱間が狭い。各柱列はよく揃う。柱穴は平面円形を呈し掘形の直径は0.3～0.4m、柱痕径は0.15～0.2mである。建物内にはＳＫ8201・8202がありＳＢ8203と重複する。

ＳＢ8203　ＳＢ8202の北西部と重複する建物である。桁行３間（6.9、7.1m）、梁行２間（4.3m）、床面積約30.1㎡の規模をもつ東西棟建物で方位はＮ33°50′Ｅを示す。柱穴のうち東側中央の妻には柱は認められず、桁行の南列と北列の柱間は等間ではない。柱間は桁行北列で2.2～2.4m、南列は1.6、3.2、2.3mの不等間である。梁行西側は2.15mの等間である。柱穴はすべて平面円形を呈し掘形の直径は0.3m、柱痕径は0.1mと細い。この建物も総柱建物と思われるが、東から２列目の梁に大きな歪みをみる。

ＳＫ8201　ＳＢ8202の北東隈にある土壙で、平面円形を呈する。直径1.0mを測り、底部は丸く最深部で0.24mある。土壙内から山茶埦の出土をみた。

ＳＫ8202　ＳＫ8201の南西約３mに位置し、ＳＢ8202の東側隈にある。平面楕円形を呈し、長辺1.15m、短辺0.55mを測り、底部は丸く舟底状を呈する。深さは0.06mである。

Ｇグリット　溝ＳＤ8201と溝に平行する柱穴２基を検出した。

ＳＤ8201　ほぼ東西方向にのびるもので、Ｎ80°30′Ｅを示す。長さは６m以上、幅1.2mを測り、断面Ｕ字形を呈し、深さは0.4mである。東側で北辺のみ北方へ屈曲する。その屈曲部から須恵器杯蓋が１点出土した。

Ｊグリット　掘立柱建物ＳＢ8204と数基の柱穴を検出した。

ＳＢ8204　ＳＢ8201の北約30mにあり、桁行４間（6.3m）、梁行２間（3.9m）、床面積約24.6㎡の規模をもつ南北棟建物である。方位はＮ23°Ｅを示し、上記の３棟より約10度西へ振る。柱間は桁行1.5・1.9m、梁行1.5・2.4mで、柱筋はよく揃うが、柱間は一定ではなく歪みがみられる。柱穴の掘形は平面円形と楕円形を呈し、直径0.3～0.5mを測り、柱痕は直径0.15mである。他の３棟と比して掘形は大きい。

Ｋ・Ｌグリット　Ｋグリットからは直径0.05～0.1mの平面円形を呈した柱穴を７基検出した。柱穴の中には南北方向に柱筋を揃える３基がある。柱間は1.5mの等間隔であることから、建物の一部になる可能性がある。建物とすれば建物の西側部分になるであろう。

Ｌグリットには６基の柱穴がある。柱穴の並びは不規則である。

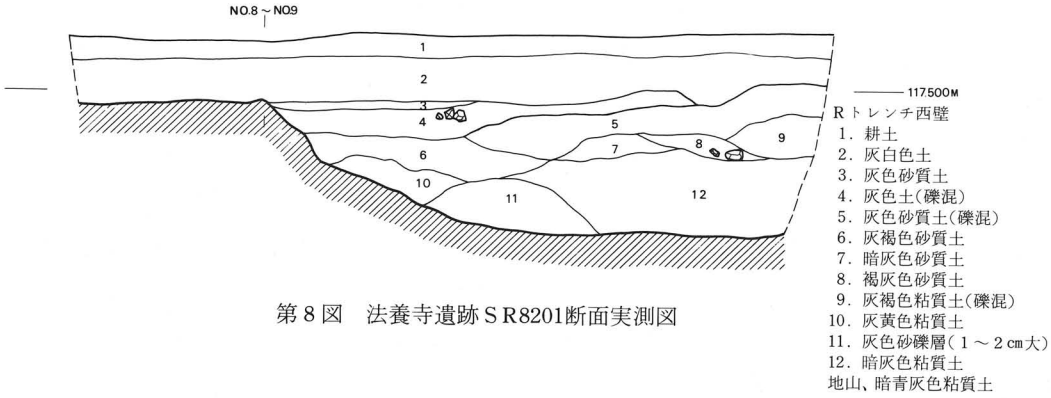
Ｎ・Ｐグリット　Ｎグリットには５基の柱穴がある。Ｌグリットと同じく建物を推想できない。

Ｐグリットからは南東から北西にのびる溝ＳＤ8202を検出した。長さは５m以上、幅は0.2～0.25mを測り、

深さは0.15mである。

Q・Rトレンチ　ほ場整備第3号小排水路に設定したトレンチで、Qトレンチからは柱穴9基を、Rトレンチからは河川跡SR8201と柱穴10基検出した。

SR8201　東から西方に流れる河川跡で、南側肩部を検出した。長さは7.5m以上、幅4m以上を測り、深さは1.2 mである。埋土は灰色系の砂礫層が堆積し、上層4～6.10層に多くの遺物を包含する。



第8図　法養寺遺跡SR8201断面実測図

Sトレンチ　掘立柱建物SB8205を検出した。

SB8205　桁行4間以上（9m以上)、梁行1間以上（1.7m以上）の規模をもつ。方位はN23°Eを示しSB8204と同一方向である。柱穴は平面円形を呈し掘形の直径は0.4m、柱痕径は0.15～0.2mを測る。柱間は2.0～2.6mである。柱筋は比較的よく通る。

Tトレンチ　直行0.1mまでの柱穴18基と直径約0.4mの柱穴を2基検出した。小柱穴の深さは浅く0.1m前後を測る。今のところ小柱穴の上部構造は明らかではない。

5．遺物（第9・10図、図版八）

今回の調査では、遺構の大部分が耕作土直下から検出されたため明らかな遺物包含層はなく、また、各遺構出土の遺物の残りも良好とはいえなかった。ここでは、比較的形態のとらえられるもので、遺構に伴なった遺物を中心に記述する。

ＳＢ8201　土師器皿（１・２）がある。ともに小皿で、１は口径10.5cm、器高2.0cm、２は復元口径10.4cmを測る。１は口縁部を２段にナデ、２は１段とする。胎土、焼成はともに良く赤褐色を呈する。

ＳＢ8202　土師器皿（３）、黒色土器埦（４）がある。３は口径9.2cm、器高1.6cmの小皿で、口縁部を２段になで、内面を乱ナデする。底部外面に指圧痕を残す。４は内面のみ黒色のいわゆる「近江型黒色土器」である。口縁内面端部に１条の凹線をめぐらし、内面をヘラ磨きするのであるが、摩滅のため詳細な施文は明らかでない。復元口径12.6cmを測る。胎土は良く、焼成はやや軟質で淡赤褐色を呈する。

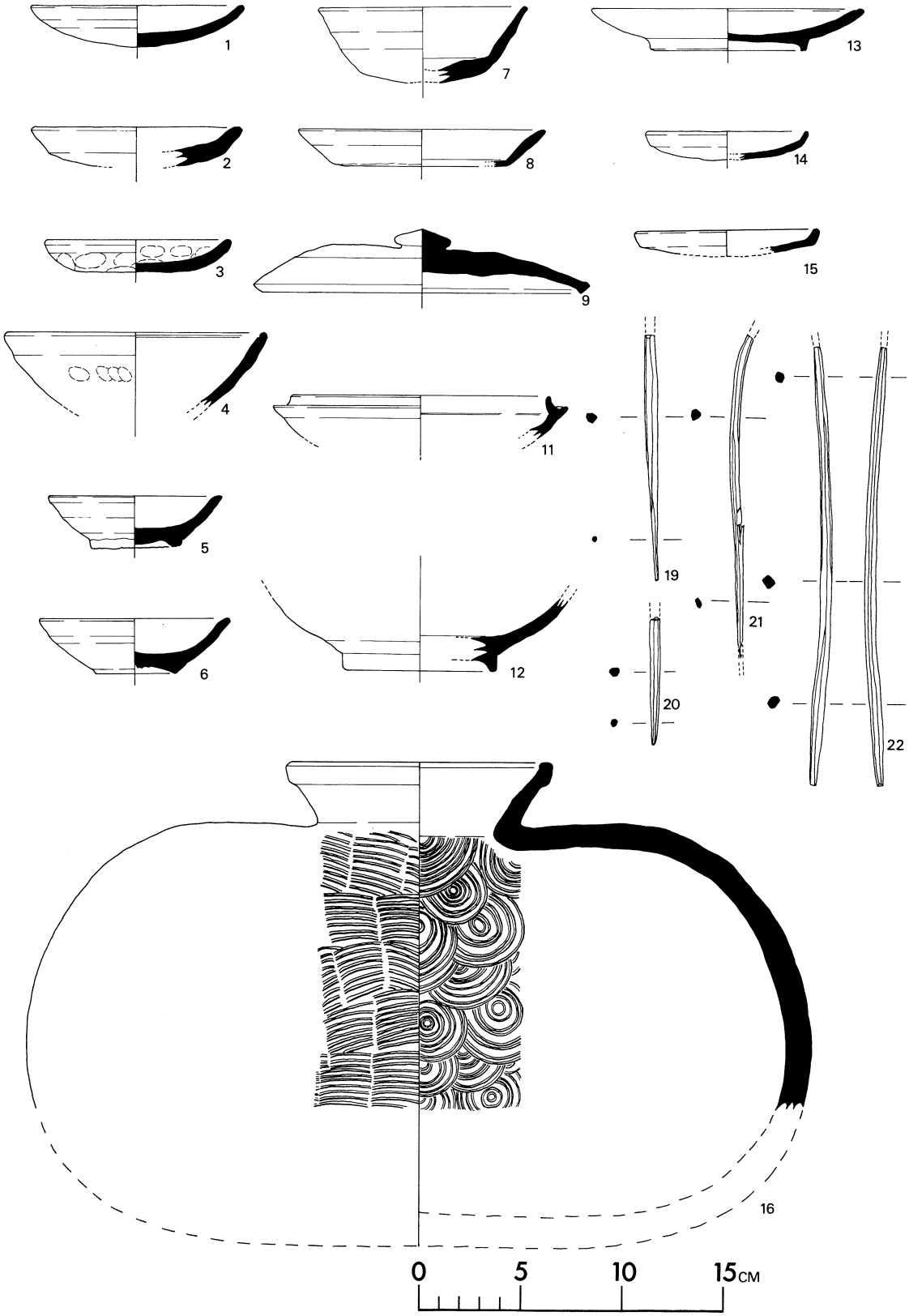
ＳＫ8201　山茶埦（５・６）の２点が出土した。ともに完形の小埦である。５は口径8.4cm、器高2.6cm、高台径4.5cmを測り、口縁端部はわずかに外反する。高台は断面台形を呈し、端部は凹凸する。底部外面に糸切り痕を残す。６は口径9.3cm、器高2.7cm、高台径3.9cmを測る。口縁端部は外反し、高台は断面三角形を呈する。胎土はともに砂粒を含み、焼成は良い。色調は淡灰色を呈し、所々に緑色の自然釉が付着する。

ＳＢ8205　須恵器杯身（７）、土師器皿（８）、陶器甕(18)がある。７は平底の杯身で底部に丸味を残す。底部外面はヘラ切りのままである。復元口径10.3cmを測る。胎土は堅緻、焼成は良く青灰色を呈する。８は復元口径12.2cmの中皿である。底部と口縁部との境界は明瞭で、器壁は薄い。胎土、焼成は良く淡赤褐色を呈する。18は常滑製品の大甕である。口縁部は大きく外反し口径32.2cmを測る。肩はよく張り出し直径50.4cmあり、肩部まで釉は溶けて流れる。内面には粘土紐づくりの痕跡をよくとどめ、幅1.2～2.8cm粘土紐を接ぐ。体部外面の最大径付近に平行タタキの押印を施し、その下位は部分的に格子状にたたく。胎土は堅緻で焼成は良好である。色調は淡紫褐色を呈し釉色は淡緑黄色である。

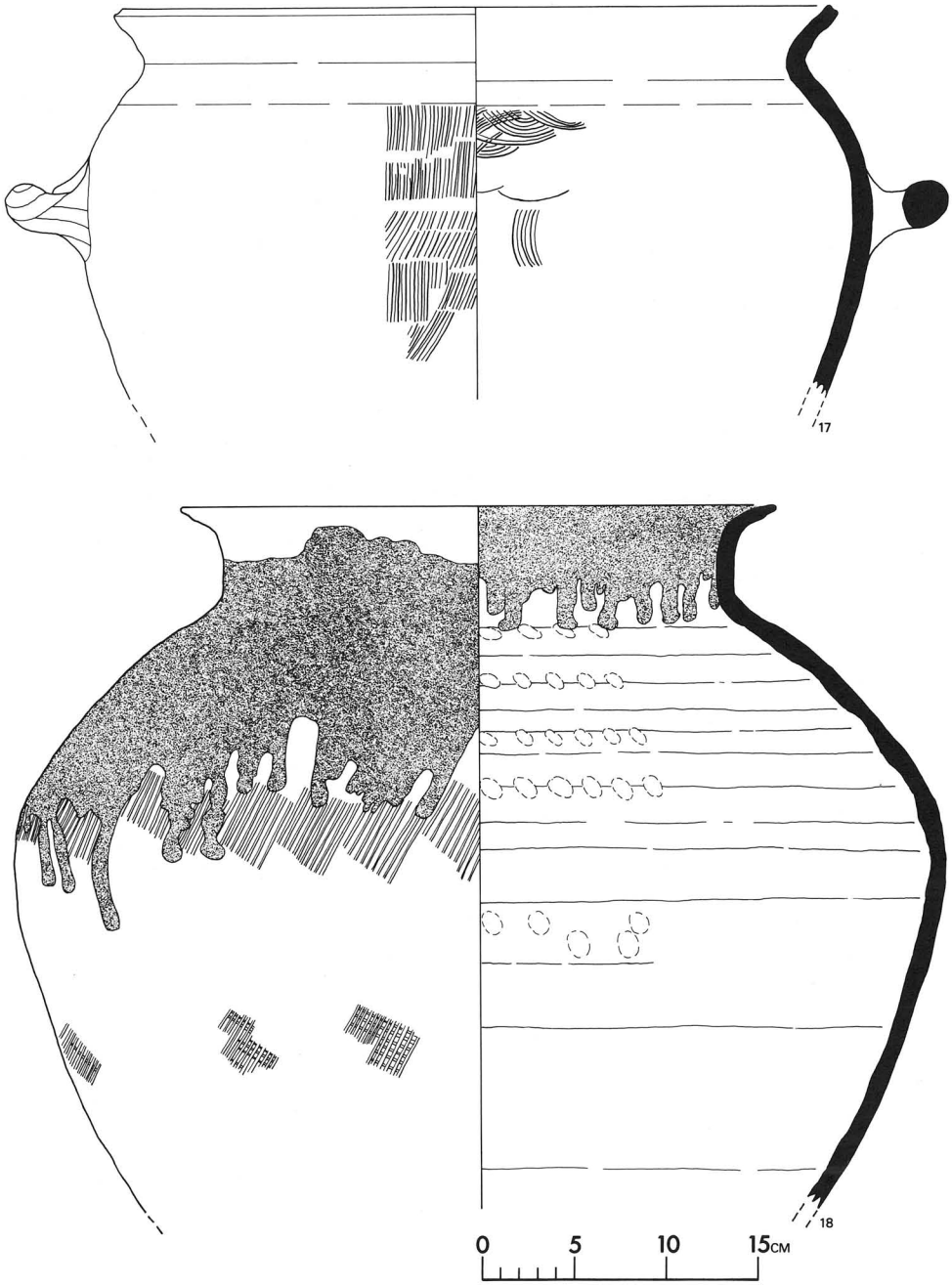
ＳＤ8201　須恵器杯蓋（９）がある。天井に擬宝珠状のつまみをつけ、口縁端部をわずかに垂下さす。天井部約１／２をヘラ削りし、他はていねいに横ナデ調整を施す。口径15.6cm、器高3.1cmを測る。胎土は堅緻、焼成は良く淡灰色を呈する。

ＳＲ8201　須恵器横瓶(16)・甕(17)、木製品箸(19～22)と他に須恵器、土師器の破片や木器では板材・箸・薪材などの出土品もある。16は横長の体部上面中央部に外反する口縁部をつけるもので、口縁端部を肥厚させ内側に段をもつ。口径は12.2cmである。体部外面は平行タタキを密に施し、内面に円形浮文を残す。胎土に砂粒を含み、石英粒もある。焼成は良く青灰色を呈する。17は広口短頸の甕で、体部最大径部に半環状の把手を付ける。復元口径38.4cmを測り、体部と変らない法量である。口頸部は丸く屈曲し、端部に面をもつ。体部外面は平行タタキを施し、内面は円形浮文の上をかるくなでる。胎土に砂粒を多く含み、小石もある。焼成は良く白灰色を呈する。箸は合計で15本出土した。このうち22はほぼ完形に近く21.5cmを測る。直径は中央部で約0.6cmあり４ないし５面に削り、両端は直径約0.3cmで６から７面に削り尖らす。21は残存長15.5cm、中央部直径約0.6cmで６面に削り、先端は直径0.3cmあり５面に削る。19は残存長12.0cm、中央部直径約0.7cmで６面に削り、先端はよく尖り0.15cmである。20は残存長6.3cmあり、端部を６から８面に削り先端径は0.15cmである。これら箸の使用材質はヒノキである。

Ｌグリット出土遺物　須恵器杯身(11)、灰釉陶器皿(13)がある。柱穴から出土した。11は立ち上りをもつ器



第９図　法養寺遺跡出土遺物実測図(1)



第10図　法養寺遺跡出土遺物実測図(2)

で、立ち上りは短かく端部を丸くおさめる。胎土は堅緻、焼成は良く青灰色を呈する。13は口径13.4cm、器高3.0cm、高台径7.8cmを測る平皿で、口縁部は内弯ぎみに外方へのびる。端部内面に浅い段をもつ。底部外面に回転糸切り痕を残す。高台は粗雑な造りで低い。胎土・焼成は良く乳灰褐色を呈する。

Qトレンチ出土遺物　土師器皿(14・15)、灰釉陶器埦(12)が柱穴から出土した。14・15は器壁の薄い小皿で、口縁部を1段にナデ、わずかにつまみ上げる。15の口縁端部はやや肥厚になる。底部は丸味をおび未調整である。復元口径9.1cmで胎土・焼成は良く淡黄白色を呈する。12は体部の一部のみ遺存する埦で、高台の造りは良い。内面に淡緑灰色の施釉をみる。胎土・焼成は良く、素地は淡茶灰色である。

つぎに、今回出土した建物について若干の検討を加えてみることにする。

ＳＫ8201出土の山茶埦５・６は法量的にかなり小型化した小埦で、高台は粗雑な造りになり高台のつく小埦では終末的要素をもつ。このような特徴は瀬戸窯山茶埦の第Ⅱ段階第４型式[5]に類例を求めることができ、編年的には12世紀第３四半期に比定されよう。また、灰釉陶器12は折戸53号窯期[6]の新しいタイプの特徴に似る。この期のタイプは11世紀代に下る可能性を持ち、山茶埦出現期前の灰釉陶器と考えられよう。

大甕18は外反する口縁部の端づくりのシャープなこと、肩の張り出しなどから重要文化財である和歌山県比井若一王子神社経塚出土大甕や愛知県西椎ノ木山古窯出土の製品に類似性を求められ[7]、12世紀後葉に位置付けが可能であろう。

ＳＢ8201・8202出土の土師器小皿１～３は口縁部を１段と２段に横ナデ調整するもので、法量的にも平安時代後期の特徴をそなえている。平安京編年のⅥ期の古～中期に相当し[8]、類例は高島町中ノ坊[9]、愛知川町市遺跡[10]から出土する。黒色土器４も同時期に比定される。

ＳＤ8201出土の須恵器杯蓋９は擬宝珠のつまみ、口縁部、天井部の形態から陶邑編年Ⅳ型式２段階[11]、橿木原編年Ⅳ類２段階[12]に相当し平城宮のⅢ期[13]の遺物に似る。その他この時期に相当する遺物としてはＳＲ8201出土の横瓶16と甕17があり、同一層から出土した箸もこの時期の製品と考えてよいであろう。横瓶は大津市野畑遺跡[14]のＳＥ002 出土の横瓶と近似し、８世紀第２四半期頃に比定されよう。

6．まとめ

今回の調査は、法養寺遺跡の西側を対象とした。遺跡は小字不動葛城・下窪葛城・藤ノ木・橋ノ向にかけて拡がり、さらに西へも拡がることが判明した。

ＳＢ8201～8203は出土遺物から平安時代中期から後期までの時期に比定することができ、ＳＢ8204も前者の建物と時期差はないと思われる。建物相互の位置関係をみると、ＳＢ8201は東西棟を主軸にもち、ＳＢ8202は南北棟建物であることから、Ｌ字状に配置された建物群としてとらえることができる。両建物はいづれも束柱をもつ倉庫的建物とみられ、床面積はＳＢ8201の方が約27㎡拡い。また、ＳＢ8202は建て替えとみられるＳＢ8203や土壙と重複するのに対し、ＳＢ8201は重複するものはない。

ＳＢ8204は４間×２間の建物で住居と考えられる。この建物の近くから検出された柱穴は、他に数棟の建物の存在を示唆したものとしてとらえることができ、ここにＳＢ8204を中心とした建物群を想定することはできないであろうか。

また、ＳトレンチのＳＢ8205も全貌は検出していないが、倉庫とみられるもので、ここにも１群を想定することは可能と思われる。さらに、ＳＲ8201の南側からも多数の柱穴を検出していることから、ＳＲ１の南側に建物群を想定できる。

このように考えると、今回の調査対象地では合計３群の建物群を想定することができ、仮に南からＳＢ8201～8204をＡ群、ＳＲ8201の南側柱穴群をＢ群、ＳＢ8205を中心とするものをＣ群と番号を付す。

調査地区の南側に位置するＡ群についてみると、北側に住居状建物を配し、南側にＬ字状に倉庫群を配置する。本来は住居区としたところにはもう少し多くの建物があったと思われる。倉庫建物は床面積を約70㎡と93㎡と大きな規模をもち、柱穴は完全な総柱建物ではない。柱の認められないＳＢ8201の中央部、ＳＢ8202の東側を土間と考えることはできないであろうか。ＳＢ8202はその部分に土壙をもち、土間とするのが最も妥当と思われる。柱のある部分は板敷と考えられ、納屋的性格もあったのではないだろうか。

時期は少し遡るが、平安時代前葉の草津市岡田追分遺跡[15]は５棟から10数棟の建物が５～６ヶ所に集在し群を構成している。最もよくまとまっているｂ群を概観すると、９棟の建物は同一方位に建てられ、東側を住居区に、西側に倉庫・納屋をはさんで配置され、南側に井戸をともなっている。丸山氏は「この数棟１群こそ、当時の農業生産の経営の単位」[16]とし、いわゆる家父長制的世帯共同体と呼ばれるものであるとしている。

つぎに、岡田追分遺跡に後続する遺跡として志那中遺跡[17]がある。この遺跡からは平安時代後期から鎌倉時代にかけての掘立柱建物が確認されている。建物規模は岡田追分遺跡より小さく、建物の群構成はみられず１棟づつ散在し、建物方位、配置に規則性はない。さらに、倉と思われる建物は確認されていない。これは、調査範囲の規模による結果かもしれない。ともあれ、検出された建物は40～50ｍの間隔で１棟１単位に数単位が存在していた。その間は水田地帯であったとしている。

このことから、丸山氏は志那中遺跡を「古代を切り抜けた農民の、中世的世界をうかがうことができるであろう。」とし「岡田追分遺跡でみられた家父長制的世帯共同体の自立した各房戸に分立した形態である」と述べている。さらに、倉をもたないことから「律令国家体制の崩壊にともない、条里地域、いわば水田地帯に農家が進出し、従来からの耕地と宅地の明確な分離がなくなり、経営主による作人への耕地への耕地の割り付けとして散村を形成せしめた」と結論づけている[18]。

上記のことから、当遺跡の建物配置を検討してみると、建物の群構成は岡田追分遺跡に近似した形態をもつ

といえよう。ただ、時期的には律令体制の崩壊期にあたり、急速に単位集団である家父長制的世帯共同体の解体が進行し、荘園制的領域支配の成立する時期に相当するといえよう。

こうした状況下における法養寺遺跡は、12世紀中頃にあっても家父長制的世帯共同体の労働単位は存在しており、共同体的な機能は依然として展開していたとみることができよう。

律令制下村落から初期中世村落への過渡期の中で、法養寺遺跡は甲良荘の一つとして律令制村落を基盤とした勢力を守りつづけていたのであろう。

最後に、A・C・Jトレンチ等で検出された遺構は、県農林部との協議の結果、水田高を計画高より15cm上げることによって、現状で保存することになった。

註

① 池野　保　成瀬弘明『滋賀県指定有形文化財甲良神社本殿修理工事報告書』(滋賀県教育委員会　昭和57年)

② 滋賀県教育委員会　昭和55年度『滋賀県遺跡目録』(昭和56年)

③ 前掲書2

④ 竹内理三他編「25　滋賀県」『角川日本地名大辞典』　(角川書店　昭和54年)

⑤ 藤沢良祐・宮石宗弘『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅱ　(瀬戸市歴史民俗資料館　昭和58年)

⑥ 藤沢良祐・宮石宗弘『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅰ　(瀬戸市歴史民俗資料館　昭和57年)

⑦ 楢崎彰一編『日本の陶磁』古代中世篇　第4巻　常滑　渥美　猿投(中央公論社　昭和51年)

⑧ 宇野隆夫・泉　拓良他『京都大学埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ(京都大学埋蔵文化財研究センター　昭和56年)

⑨ 兼康保明他「高島町中ノ坊遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告』Ⅴ　滋賀県教育委員会　(財)滋賀県文化財保護協会　昭和53年

⑩ 葛野泰樹　徳網克己『市遺跡発掘調査概要』Ⅰ　(愛知川町教育委員会　(財)滋賀県文化財保護協会　昭和58年)

⑪ 中村　浩「陶邑」Ⅰ～Ⅵ(『大阪府文化財調査報告』第28～31輯　大阪府教育委員会　昭和51～54年)

⑫ 林　博通・葛野泰樹他『榿木原遺跡発掘調査報告』Ⅲ(滋賀県教育委員会　(財)滋賀県文化財保護協会　昭和56年)

⑬ 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅶ(昭和57年)

⑭ 林　博通・栗本政志「近江国府関連官衛跡の調査」大津市瀬田野畑遺跡の調査概要(『古代文化』第35巻第1号　昭和58年)

⑮ 大橋信弥他「草津市追分岡田追分遺跡調査報告」(『滋賀県文化財調査年報』昭和50年度　滋賀県教育委員会　昭和52年)　大橋信弥「草津市追分岡田追分遺跡調査報告」Ⅱ(『滋賀県文化財調査年報』昭和51年度　滋賀県教育委員会　昭和53年)

⑯ 丸山竜平他「律令制期の草津」(『草津市史』第一巻　草津市役所　昭和56年)

⑰ 大橋信弥・谷口　徹「草津市志那中遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告所』Ⅴ　滋賀県教育委員会　(財)滋賀県文化財保護協会　昭和53年)

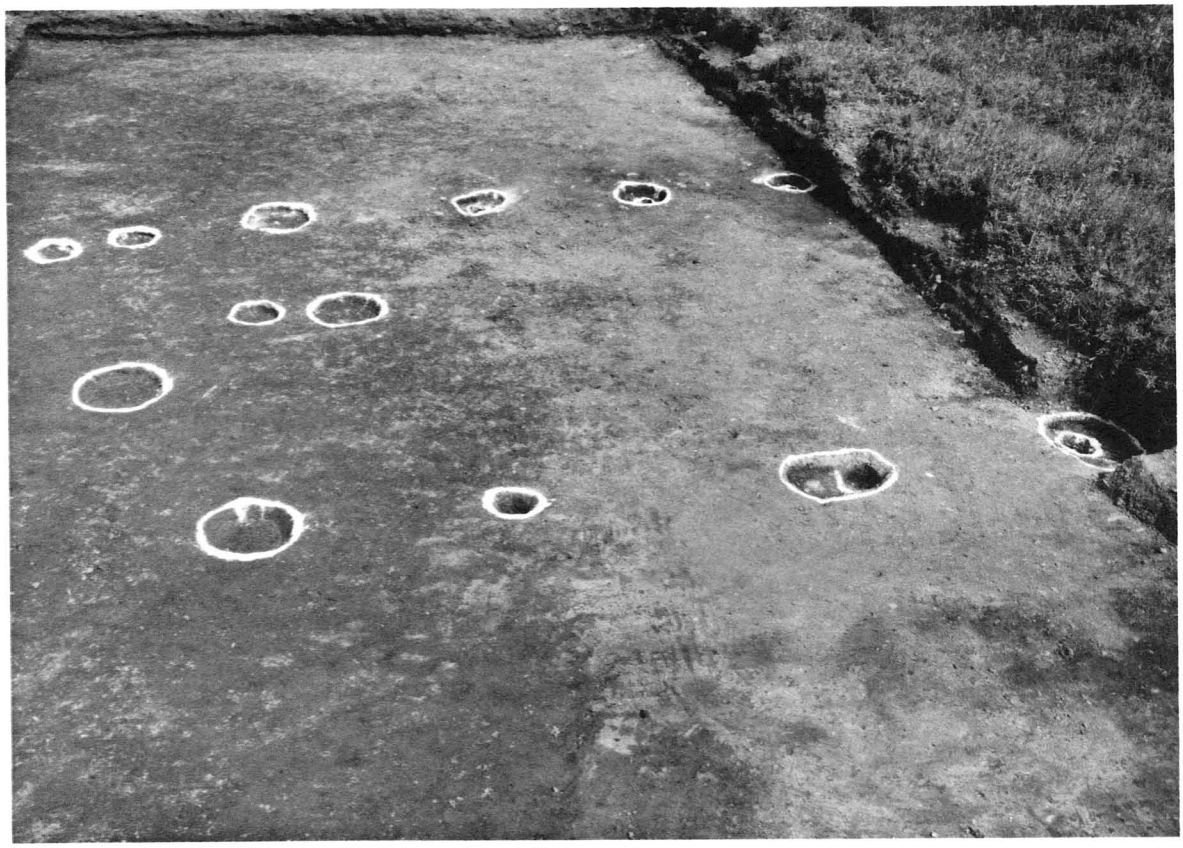
⑱ 前掲書16

1　法養寺遺跡調査地遠景（南から）

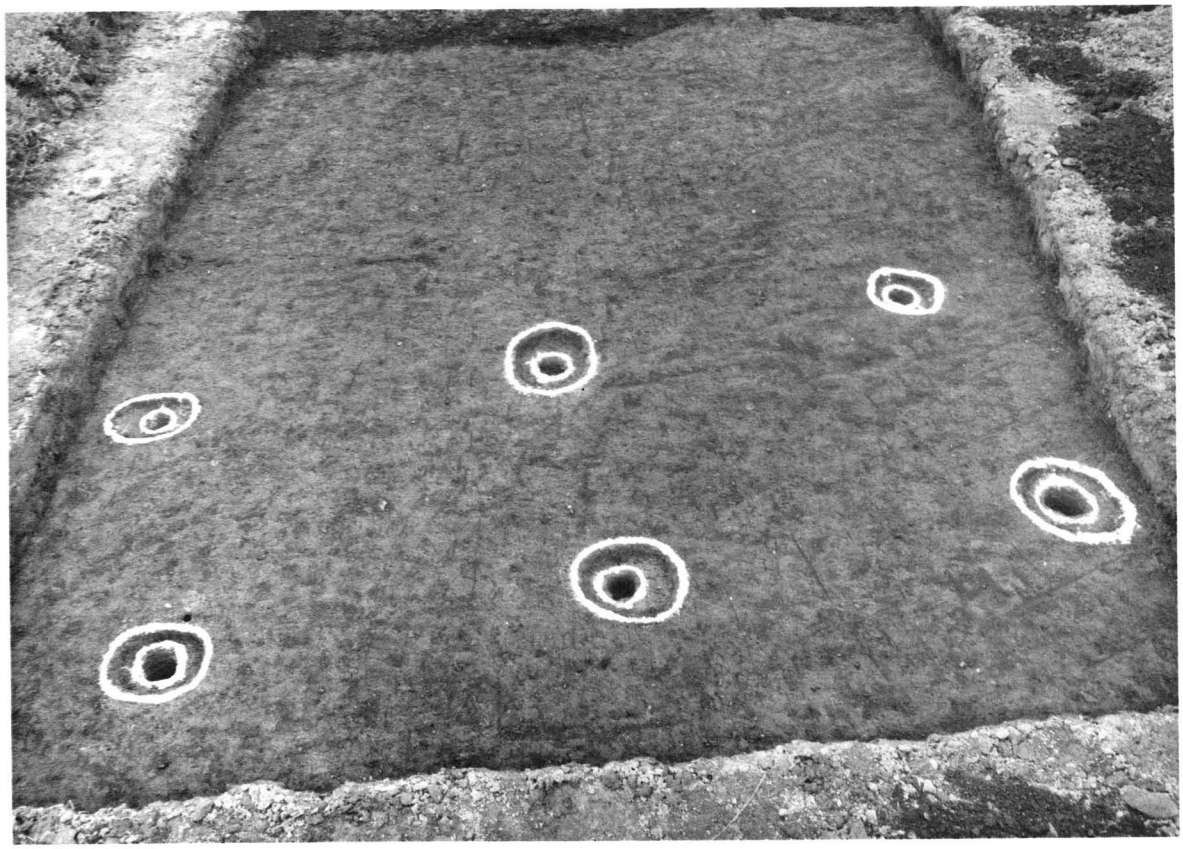
2　法養寺遺跡調査地遠景（北から）

1　Aトレンチ　SB8201（東から）

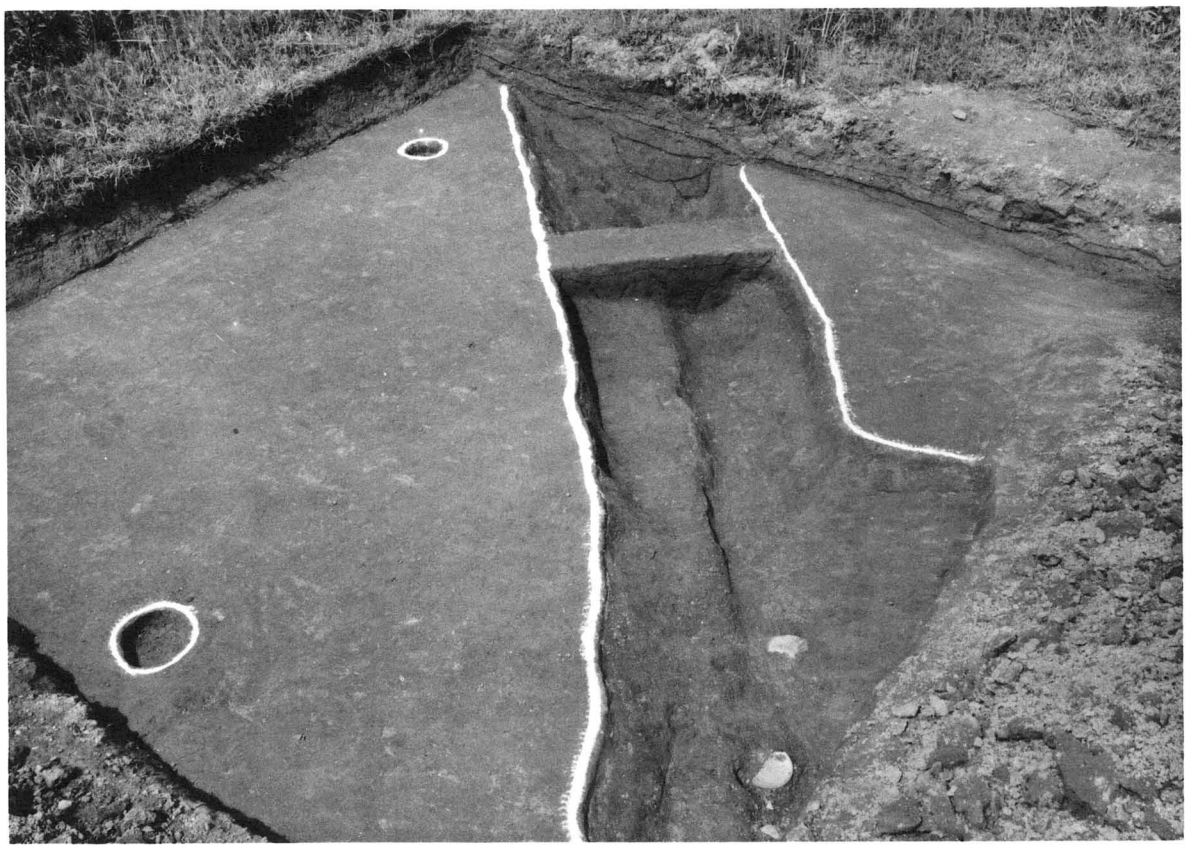
2　Cトレンチ　SB8202・8203（南から）



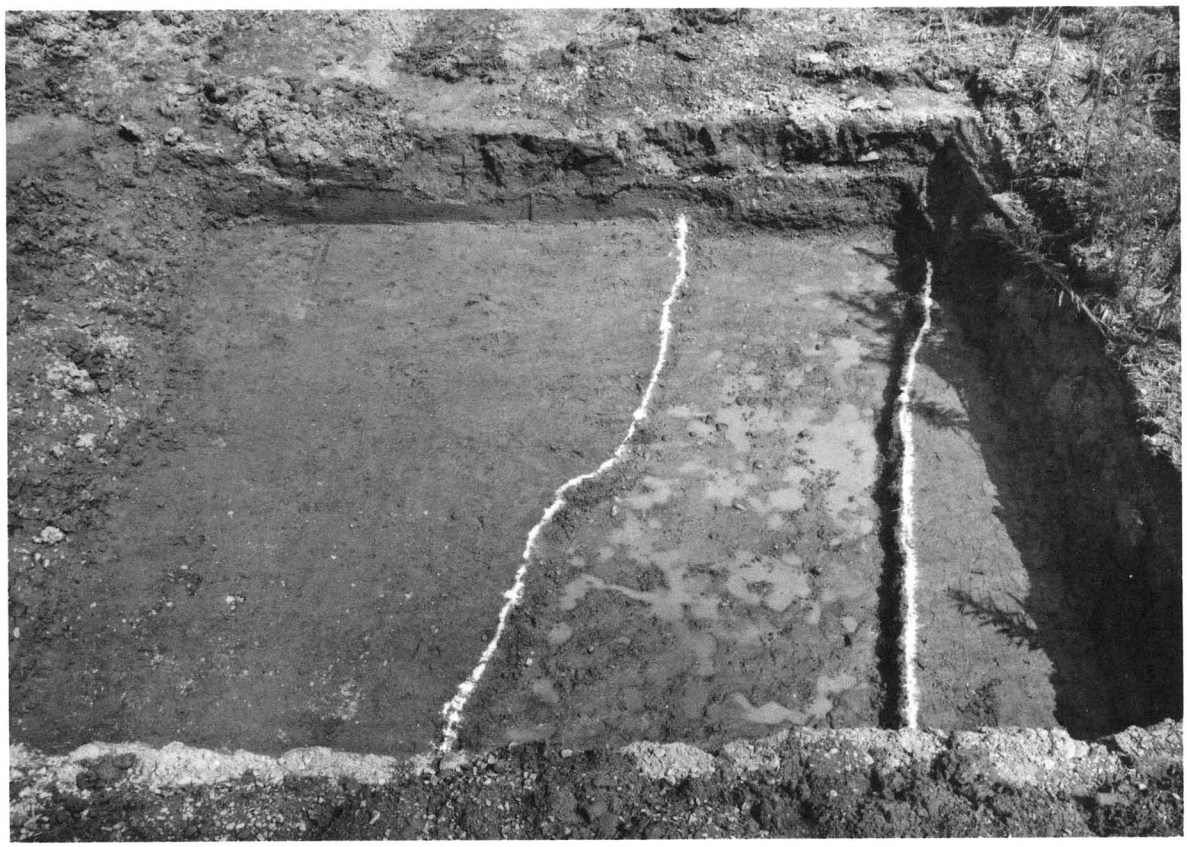
1　Jトレンチ　SB8204（西から）



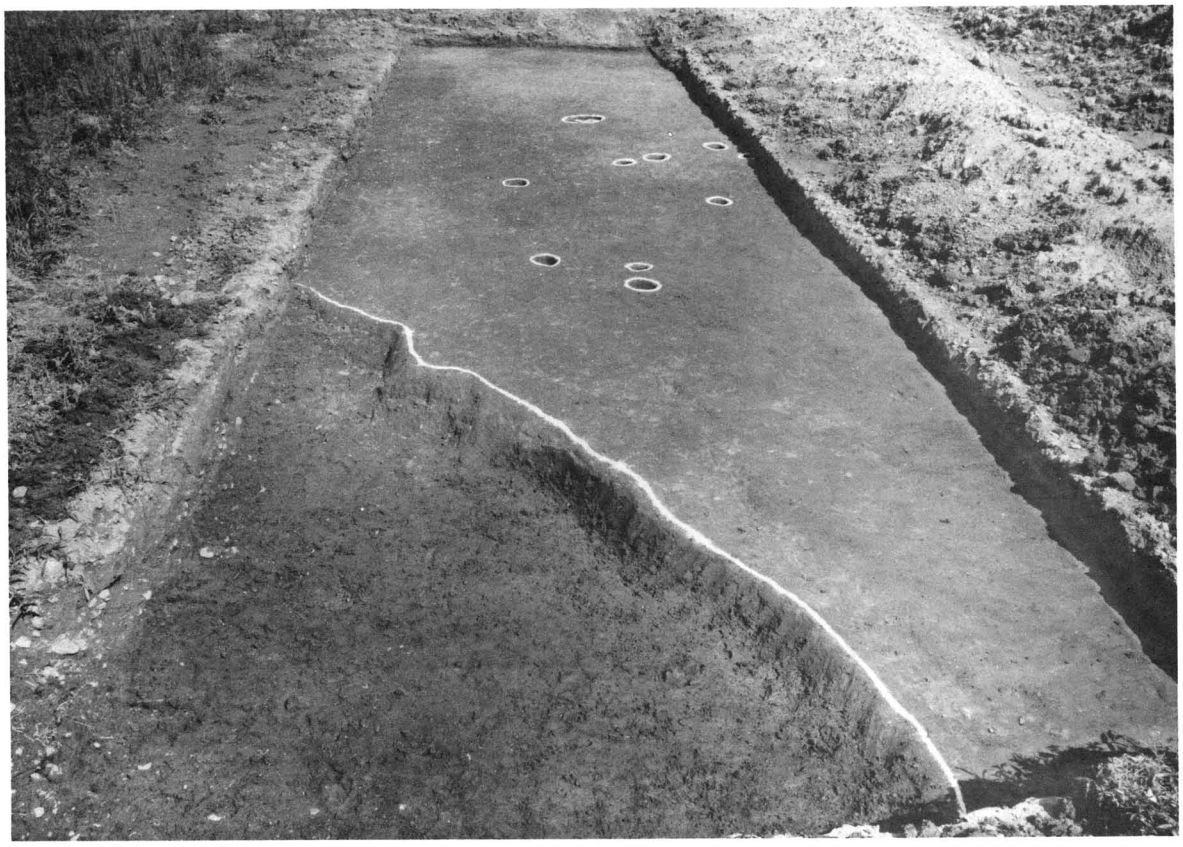
2　Sトレンチ　SB8205（西から）



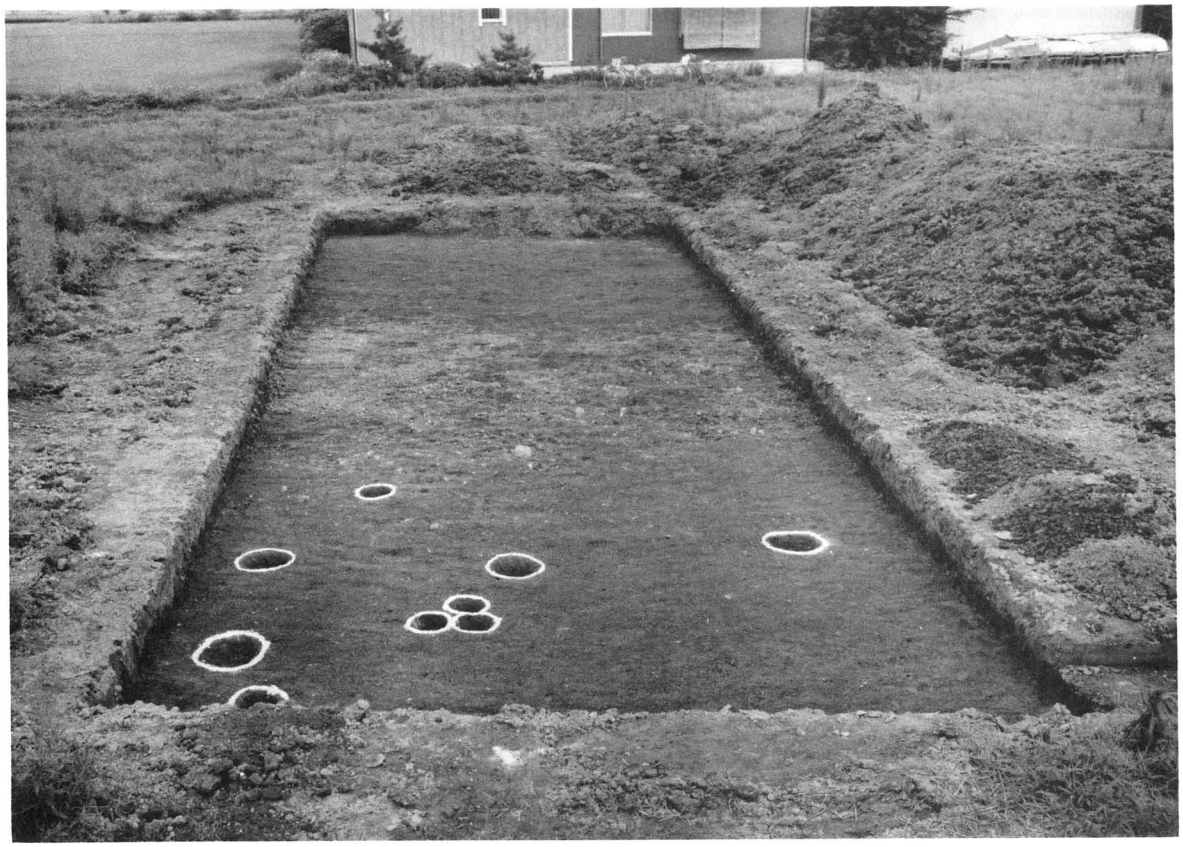
1　Gグリット　SD8201（東から）



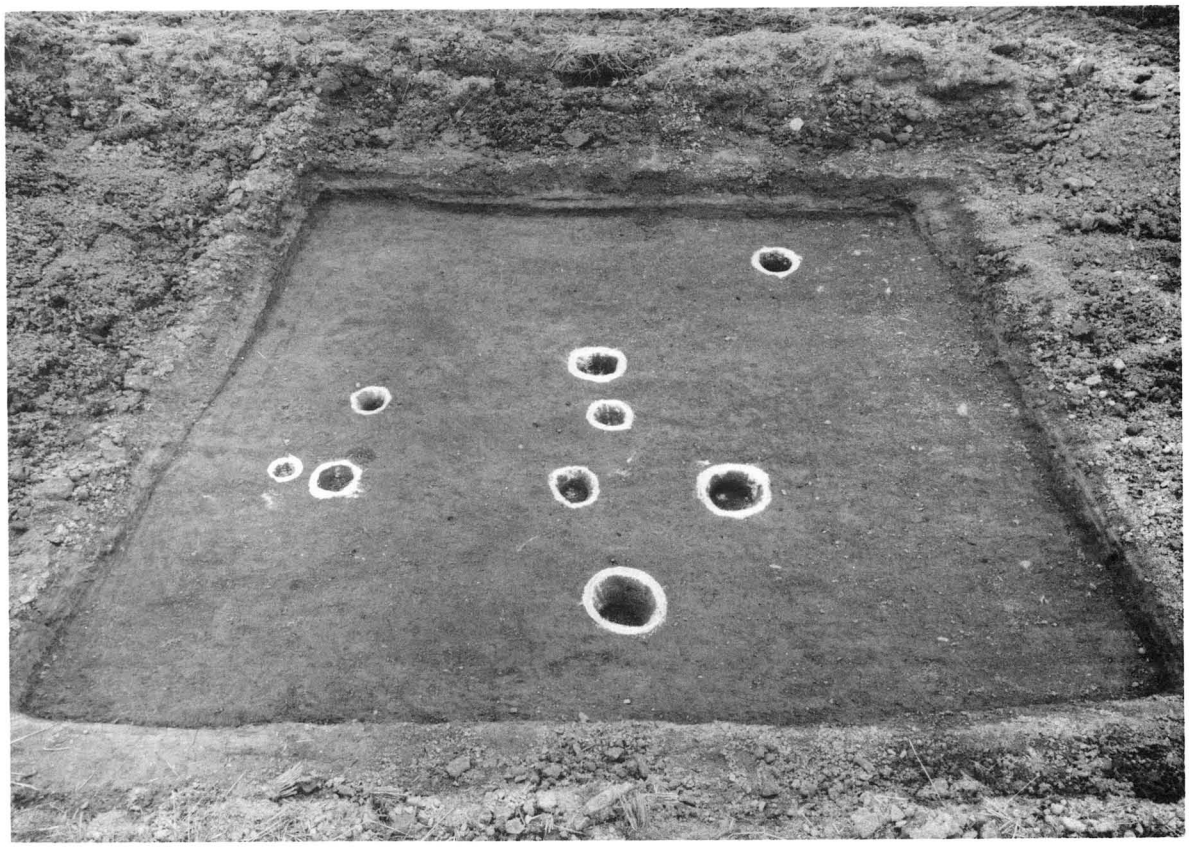
2　Pグリット　SD8202（西から）



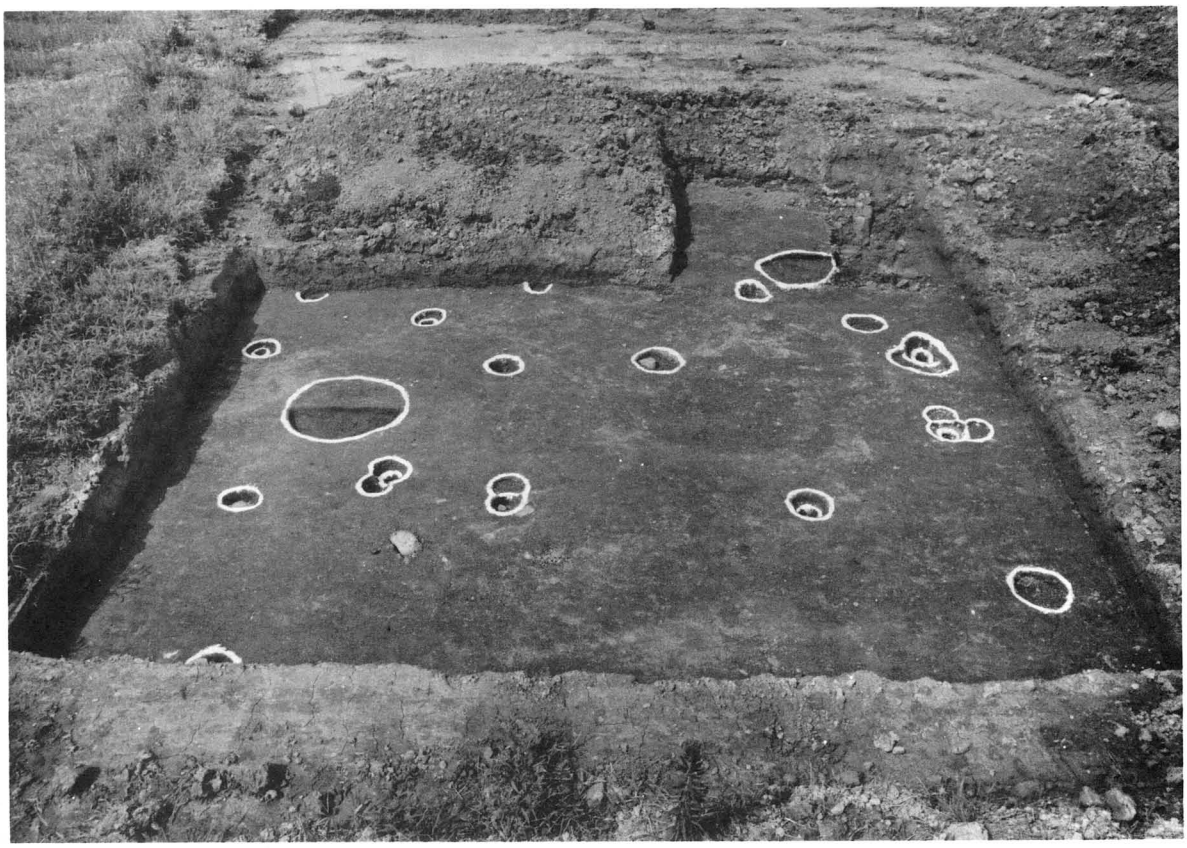
1　Rトレンチ　SR8201（北西から）



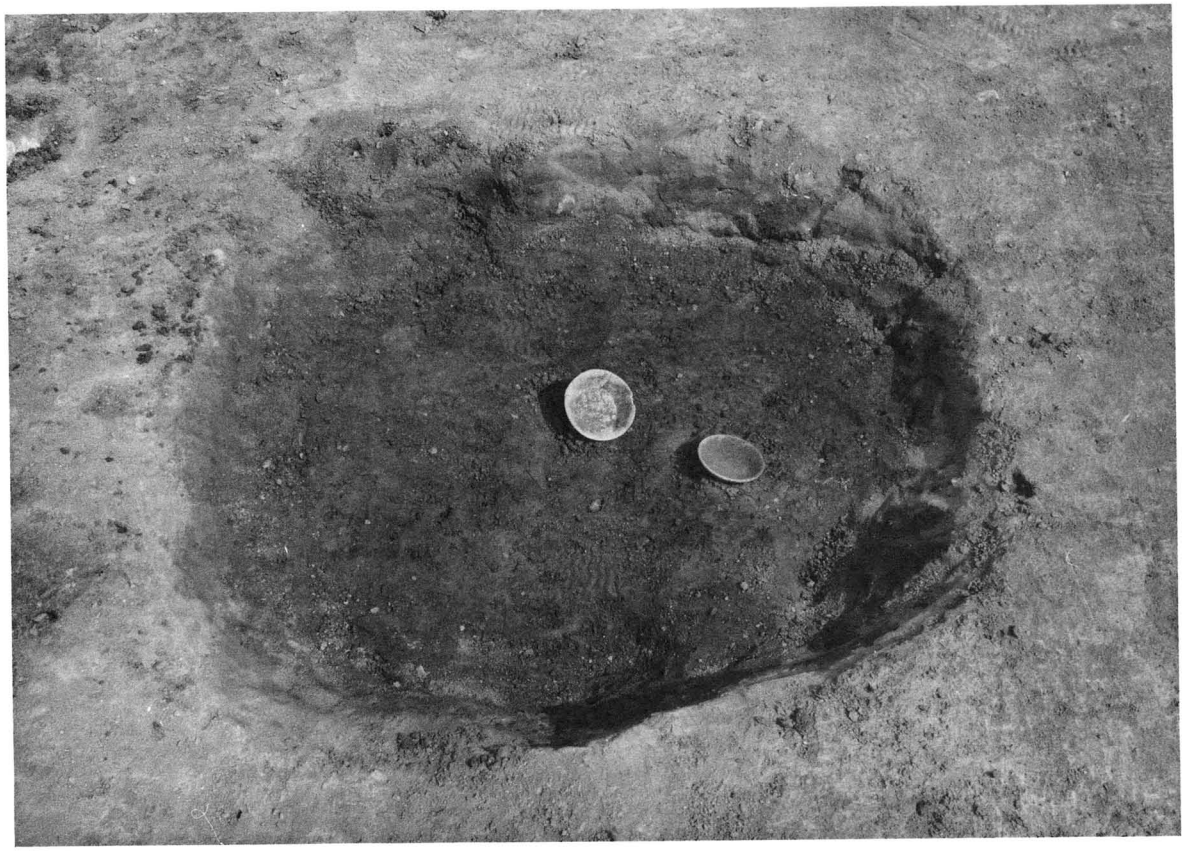
2　Qトレンチ（北西から）



1　Kグリット（北東から）



2　Tグリット（南西から）

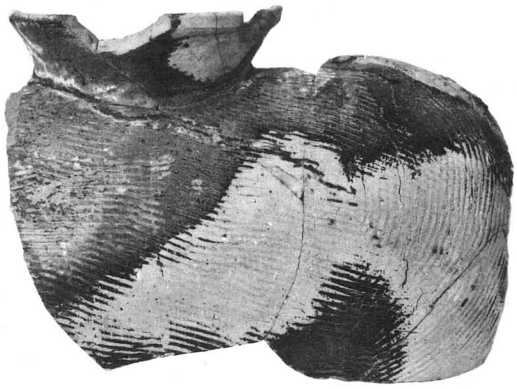


1　Cトレンチ　SK8201（南から）

2　Sトレンチ　SB8205柱穴遺物出土状況

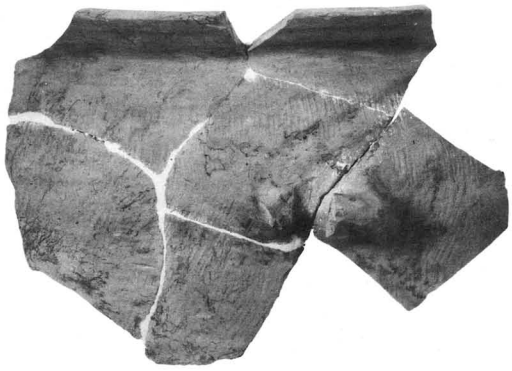
3

5



16

6



17

1

8

9

13

18

出土遺物

第２章 愛知郡湖東町薬師堂遺跡

1．はじめに

薬師堂遺跡は、湖東町立体育館建設のおり土師器の小皿が数点出土していたことから近くに遺跡の存在をいわれていた。その位置、範囲、性格等は詳みらかではなく、今日にいたっていた。従って、今回池庄地先で県ほ場整備工事（池庄第２工区）が約24 haにわたって実施されることになったため、事前に発掘調査を行ない、遺跡の範囲、性格等を明らかにし、遺跡の保存策を講じることになった。

薬師堂遺跡と関節的に関連づけられる文献に『近江愛知郡志』の以下の文章がある。「薬師（くずし）氏は薬師如来の名を負ふ。（中略）薬草採取の為に分置せられし氏族にて部人なり。蒲生郡鏡山村に大字薬師あり。本郡には地名は存せざれども貞観三年十月大国郷の田券に薬師安麿の名見ゆるは当郡に配置せられし薬師部の族ならん。」と記述している。そこでその田券をみると、

〔埼玉県大里郡吉身村根岸伴七氏所蔵文書〕

愛智郡大国郷戸主依知秦公福万解　申、依正税常士、売買墾田、立券文事

　十三条、十一里、一、川原田、壱段佰捌拾歩　西方直稲陸（六）拾束

右件墾田、正税稲陸拾束、充$_2$価直$_2$、限$_2$永年$_1$、奉$_{レ}$沽$_2$[　　]薬師安麿$_1$既詑、望請、依$_{レ}$式、立$_2$券文$_1$、如件$_1$　仍勒$_2$売買面人署名$_1$、以解

貞観三年十月十九日

墾田主　依知秦公福万
相　売　依知秦公福貞
依知秦公貞成
保證人、正八位下　依知秦公貞宗
秦忌寸　家継
従八位　依知秦公長吉
依知秦公又男
徴部正八位下　依知秦公干門
税領大初位下　依　知　秦　公
大初位下　依　知　秦　公
郷　長　若湯坐連

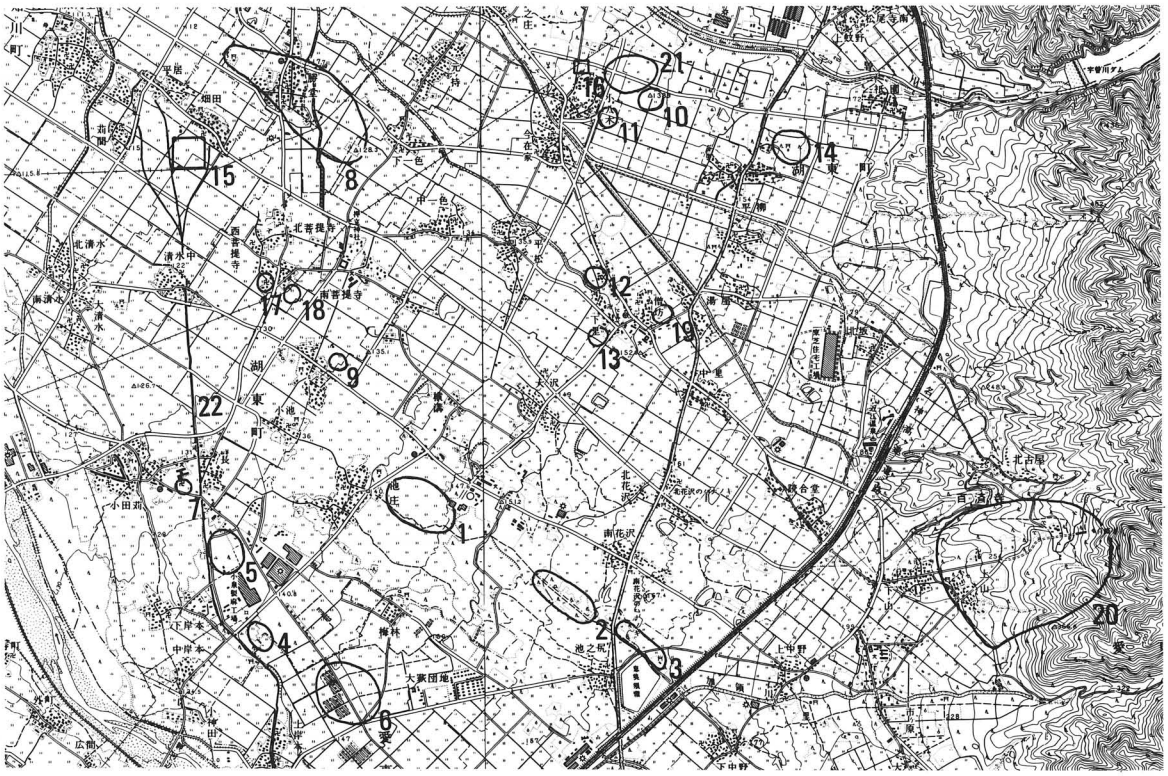
（紙面に郡印21を捺す）

とある。池庄は大国郷に属し、愛知郡内においても、『近江愛知郡志』でいうように薬師の地名を求めることはできない。しかし、当該地は小字薬師堂、栃林であることから、薬師堂にその名をあてることはできないであろうか。ただ、薬師安麿が大国郷に居住したのか、耕地を荘園として所有しそこに農業経営のため、農民を住まわせていたのか明らかではない。ともあれ、貞観三年(861)頃にムラかそれに準じる集落が存在していたと推察することは可能である。

調査は、文化財保護課が県農林部耕地建設課より予算（3,330,000円）の再配当を受け、財団法人滋賀県文化財保護協会へ委託して実施した。調査および整理期間は昭和57年４月から昭和58年３月までとした。

なお、調査にあたっては湖東町教育委員会をはじめ、地元池庄の方々に色々とお世話になった。ここに記し

て謝意を表します。



第１図　薬師堂遺跡位置図および周辺の遺跡（S＝$^{1}/_{50000}$）

１．薬師堂遺跡　２．八ツ塚古墳群　３．上田遺跡　４．高塚古墳群　５．中岸本古墳群　６．上岸本古墳群
７．小田苅古墳群　８．勝堂古墳群　９．平塚古墳　10．小八木東古墳群　11．小八木古墳群　12．天神古墳
13．カイゴメ古墳　14．平柳古墳群　15．畑田廃寺　16．小八木廃寺　17．菩提寺廃寺　18．南菩提寺廃寺
19．僧坊遺跡　20．百済寺遺跡　21．木戸口遺跡　22．愛知井跡

2．位置と環境

薬師堂遺跡は、滋賀県愛知郡湖東町大字池庄地先に所在する。当地は愛知川によって形成された上位河岸段丘が、愛東町大字池之尻から北西方向にのびる先端部に位置し、扇状地をなしている。地形の傾斜度は調査の対象となった南東端と北西端の高低差は約６ｍをみる。標高は調査対象地の中央部で約145ｍを測る。

当遺跡周辺には古墳群がかなり多く分布する。南東約１㎞の上位段丘上には八ツ塚古墳群８基、上田古墳群①、南西約1.5㎞の下位段丘上に高塚古墳群6 基、中岸本古墳群10基、上岸本古墳群26基がある。西方約1.5㎞には前方後円墳を含む小田苅古墳群２基があり、北西約２㎞には大円墳で構成される勝堂古墳群48基がそれぞれ位置する②。各古墳群の主体部は横穴式石室とする後期古墳とみられ、愛知郡を本拠地とした愛智秦氏に関連するものと考えられている。

古代寺院跡では、北西約２㎞に菩提寺遺跡、北東約２㎞に僧坊遺跡、北東約３㎞には鬼板を出土する小八木廃寺がある③。さらに、愛知川町大字畑田には愛智秦氏の氏寺と考えられている畑田廃寺④があり、古墳群の分布と合わせて検討すると興味ある寺院分布形態を呈している。

湖東町の周囲には荘園開発を究明するにも貴重な遺跡が多い。愛東町大字上岸本を井（ゆ）口として小田苅から愛知川町大字畑田付近までのびる愛知井は、その灌漑地域に興福寺や東大寺の荘園が数多く分布し、後の愛知郡条里制地割の畦畔方位と異なる南北方位を採用している。愛知井周辺は奈良時代には初期荘園開発を済ませたところとされているが、在地豪族の分布形態や寺院跡の調査から、最近では白鳳期まで遡ぼる可能性をもつとされている。

池庄は「大安寺資財帳」や「永源寺文書」によると、大安寺によって奈良時代から寺領としていたことを記している。

平安時代以降になると、皇族や延暦寺、日吉大社、春日大社等の荘園が現われ、延徳３間(1491)永源寺文書によると、池庄、小田苅、大清水は永源寺の寺領となっている。ただ、『近江愛知郡志』では当地を12条５・６条に比定し、条里未施行地としている。

農地とするには用水の確保が必要である。比較的安定していた地域は愛知井の灌漑範囲のみとされ⑤、当地を含めた段丘上は溜池や井戸による補水にたよらなければならない地域である。現に、当該地周辺には溜池や井戸の数が非常に多く、今日まで用水の確保に困難していたことを物語っている。

第２図　薬師堂遺跡測量図およびグリッド•トレンチ位置図

3．調　　査

1．調査経過

本調査は、池庄工区約24 haを対象とし、排水路施行部分と任意に試掘用グリットを設定して、遺跡の範囲・性格等を追求した。さらに、検出した遺構の拡がりに基づいて、各グリット・トレンチを拡張することにした。

調査の基準点はほ場整備支線82号排水路を基準に、支線22号道路との交叉点を0点と定め、50m間隔に地区割をした。また、便宜的に各グリット・トレンチにA・B……Wの番号を付し、合計で23本設定した。（第2図）

A～Gトレンチからは、東から西方に蛇行しながらのびる河川跡を検出した。出土遺物からみると江戸時代に埋まったようである。現在、この河川跡の上層にほぼ同位置を流れる小河川をみる。さらに、井戸の分布は河川跡付近に集中する。

Hトレンチには南南東から北北西にのびる溝があり、それを追求していった結果、溝の東側から掘立柱建物3棟と柵跡、土壙を検出した。溝内からは平安時代前期の遺物が出土し、特に、掘立柱建物を検出したところに集中する。

他のグリット・トレンチからは何ら遺構は検出されない。このことから、薬師堂遺跡の中心部はHトレンチ付近であると考えてよいであろう。

2．調査日誌（抄）

昭和57年

4月19日　本日から薬師堂遺跡の発掘調査に入る。遠景写真撮影。基準点の設置。

4月20～22日　トレンチ・グリット設定と除草作業。

4月23日　A・Bトレンチ掘削。表土下0.3mにて地山面検出。旧井戸跡2基検出。

4月24日　C・Dトレンチ掘削。Cトレンチから河川跡検出。Cトレンチ拡張。河川幅は約21.5mである。

4月26日　E・Fトレンチ掘削。FトレンチからCトレンチからつづく河川跡を検出する。埋土から須恵器・土師器が出土する。

4月27・28日　Fトレンチ拡張と掘り下げ。幅は約15.7m、深さは約1.5mである。

4日30日　Gトレンチ掘削。河川跡の延長部検出。トレンチを拡張し河幅、深さを追求する。砂層と粘土層がレンズ状に堆積し、下部より湧水をみる。

5月3日　Gトレンチ拡張と掘り下げ作業。河幅約20.5mを測る。

5月4・5日　Hトレンチ掘削。表土下約0.5mから南北方向にのびる幅約1.2mの溝と土壙を検出する。

5月6日　I～Kトレンチ掘削。表土下約0.6mで地山面検出。遺構はない。

5月8日　Aトレンチ拡張。河川跡検出。

5月10・11日　B・C・Hトレンチ遺構検出作業。建物等の検出はみない。

5月12・13日　Hトレンチの溝を北へ追求。本日33mまで確認。溝の北側から柱穴数基検出する。

5月15・17日　溝をさらに北へ追求。長さ100mまで確認したところで、水田整地のため被掘され、溝は消滅する。

5月18日　L～Rグリット掘削。表土下0.5m位にて地山面を検出。遺構は検出されない。

5月19日　S～Wグリット掘削。遺構はない。

5月20～22日　Hトレンチの柱穴検出部分の追求と溝の掘り下げ作業。

5月24～31日　溝の掘り下げ作業。柱穴検出部分付近に遺物の出土が集中する。

6月1～7日　Gトレンチ河川跡掘り下げと写真撮影および実測作業。

6月8～10日　溝横の柱穴群追求。掘立柱建物6棟、柵跡であることが判明する。

6月11～17日　掘立柱建物掘り下げとA～Fトレンチ実測作業。

6月18日　地元の人々を対象に現地説明会。約40名見学。

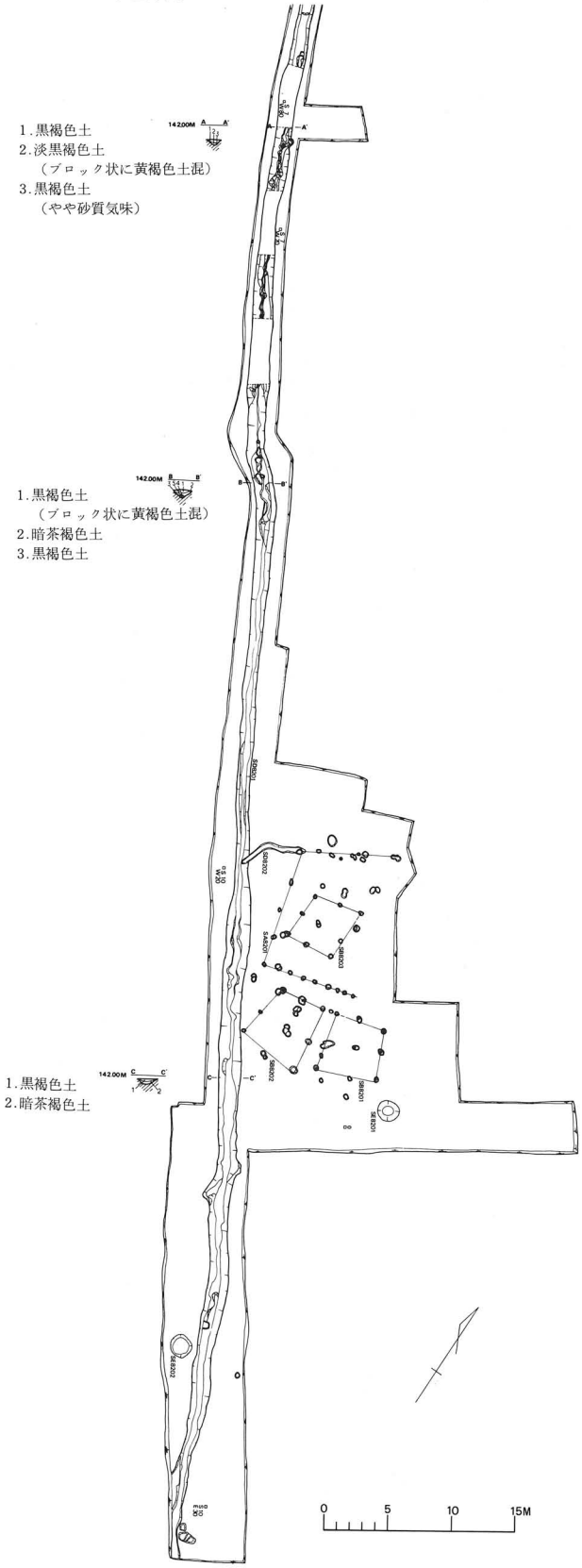
6月19～23日　グリット・トレンチの平板測量（S1／500）。

6月24・25日　Hトレンチ実測用割に付け作業。

6月26～30日　Hトレンチ実測作業。

7月1日　現地調査を完了し、秦荘町矢守遺跡へ動具を運搬する。

4．遺構（第3～5図、図版二～六）



第３図　薬師堂遺跡Ｈトレンチ平面実測図

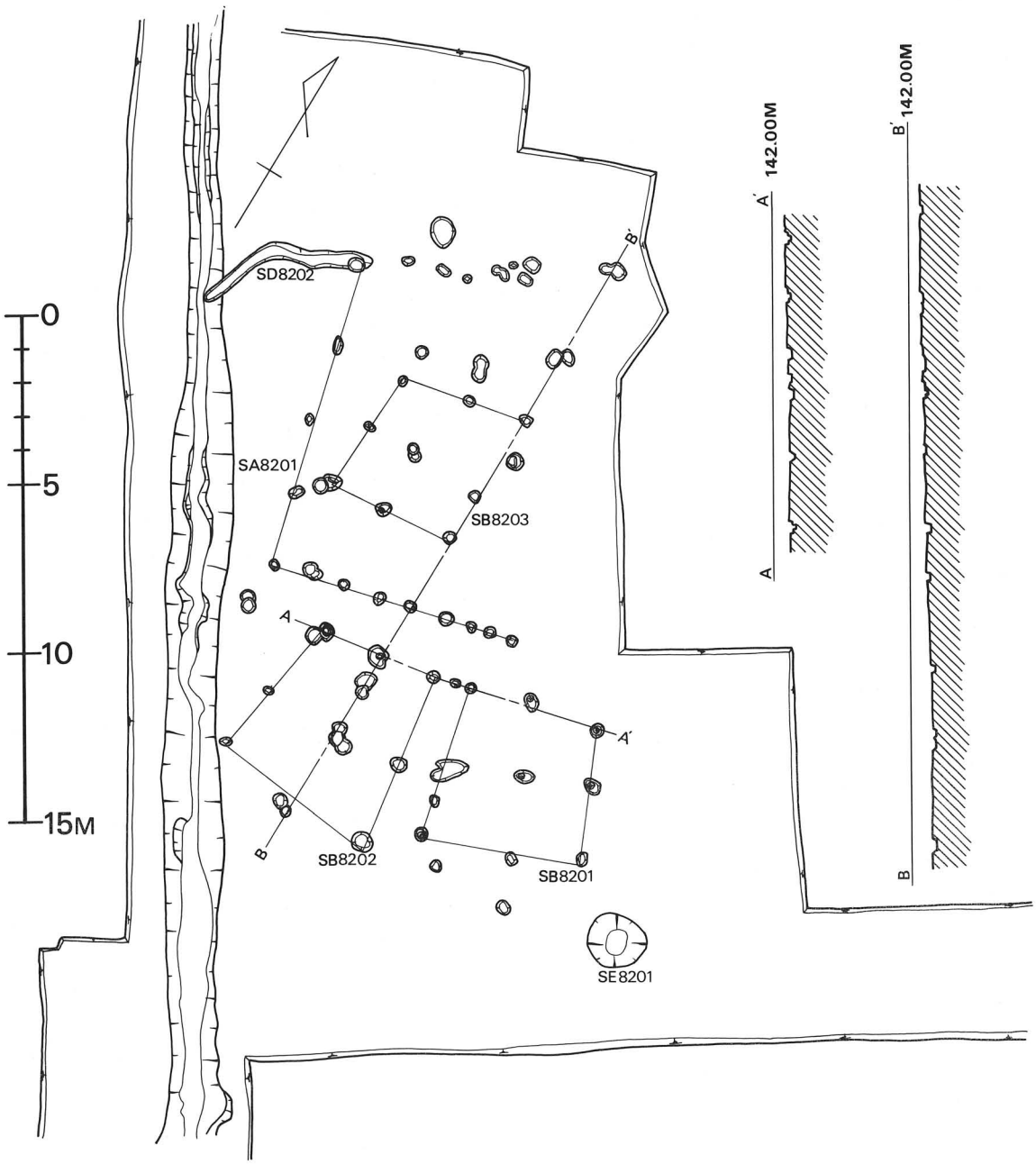
今回の調査では、Ｈトレンチから掘立柱建物３棟、柵１条、井戸２基、溝２条と、Ａ～Ｇトレンチから河川跡１条を検出した。

掘立柱建物

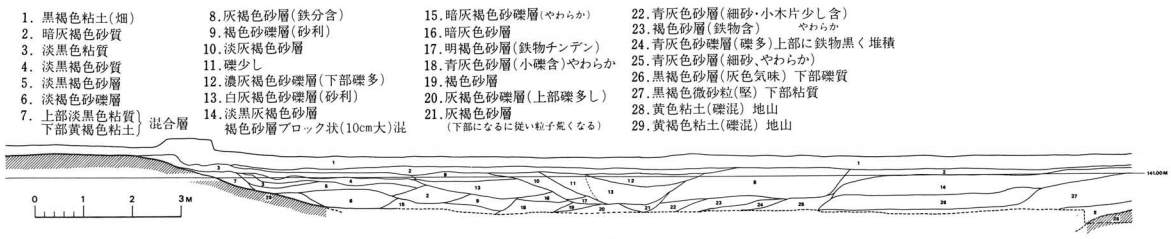
ＳＢ8201　桁行２間(4.0•4.5m)、梁行２間(3.9•4.7m）の総柱建物で、床面積は約18.28㎡を測る。柱穴は平面楕円形と円形を呈し掘形は0.4～0.6m、柱痕は約0.15mである。柱間は桁行1.65～3.0m、梁行2.0～2.6mを測り、いづれも等間隔ではない。各柱列の柱筋はよく揃うものの建物の平面は台形に近い。建物の方位は西側柱列でＮ14°12′Ｅを示す。

ＳＢ8202　ＳＢ8201の東側１mにあり、北側の柱筋を一直線に揃え平行する建物である。桁行２間（4.4～5.4m)、梁行２間（3.5 ～5.0m）の総柱建物で、床面積は約20.83㎡の規模をもちＳＢ8201より少し大きい。柱穴はすべて平面円形を呈し、掘形は直径0.2 ～0.6mを測り、西側柱列には柱痕径と変わらないものもある。柱痕は0.15～0.2mを測る。柱間は桁行2.0～2.6m、梁行1.7～2.6mと大きく異なる。この建物も各柱筋はよく通るが全体的な歪みをみる。中央の柱列と建物北西端の柱穴に重複する柱穴が存在するのは、歪みを少しでも修整しょうとしたものであろうか。建物方位は東側柱列でＮ18°42′Ｅを示す。

ＳＢ8203　ＳＢ8202の北約４mにある建物で、３方を柵によってコ字状に囲まれている。桁行２間（3.8・4.2 m)、梁行２間（3.7m)、床面積約14.8㎡の規模をもつ。柱穴は平面円形を呈し、掘形は直径0.25～0.5m、柱痕径は約0.15mを測る。この建物も各柱筋はよく通るものの、建物全体に歪みがあり平面菱形を呈する。柱間は桁行1.5 ～2.1m、梁行1.7～2.1mを測る。建物方位は西側柱列でＮ２°Ｗを示し、他の２棟より大きく東へ振る。



第４図　薬師堂遺跡掘立柱建物平面実測図



第５図　薬師堂遺跡Ｇトレンチ ＳＲ8201断面図

柵

ＳＡ8201　ＳＢ8203の南・西・北の３方をコ字状に囲む柵である。建物の方位とは一致せず、西側柱列でＮ14°10′Ｅを示し建物より約16度西に振る。南側柱列は長さ7.4m、西側柱列は9.1m、北側柱列は7.4mを測り、総延長で23.9mである。各接続するコーナは、南東部は直角に屈曲するのに対し、北西部は純角的になる。柱穴は平面円形に近く、掘形の直径は0.2～0.5mを測り、柱痕は柱穴の深さが浅く明らかにできなかった。柱間は南側柱列は0.8～1.2m、西側柱列は2.3～2.5mで南側柱列の最大柱間の約２倍を測る。北側柱列は柱穴の方向・間隔は一定せず、他の２列と異なる。

井戸

ＳＥ8201　ＳＢ8201の南東約1.5mにある土壙で、位置・形態から井戸跡とした。平面は円形を呈し、直径1.8m、深さ0.6mを測り、底部は丸味をおびるが、少し凹凸する。内部には何ら施設は認められず、素掘のままであったようだ。遺物は土師器の細片が少量出土した程度である。

ＳＥ8202　建物群の南方約22mにある井戸跡で最近まで農業灌漑用として利用していたものである。平面は円形を呈し、直径1.7mを測り、深さについては調査に参加された地元作業員の話だと約５mはあると聞き、深くは追求しなかった。壁面は本来石を積んでいたが、埋め戻す時もち出せる石は取りのぞいたとのことである。

溝

ＳＤ8201　掘立柱建物群の西側を南南東から北北西に流れる素掘りの溝で、ほぼ真っすぐにのびる。溝の南端は未検出であるが、北端は水田整地による被掘のため消滅する。検出した総延長は136.5mを測り、他方向にのびる支線はない。幅は上流で0.6m、建物群付近は1.5～2.0m、下流で1.0～1.5mを測る。深さは0.3～0.8mあり、断面形はＵ字とＶ字状部分があり、下流ほどＶ字部が多く底部はさらに切込む。建物より少し上流から建物付近にかけて小礫から拳大の礫が散在し、所々に人頭大の礫をみる。出土遺物は建物群付近に最も集中し、他からの出土量は少ない。溝の主軸は約Ｎ30°を示し、どの建物の方位とも合わない。

ＳＤ8202　ＳＡ8201の北西端の柱穴と重複し、ＳＤ8201までのびる溝である。遺構の重複関係からみると柵とは直接関連するとは思われない。溝はゆるくＬ字状に曲り、長さ5.5m、幅0.45mを測り、壁面はほぼ垂直に落ち込み、深さは約0.5mである。

河川

ＳＲ8210　ＡトレンチからＧトレンチにかけて検出された河川跡で，南東から北西方向へ大きく蛇行しながらのびる。河川幅は平均で20mあり，深さ２m以上を測る。河川の堆積土層は中央部に褐色系の砂礫層が堆積し，最後に埋った様子がうかがえる。その両側は黒褐色系の砂礫層で，徐々に河川の中央へ流れ込んだ堆積状況を呈する。下層は青灰色と褐色系の砂層がサンドイッチ状に堆積し所々に植物遺体を包含する。

河川はすでに埋っているが，この方向とほぼ同位置に現在の小河川が流れ、それに並って井戸が掘られ，また，ポンプ小屋もある。

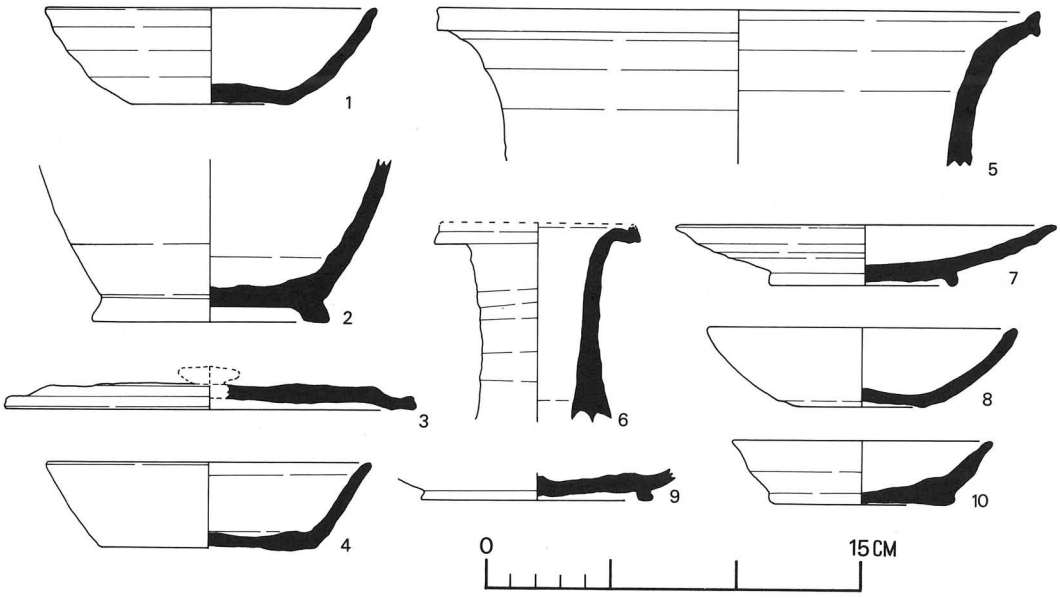
5．遺物（第6図、図版七）

今回の調査は広範囲におよんだが、遺構の検出されたのはＨトレンチとＡ～Ｇトレンチのみであった。このため遺物の出土量は少なく、約100点を数えるのみである。その中で、実測可能なものは10数点で、ここではその代表的な10点について記述する。

ＳＤ8201　須恵器杯身（１）・壺（２）がある。１は内弯する口縁部と平底の底部からなる。内外面に横ナデ痕を残すが、底部は摩滅のため明らかでない。口径13.1㎝、器高3.9㎝を測る。胎土に石英粒を含み、焼成は軟質で淡黄褐色を呈する。２は壺の底部で、底部外周いっぱいにやや外へふんばる高台をつける。胎土は精良、焼成堅緻で灰色を呈する。

Ｈトレンチ　須恵器杯蓋（３）・杯身（４）・甕（５）・壺（６）・灰釉陶器皿（７）・土師器杯身（８）が遺構面から出土した。杯蓋３は遍平な天井をもち、口縁部をＳ字状に屈曲さす。天井の約１／２をヘラ削りする。復元口径16.2㎝を測る。胎土・焼成は良く淡灰色を呈する。４は平底の杯身で底部と口縁部との境界屈曲部は明瞭である。底部外面はヘラ切り後かるくなでる。口径12.8㎝、器高3.4㎝である。胎土は良く、焼成はやや軟質で淡灰色を呈する。５は甕の口縁部で端部を上下へつまむ。復元口径13.8㎝を測る。胎土に長石粒を含み、焼成は良く灰色を呈する。６は小型の長頸壺の口頸部で、水瓶形を呈する。口縁端部を大きく外反させ、端部を上方へつまみ上げる。内外面ナデ痕を残す。胎土に長石粒を含み、焼成は良く淡灰色を呈する。７はやや内弯ぎみにのびる口縁部の端部を丸くおさめ、丸味のある高台をつける。復元口径14.3㎝、器高2.4㎝を測る。内面に淡緑色の釉がみられる。胎土は精良、焼成は良く、素地は灰白色を呈する。９は内弯する口縁部をもつ杯身で、内外面摩滅のため詳細は不明だが、横ナデ調整を施したものと思われる。復元口径12.0㎝、器高3.1㎝を測る。胎土は良く、赤色斑と石英粒をみる。焼成はやや軟質で橙褐色を呈する。

ＳＲ8201　須恵器杯身（９）、土師器杯身(10)がＧトレンチの河川跡から出土した。９は底部のみ遺存する高台付杯身で、高台はわずかに外へふんばる。胎土・焼成とも良く淡灰色を呈する。10は胎土は土師質であるが緑釉陶器の未製品の可能性をもつ器である。口縁は外方へまっすぐのび、底部は外周を突起させる。底部外面



第６図　薬師堂遺跡出土遺物実測図

に糸切り痕を残す。口径10.2cm、器高2.5cmを測る。胎土は良く長石粒を含む。焼成は良く黄褐色を呈する。

つぎに上記の遺物について若干の年代的位置付けをしてみよう。

ＳＤ8201出土の２は壺(瓶)の底部で高台の形態、その貼り付ける位置の特徴は平城宮Ⅴ期以降の性格であり、あえて述べるならＳＤ650Ａ⑥に近似すると思われる。杯蓋３は天井の最も遍平するもので、平城宮Ⅶ期ないしＳＤ650Ａに相当し、榿木原編年Ⅶ類第１段階⑦に類例を求めることができる。また、６は榿木原遺跡ではⅣ類第３段階に外反させた口縁部の端部をつまみ上げるものが出現し、長岡京、平城宮Ⅵ期⑧に相当する。８世紀末から９世紀初頭頃に比定される。灰釉陶器皿は比較的ていねいな器で、高台は低くて小さいが、また断面方形に近く、９世紀代の特徴をそなえているといえよう。土師器８は内弯する口縁部とナデ調整から、平城宮ＳＤ650Ａに相当すると思われる。

6．まとめ

今回検出した遺構の中でＨトレンチに位置する溝ＳＤ8201は村の中を流れる用水だけではなく、その方位から水田に伴う灌漑用水を兼ねていたと思われる。しかし方位は愛知井周辺でみられる南北地割を基準とする灌漑用水と一致しない。さらに、後述の愛知郡条里とも合わない。今回の調査では直接水田と関連する遺構は検出されなかったが、当地にも古い方位をもつ水田が存在していたことを示唆するものと思われる。

『近江愛知郡志』では当地を愛知郡条里未施行地帯としている。愛知郡条里とは水田の畦畔主軸を約42度東に振るもので、南北地割の水田に対し、斜行条里制地割とよんでいる。今回の溝を水田に伴うものと考えるならば、その時の開発は、たまたま地形の高低等の条件に合わせて開発されたため、愛知郡条里の方向と一致しなかったとみられる。それが後の大規模な開発により旧水田を包括し耕地化されたため、旧水路は埋没したと思われる。

掘立柱建物３棟はいづれも２間×２間の総柱建物で、床面積は14.8㎡から20.8㎡と規模は小さい。平安時代前期の律令制下の農村経営単位である家父長制的世帯共同体の村とされる草津市岡田追分遺跡では、倉とされる床面積は９㎡から25㎡の規模をもち、平均18.9㎡である。当遺跡の床面積平均値18.0㎡とほぼ同値を示す。倉庫と考えてよい建物である。ＳＢ8203を取り囲む柵ＳＡ8201は、建物の方位と大きく異なるものの、他に建物はなく、ＳＢ8203に伴なった柵とみてよい。建物の方位と柵とを揃えることはあまり意識しなかったのであろう。

では、柵を伴う建物とそうではない建物との異いは何であろうか。今回の調査では、建物跡からの遺物の出土量は少なく、また、植物質を遺存する土質ではないことから遺物から各建物の性格を明らかにすることはできない。各建物の配置をみるとＳＢ8201と8202は東西に接するようにならび、ＳＢ8203はＳＢ8202の北側に配され、３棟はＬ字状になる。ただ、主屋や副屋的な建物は検出されなかったことから、岡田追分遺跡６群⑨のような全体構造を知ることはできない。しかし、井戸・溝さらに河川ＳＲ8201の位置関係から倉庫群の東側に主屋を中心とした建物群を推定することは可能と思われる。まず、考えられる倉庫の異いは、農村単位内で納める稲の異いである。すなわち、律令制支配下における租税は、口分田を班田された農民(公民)は田地１段あたり２束２把の田租が課せられていた。これは収穫の３～５％にあたる。このことから、ＳＢ8203には租税として納める稲を入れ、ＳＢ8201および8202には雑物や自分達の稲を納めたと推測されよう。

さらに考えられることは、先に述べた薬師氏との関連で、薬師氏は貞観三年大国郷司の「解」により墾田を買っている。当然その土地を周辺に居住する農民と小作関係を結び、賃租経営を行なったとみられる。農民が土地所有者に納める年貢を入れた倉がＳＢ8203であろうか。ただ、文献では田券の位置を13条11里と記し、『近江愛知郡志』で割り付けている当地の12条５・６条と大きな異いがある。条里の位置関係についての検討が必要である。

ともあれ、出土遺物から建物・溝は９世紀前葉から中頃に比定することができ、この時期の地方豪族は少しでも田地を増し、その地域の管理・運営権を得て、実質的な経営を行なおうとしている。これは律令制支配体制下の荘園制土地支配形態の変遷の現われとしてとらえられよう。言い変えれば、土地の私的所有の拡大であり、開発した田地あるいは買った墾田を後に免税とする不輸化への初源的形態と思われる。そして、それが11世紀以降寄進地系荘園として、大寺院・大神社さらに中央貴族に寄進し、自らは荘園の荘官となってその土地を支配していったとみられる。初期荘園制度下における農村の様子を薬師堂遺跡に見ることができる。

註

① 葛野泰樹・山本一博『上田遺跡発掘調査報告書』(愛東町教育委員会　(財)滋賀県文化財保護協会　昭和57年)

② 滋賀県教育委員会　昭和55年度『滋賀県遺跡目録』(昭和56年)

③ 近藤　滋「小八木廃寺発掘報告」(『滋賀県文化財調査年報』昭和49年度　滋賀県教育委員会　昭和51年)

④ 昭和53年発掘調査

⑤ 中野栄夫「近江国愛智荘故地における開発と灌漑」(『地方史研究』138号　昭和50年)

高橋誠一・小林健太郎「愛知川扇状地北半部の開発と条里」(『滋賀大学教育学部紀要』27号　滋賀大学教育学部　昭和52年)

葛野泰樹「愛知川流域の灌漑施設」(『滋賀文化財だより』№66号　(財)滋賀県文化財保護協会　昭和57年)

⑥ 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅵ　昭和50年)

⑦ 林　博通・葛野泰樹『榿木原遺跡発掘調査報告』Ⅲ　(滋賀県教育委員会　(財)滋賀県文化財保護協会　昭和56年)

⑧ 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ(昭和51年)

⑨ 大橋信弥他「草津市追分岡田追分遺跡調査報告」(『滋賀県文化財調査年報』昭和50年度滋賀県教育委員会　昭和52年)

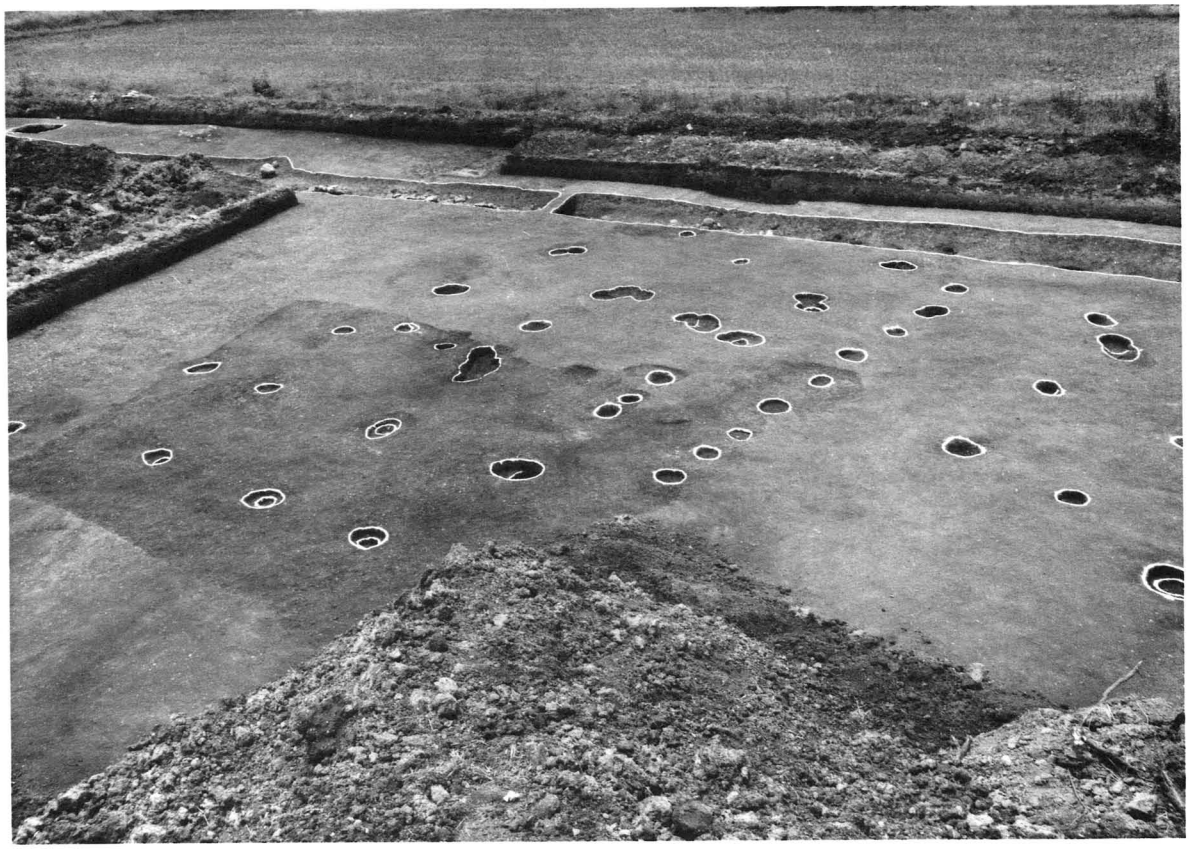
大橋信弥「草津市追分岡田追分遺跡調査報告」Ⅱ　(『滋賀県文化財調査年報』昭和51年度　滋賀県教育委員会　昭和53年)

1　薬師堂遺跡遠景（東から）

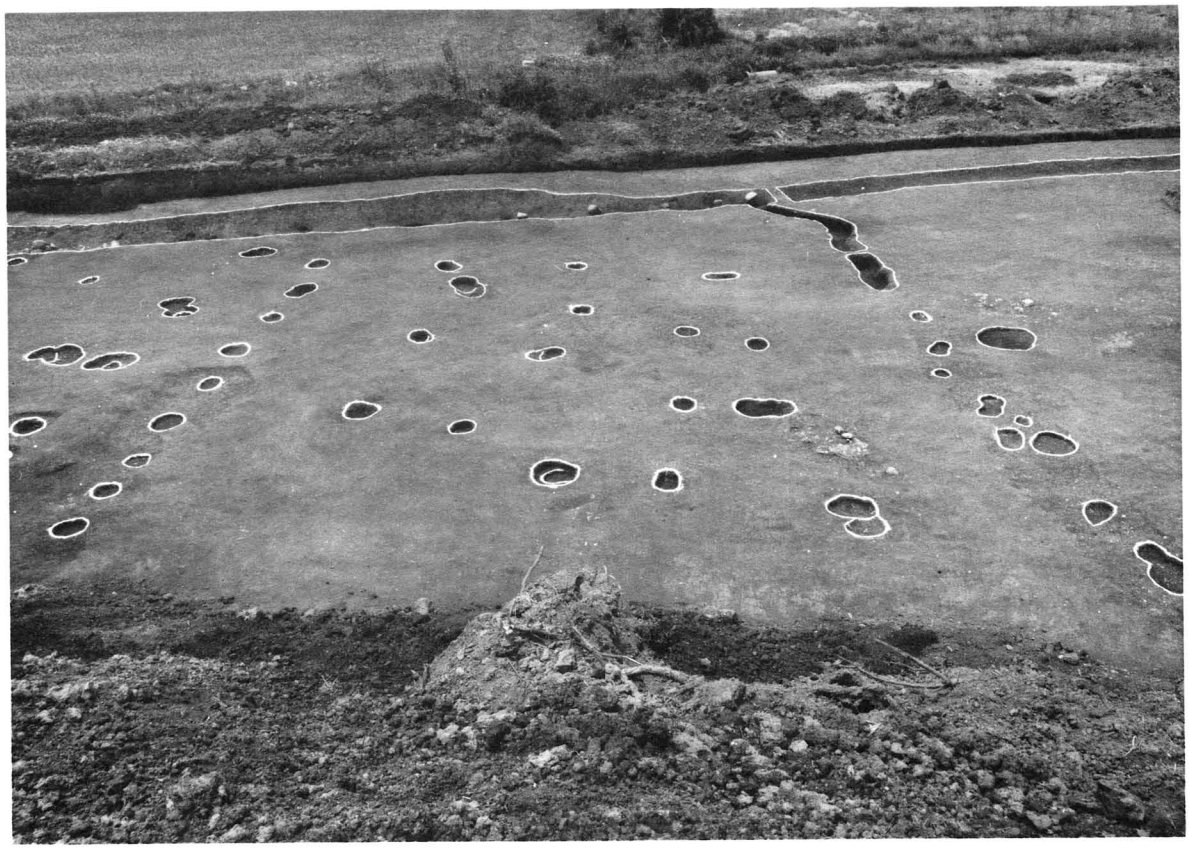
2　薬師堂遺跡遠景（西から）

1　Hトレンチ　掘立柱建物・溝（南から）

2　Hトレンチ掘立柱建物群（東から）



1　ＳＢ8201・8202（北から）



2　ＳＢ8203・ＳＡ8201（東から）

1　ＳＤ8201（南から）

2　ＳＤ8201（北から）

1　Cトレンチ　SR8201（南東から）

2　Fトレンチ　SR8201（北西から）

図版六　薬師堂遺跡

1　Gトレンチ　SR8201（北から）

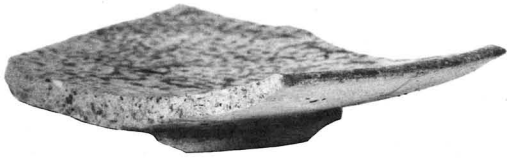
2　現地説明会風景

7

1

3

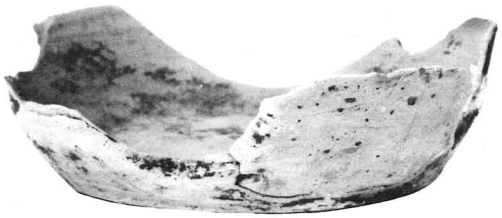
6



4

8

出土遺物



5

第３章 愛知郡秦荘町矢守遺跡

1．はじめに

本調査は、滋賀県が実施する県営ほ場整備事業（矢守第３工区）に伴うものである。矢守遺跡は以前から遺物の散布が知られており、東側隣接地に愛知川町市遺跡[①]が、また、現矢守集落と重複するように矢守城遺跡がそれぞれ遺存する。しかし、遺跡の範囲・性格等についてはまだ明らかにされておらず、工事実施前に発掘調査を実施し遺跡の保存策を講じる必要となった。

ただ、遺物の分布範囲は小字鳥ノ倉付近に集中し、このあたりが遺跡の中心部と思われた。小字鳥ノ倉は約１町半四方（約150m）南北方向を基準とした畦畔を残し、その北西部は現在愛知川町大字市に含まれ、小字鳥ノ蔵と呼ばれている。鳥ノ倉の北側はいわゆる愛知郡条里と呼称されている条里制地割が遺存する地帯であり、その南側の所々に南北地割をみる。この傾向は隣接する市遺跡と同じであることから、現在は秦荘町と愛知川町に行政区画は分かれるものの、両遺跡は本来愛知郡大国郷に属し、同一の一連した遺跡とみられる。

調査は文化財保護課が県農林部耕地建設課より予算（2,220,000円）の再配当をうけ、財団法人滋賀県文化財保護協会へ委託して実施した。調査・整理期間は昭和57年７月～昭和58年３月までとした。

なお、この調査にあたっては秦荘町教育委員会をはじめ地元矢守の方々にお世話になった。ここに記して謝意を表します。

2．位置と環境

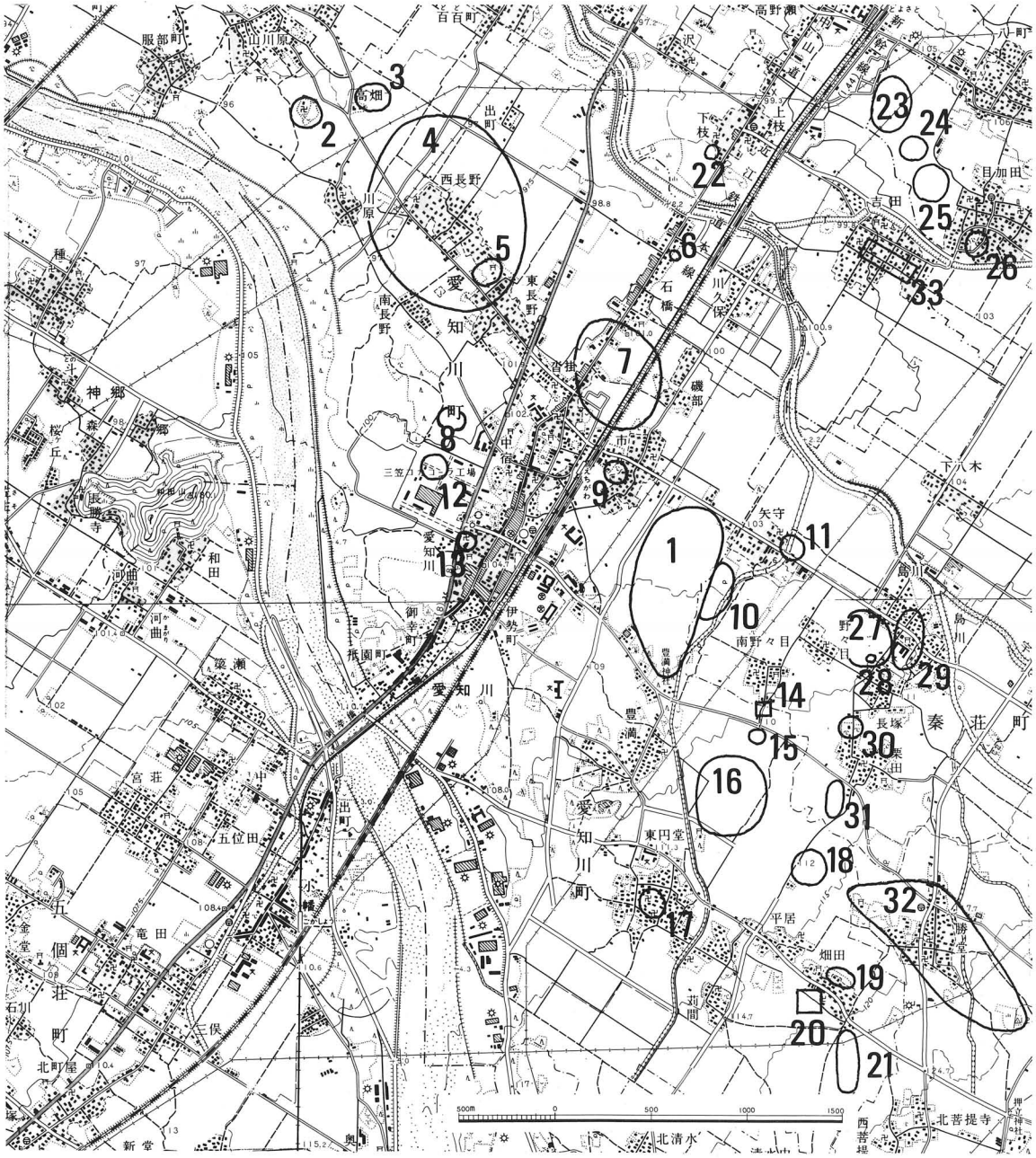
矢守遺跡は、滋賀県愛知郡秦荘町大字矢守に所在し、一部は大字南野々目にかかる。該当する現存小字は鳥ノ倉・三段長で約10,000㎡の広さをもつ遺跡と考えられている。

当地は湖東平野のほぼ中央部に位置し、鈴鹿山脈から琵琶湖へ流れる愛知川と宇曽川との中間にある。このため、当該地は両河川によって形成された沖積平野を呈し、標高は約106mを測る。現在、全域水田として開墾され、北側は愛知郡条里制地割の水田地帯で、南側は南北方向に主軸をもつ水田とそれより少し東へ振る畦畔の水田地帯である。ちなみに『近江愛知郡志』では当地を７条10里・８条10里に比定している。

当遺跡の周辺に分布する遺跡の中で南北地割をもつものは、古代寺院跡と集落跡があり、また、愛知川町大字畑田に広がる愛知井の灌漑範囲の水田などがある[②]。寺院跡は南から畑田廃寺[③]、野々目廃寺[④]、小八木廃寺[⑤]、妙園寺廃寺、軽野廃寺[⑥]、目加田廃寺[⑦]等を上げられる。集落跡は愛知郡八木郷に伴なう地方官衛と推定されている大間寺遺跡[⑧]がある。これらは１町から２町四方の方格地割をもち、白鳳期から平安時代の遺跡と考えられている。

古墳時代では、塚原古墳[⑨]、栗田古墳群[⑩]と前方後円墳の可能性をもつ長塚古墳が東方約２kmにあり、その東側に約300基の円墳で構成されている金剛寺野古墳群[⑪]と48基の大円墳で構成されている勝堂古墳群がある。集落跡は６世紀前葉の遺物を出土する軽野正境遺跡[⑫]がある。

隣接する市遺跡は昭和57年10月から、遺跡推定地の南端で調査が実施され、12世紀中頃に比定されるムラの一部が明らかにされた。また、その北側の小字鳥ノ蔵・中島からは古墳時代後期から平安時代の遺物を採取されており、市遺跡は古墳時代からつづく集落と考えられている。さらに、当遺跡の西方には奈良時代から平安時代の遺物の散布する沓掛遺跡、西長野遺跡等が旧東山道をはさんで分布する。いまだ明らかにされていない愛知郡衙を想起させられる遺跡である。



第１図　矢守遺跡位置図および周辺の遺跡

１．市　遺跡　２．興禅院遺跡　３．狐塚遺跡　４．西長野遺跡　５．福泉寺遺跡　６．山塚遺跡　７．沓掛遺跡　８．久遠寺遺跡　９．市域遺跡　**10．矢守遺跡**　11．矢守城遺跡　12．御墓遺跡　13．宝満寺遺跡　14．野々目廃寺　15．塚原遺跡　16．ミグルシ遺跡　17．東円堂遺跡　18．平居北遺跡　畑田北遺跡　20．畑田廃寺　21．畑田稲荷遺跡　22．観音堂遺跡　23．古戸遺跡　24．目加田遺跡　25．竹ノ尻遺跡　26．目加田廃寺　27　大間寺遺跡　28．長塚遺跡　29．島川遺跡　30　栗田城遺跡　32　勝堂遺跡　33．吉田城遺跡

第２図　矢守遺跡測量図および調査範囲図

3．調　　査

1．調査経過

昭和57年度の調査は、矢守第２工区約4.5 haを対象とし、排水路施行部分と任意にグリットを設定し遺跡の範囲・性格等を追求した。さらに、検出した遺構の拡がりによって、各グリット・トレンチを拡張し遺構を明らかにすることにした。

調査の基準点は第２号小排水路と第８号支線道路の交叉点を定め、南西にのびる第２号小排水路の中心線を基準に50m間隔に地区割を行なった。さらに、便宜的に各グリット・トレンチにＡ・Ｂ～Ｑと番号を付した。グリット・トレンチは合計で17本設定し、遺構・遺物の確認されたＢ・Ｃトレンチ、Ｈ・Ｉ・Ｋグリットを拡張した。（第２図）

遺構はＢトレンチ拡張部で掘立柱建物４棟と土壙５基を検出した。掘立柱建物は主軸をすべて南北方向にそろえ、規格性のある配置をもつ。土壙はいづれも多量の土師器をもち、平面不定形を呈する。ただ、１基のみ内部に柱穴の伴うものがあり、また、土壙墓を想起させるものがある。

今回調査を実施した地区の基本土層は、Ｂトレンチから北側は0.3～0.4mで砂礫層の地山面となり、遺構は検出されない。それより南側は淡褐色系の粘質土層で遺構をみる。このことから、北側にある愛知郡条里施行地域に入ると遺構は確認されない。

2．調査日誌（抄）

昭和57年

７月１日　薬師堂遺跡から発掘調査器材一式搬入。テント設営、遠景写真撮影。

７月２・３日　調査用基準点設置および地区割作業。

７月５・６日　Ａ～Ｄトレンチ設定と除草作業。

７月７・８日　Ａトレンチ掘削。表土下約0.5mで地山層確認。遺構の検出ならず。

７月９日　Ｂトレンチ掘削。表土下0.2mに遺物包含層があり約0.4mで柱穴を検出する。柱穴はほぼ南北方向にならび、大きな掘立柱建物となるもよう。

７月11日　Ｃトレンチ掘削。表土下0.2～0.4mは遺物包含層となり、約0.4mで地山になる。数個の柱穴を検出する。

７月12・13日　Ｄトレンチ掘削。表土下0.4～0.5mに遺物包含層を、0.5mで柱穴をみる。

７月15日　Ｆトレンチ掘削。表土下0.5mで南北にならぶ柱穴を検出。溝もある。任意にグリットを設定。

７月16～20日　Ｅトレンチ、Ｇ～Ｋグリット掘削。Ｈグリットで焼土・柱穴検出。Ｋグリットで溝を検出。

７月21日　小字鳥ノ倉の北東コーナー部分にトレンチを設定する。方格地割を裏づける遺構は明

第３図　矢守遺跡Ａトレンチ耕土掘削作業風景

らかにできない。

7月22・23日　A・Bトレンチ断面実測作業。北東コーナー部分トレンチ追求。表土下約0.3mで砂礫層となり遺構はない。トレンチを南側へ拡張しB・Cトレンチとつなぐ。

7月24・25日　Kグリット追求。溝は南西から北東にのびるものと、東西方向にのびる2条がある。L～Qグリット掘削。

7月26～29日　Bトレンチ東側拡張。東西棟建物1棟とその南側からも掘立柱建物検出する。

7月30・31日　掘立柱建物の北東部に土師器を多量に含む土壙数基を検出する。C・Dトレンチ追求。

8月2～7日　Bトレンチ拡張部追求。さらに2棟の掘立柱建物検出。すべて南北方向を基準し、総柱建物である。

8月9～12日　拡張部追求。柱穴掘り下げと土壙群清掃および写真撮影。

8月17～21日　掘立柱建物の柱穴掘り下げ作業。

8月23・24日　掘立柱建物清掃と写真撮影および、実測用割り付け作業。

8月25・26日　Dトレンチ追求と写真撮影。グリット・トレンチ平板測量作業（S＝1／500　8月28日まで）

8月27・28日　Fトレンチ追求と写真撮影および実測作業。

8月30・31日　Bトレンチ拡張部実測作業。

9月1日　調査を完了し、器材搬出作業。

4．遺　　構（第4～6図、図版二～九）

今回の調査で検出した遺構は掘立柱建物７棟、柵１条、土壙５基、溝18条等と数基の柱穴である。この中で掘立柱建物と土壙はＢトレンチ拡張部に集中し、小字鳥ノ倉の方格地割推定範囲内にある。溝は主にＣ・Ｅ・Ｋトレンチから多く検出された。ここでは各遺構ごとに説明することにする。

掘立柱建物

ＳＢ8201　Ｂトレンチ拡張部の中央部にある建物で、桁行７間(14.5、15.3m)、梁行３間(6.8m)の南北棟建物である。建物内には束柱があり総柱建物を呈する。柱間は桁行1.8～2.3m、梁行1.5～３mあり、平均寸法は桁行2.15m、梁行2•27を測る。柱穴はすべて平面円形を呈し、掘形の直径0.4～0.65m、柱痕径は0.2～0.25mである。方位はN11°30′Eを示し、各柱筋はよく通るものの柱間にばらつきをみせることから少し歪みがある。床面積は約101.32㎡あり、今回検出した建物の中では最も規模の大きい建物である。

ＳＢ8202　ＳＢ8201の東側に位置し、ＳＢ8201の東側第１列線上にＳＢ8202の南西隈の柱穴がのる。桁行３間(5.75m)、梁行２間(4.1m)の南北棟建物で総柱建物にはならないようだ。建物の北側第１列の柱穴２基は最近の井戸による被掘のため消滅する。柱間は桁行1.7～2.2m、梁行1.9～2.3mを測り、平均すれば桁行1.92m、梁行2.05mとなる。床面積は約23.58㎡である。柱穴は平面円形を呈し、掘形径0.3～0.55m、柱痕径0.15～0.2mを測る。方位はN23°30′Eを示し、今回検出した建物の中で最も西に振る。

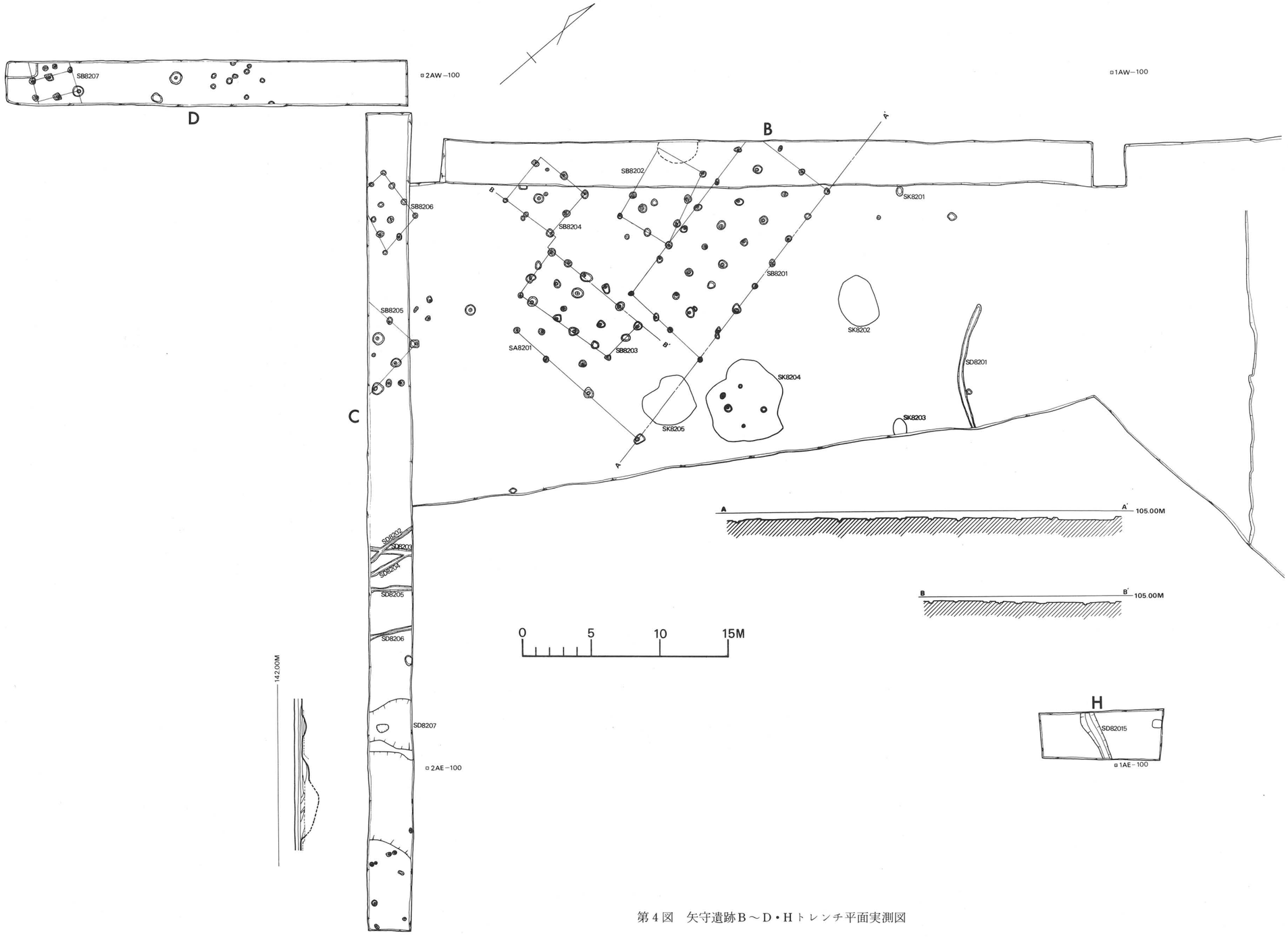
ＳＢ8203　ＳＢ8201の南側にＬ字状に配置された東西棟建物で、ＳＢ8201とは1.2mの間隔でしかない。桁行は５間(7.75、8.3m)、梁行は東半分は２間(3.1m)、西半分は３間(3.9m)となる。束柱は有るところと無いところがある。柱間は桁行、梁行とも1.5～2.0mを測る。柱穴は平面円形と楕円形とがあり、掘形径は0.3～0.75m、柱痕径は0.2～0.25mを測る。方位はN15°Eを示し、床面積は約28.11㎡である。

ＳＢ8204　ＳＢ8203の北東にあり、ＳＢ8201、8203との配置関係をみればコ字状になる。規模は南北２間(3.75m)、東西２間(4.1m)の総柱建物であり、わずかに東西方向に長い。柱間は南北1.8～2.0m、東西1.8～2.3mを測り、平均柱間は1.88mと2.05mになる。柱穴の平面形は東側第１列の２基のみ長方形を呈し、他は円形である。掘形径は0.3～0.6m、柱痕径0.2mを測る。方位はN９°30′Eを示し、床面積は約15.38㎡をもつ。普辺的な倉庫建物である。

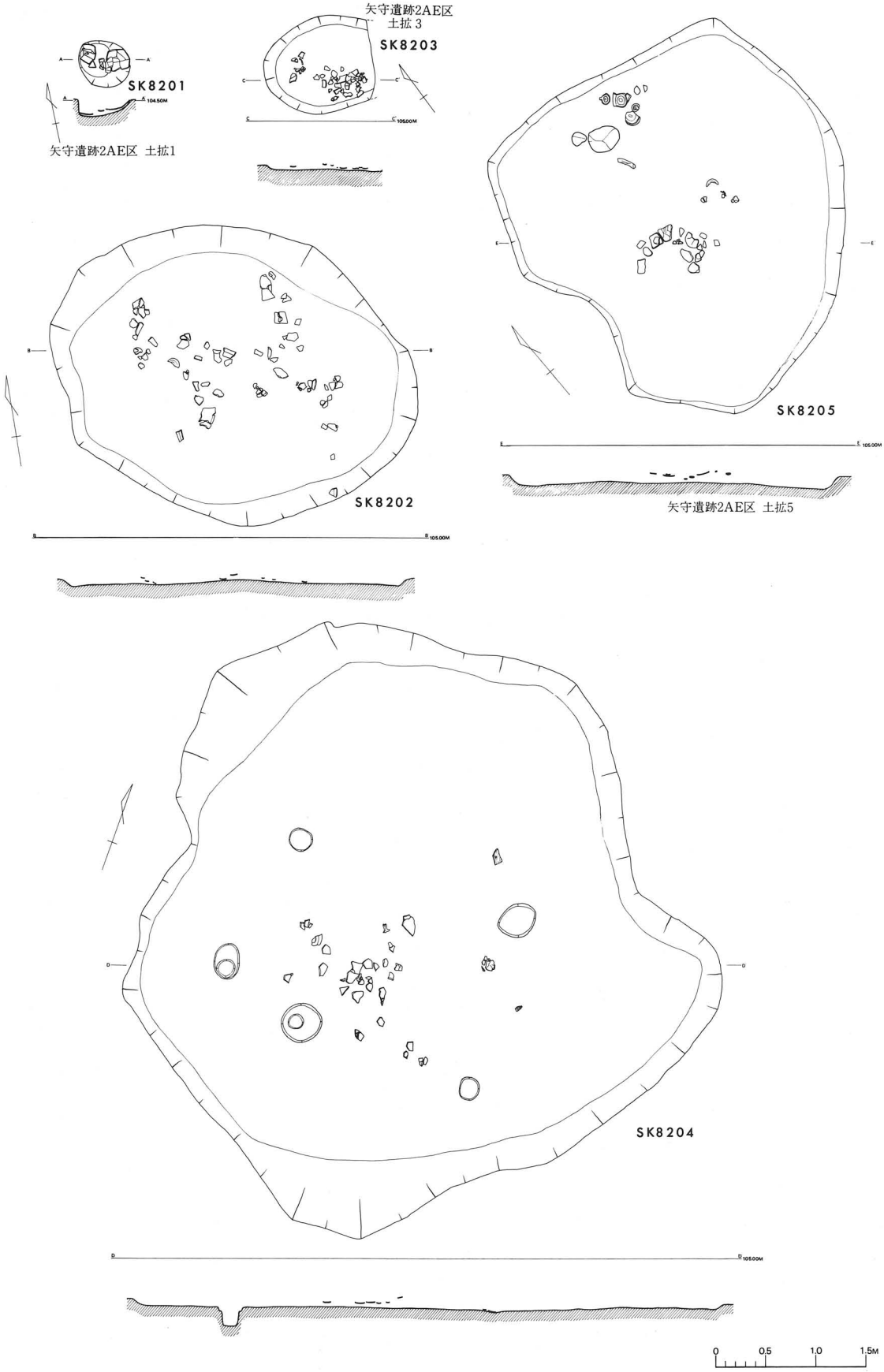
ＳＢ8205　ＳＢ8203の南方約８mのＣトレンチから検出された建物で、南北２間以上(4.4m以上)、東西１間以上(2.5m以上)を測る。柱間は南北２～2.4m、柱穴は平面円形を呈し、掘形径0.4～0.75m、柱痕径0.15～0.25mである。方位はN７°30′Eを示す。この建物もおそらく総柱建物になると思われる。

矢守遺跡掘立柱建物一覧表

建物番号	桁行×梁行(間)	規　模（m）	床面積(㎡)	方　位	備　考
ＳＢ８２０１	７×３	14.5/15.3×6.8	101.32	N11°30′E	
ＳＢ８２０２	３×２	5.75×4.1	23.58	N23°30′E	
ＳＢ８２０３	５×２(3)	7.75/8.3×3.1/3.9	28.11	N 15° E	
ＳＢ８２０４	２×２	4.1×3.75	15.38	N 9°30′E	
ＳＢ８２０５	２以上×１以上	4.4以上×2.5以上	11以上	N 7°30′E	
ＳＢ８２０６	３×２	4/4.5×2.5/3.3	12.33	N 9°30′E	建物の歪大
ＳＢ８２０７	１以上×２	1.6以上×3.0	4.8以上	N 26 W	束柱のみ方形



第４図　矢守遺跡Ｂ～Ｄ・Ｈトレンチ平面実測図



第5図　矢守遺跡SK8201～8205平面実測図

ＳＢ8206　ＳＢ8204の南西約6.5mにある東西棟建物で、桁行３間(4.0、4.5m)、梁行２間(2.5、3.3m)の規模をもつ。柱間は桁行1.2～2.0m、梁行1.4～1.9mを測り、各柱筋はよく通るが建物全体の歪みは大きい。柱穴は平面円形を呈し、掘形の直径0.3～0.5mと比較的まとまる。柱痕径は0.2mである。方位はＮ９°30′Ｅを示しＳＢ8204と同値である。床面積は12.33㎡である。

ＳＢ8207　Ｄトレンチの南西隈から検出された建物でおそらく東西棟建物になる。桁行１間以上(1.6m)、梁行２間(3.0m)で、柱間は梁行の北側が1.7m、南側が1.2mと0.5mの違いをみる。柱穴の平面形は東柱のみ１辺0.5mの方形を呈し、他は直径0.3～0.8mの円形である。柱痕は直径0.2～0.25mを測る。方位はＮ26°Ｗを示し、他の建物と比して大きく東へ振る。

柵

ＳＡ8201　ＳＢ8203の南側約2.5mに建物とほぼ平行する柵で、方位はＮ82°30′Ｗを示し東西方向に主軸をもつ。規模は３間(11.7m)あり、柱間は3.0～4.9mを測り東側へ徐々に広くなる。柱穴の平面形は円形と方形とがあり、東端の柱穴のみ方形を呈する。掘形の直径は0.4～0.6m、方形掘形は0.5×0.75mを測り、柱痕径は0.2～0.3mである。

土　壙

ＳＫ8201　ＳＢ8201の北西約５mにある楕円形の土壙で、長辺0.51m、短辺0.45m、深さ0.15mを測り、底部は丸味をおび土師器片が包含されている。

ＳＫ8202　ＳＫ8201の南約７mにある楕円形の土壙である。長辺3.6m、短辺2.65mを測り、深さは浅く約0.1mである。土壙中央部に土師器片が多量にある。

ＳＫ8203　ＳＫ8202の南東約７mにある楕円形の土壙で、長辺1.2m以上、短辺1.1m、深さ約0.1mを測り、底部は丸味をおびる。この土壙内からも多量の土師器片が出土した。

ＳＫ8204　ＳＫ8202の南約７mにあり、平面形は不定形である。規模は今回検出した土壙の中で最も大きく径約5.5mを測る。深さは約0.1mと浅い。土壙中央部に土師器片が集中する。なお、土壙内から５基の柱穴を検出したが、土壙との前後関係を明らかにすることはできなかった。

ＳＫ8205　ＳＫ8204の南東約１mにある円形の土壙で、直径約0.3mを測る。この土壙から土師器が多量に出土する。

溝

ＳＤ8201　Ｂトレンチ拡張部から検出された溝で、建物群の東約15mにある。溝は曲線をえがき北西から東方にのびる。長さ9.2m以上、幅約0.4m、深さ約0.2mを測り断面Ｕ字形を呈する。

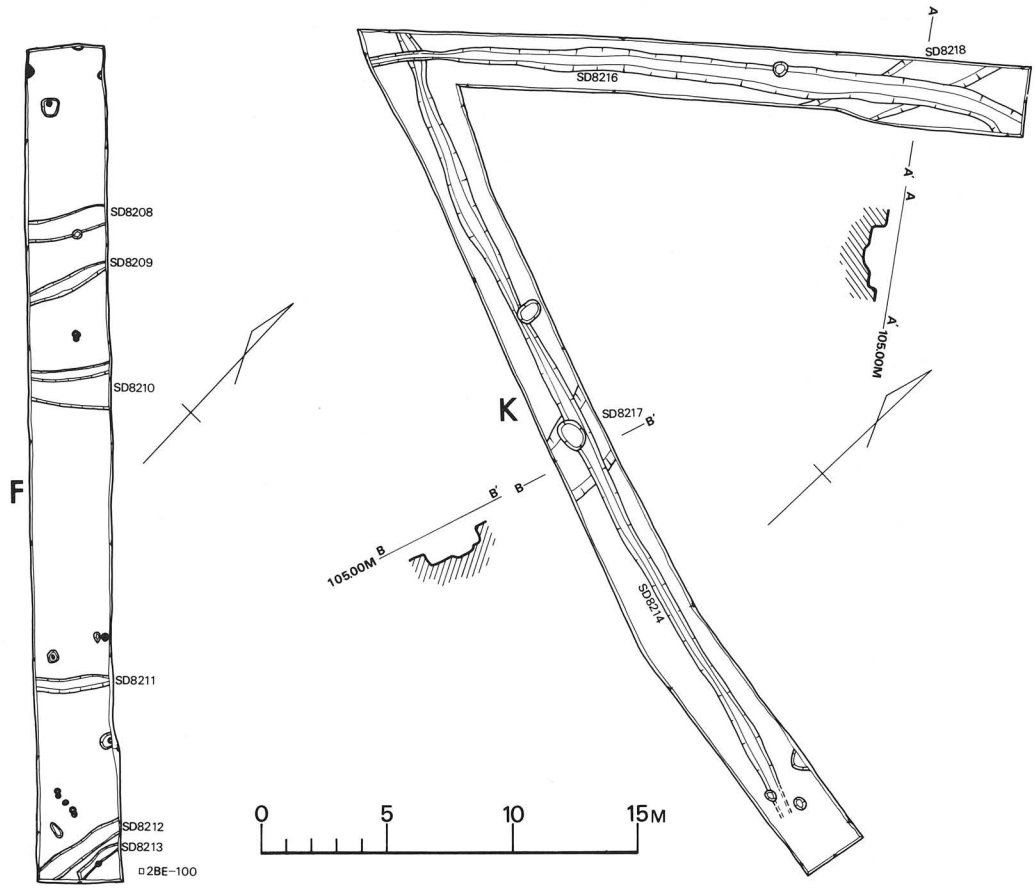
ＳＤ8202　Ｃトレンチ南東部から検出された細い溝で、南から北へのびる。長さ４m以上、幅0.25m、深さ約0.1 mを測る。溝の南部でＳＤ8203と重複するが、前後関係は明らかではない。

ＳＤ8203　ＳＤ8202と重複する溝で、南西から北東へのびる。長さ３m以上。幅約0.35m、深さ約0.1mを測る。溝の北東部でＳＤ8204と重複しＳＤ8204を切る。

ＳＤ8204　ＳＤ8203と重複し、ＳＤ8202とほぼ平行する。長さ３m以上、幅0.35m、深さ約0.15mを測り、北側はＳＤ8203に切られる。この溝と平行するＳＤ8202を同時期とみるならば、ともにＳＤ8203より先行すると考えられる。

ＳＤ8205　ＳＤ8203の南東約5.5mにある溝で、南西から北東へのびる。方位はＳＤ8203より少し西に振る。長さ３m以上、幅約0.3m、深さ約0.1mを測る。

ＳＤ8206　ＳＤ8205の南東約３mにあり、南南西から北北東にのびる。長さ3.2m以上、幅0.25m、深さ約



第６図　矢守遺跡Ｆ・Ｋトレンチ平面実測図

0.1mである。

ＳＤ8207　ＳＤ8206の南東約５ｍにある大溝で、河川跡とみられる。溝は大きく北西部と南東部に分かれ、北西部幅は２～3.5m、南東部幅6.5～７ｍとなる。全体で約11mの幅を測る。深さは最深部で約1.2ｍあり青灰色砂層と褐色系粘質土層とがサンドイッチに堆積する。

ＳＤ8208　Ｆトレンチから検出された溝で南南西から北北東へのびる。長さ3.2m以上、幅0.8ｍ、深さ約0.2mを測る。

ＳＤ8209　ＳＤ8208の南東約２ｍをＳＤ8208とほぼ平行して流れる溝で、長さ3.5m以上、幅約0.5m、深さ約0.15mを測る。

ＳＤ8210　ＳＤ8209の南東約３ｍを南西から北東へのび、南東側の壁が２段に落ち込む。長さ3.3ｍ以上、幅は１段目1.0～1.7m、２段目0.4mを測る。深さは0.2mである。

ＳＤ8211　ＳＤ8210の南東約12mにあり、南西から北東へのびる。長さ３ｍ以上、幅約0.5m、深さ約0.2mを測る。

ＳＤ8212　Ｆトレンチの南東隈から検出された。南から北へのび、長さ４ｍ以上、幅約0.6m、深さ約0.4mを測る。

ＳＤ8213　ＳＤ8212のすぐ東側を平行して流れる溝である。長さ２ｍ以上、幅約0.3m、深さ約0.1mである。

ＳＤ8214・8215　ＳＤ8215はＨトレンチから検出され、その東方約19mにＫトレンチのＳＤ8214がある。方向は西北西から東南東にのび、同一の溝とみられる。両溝の長さはＳＤ8214は33.5m、8215は４ｍあり、総延長約56.5mを測る。幅は0.5～1.0m、深さは約0.2mで断面Ｕ字形を呈する。

なお、ＳＤ8215の西側延長線上にＳＤ8201があり、ＳＤ8201、8214、8215は同一の溝と考えられる。ちなみに、総延長は87.7mになる。

ＳＤ8216　ＳＤ8214の南西部を切る溝で、南西から北東へのびる。長さ26m以上、幅0.3～1.2mあり、ＳＤ8214との重複部のみ細くなる。深さは約0.3mで断面Ｕ字形を呈する。

ＳＤ8217・8218　ＳＤ8217はＳＤ8214と重複し、ＳＤ8218はＳＤ8216と重複する。ともに、南から北にのび、同一の溝である。長さは22m以上、幅1.7～2.7mを測る。

5．遺　　物（第7・9図、図版十～十二）

今回の調査では弥生土器，古式土師器，土師器，須恵器の土器類と石鏃の出土をみた。以下，遺構に伴った遺物を中心に記述する。

掘立柱建物，各建物から多くの土器が出土したが，すべて細片で実測可能なものは数点である。ＳＢ8021の柱穴から須恵器杯身（１）が出土した。立ち上りは短く，よく内傾する。胎土，焼成は良く，黒灰色を呈する。

ＳＫ8201　土師器壺（２）・甕(26)がある。２は短かくて外反する口縁頸部と球状の体部からなる丸底の壺で，口径9.6cm，復元器高約7.5cmを測る。体部の内外面にハケ目調整を施す。胎土に石英を含み，焼成は良く橙褐色を呈する。26はいわゆる近江聖の甕で，口縁部を内弯させ端部に内傾する面をもつ。肩は張らず口縁径と変らない。体部内外面をハケ目調整し，口縁部は内面をハケ目調整，外面をなでる。口径19.8cmを測る。胎土に細砂を含み，焼成は軟質で淡赤褐色を呈する。

ＳＫ8202　須恵器杯蓋（３），土師器甕（４～６），把手（７）がある。３は口縁部と天井部の境界の稜・段はなく，天井部の丸い蓋である。口縁先端は丸くおさめる。天井部の約１／２をヘラ削りする。口径11.8cm，器高約3.8cmを測る。胎土に黒色斑文がみられ，焼成は良く灰白色を呈する。

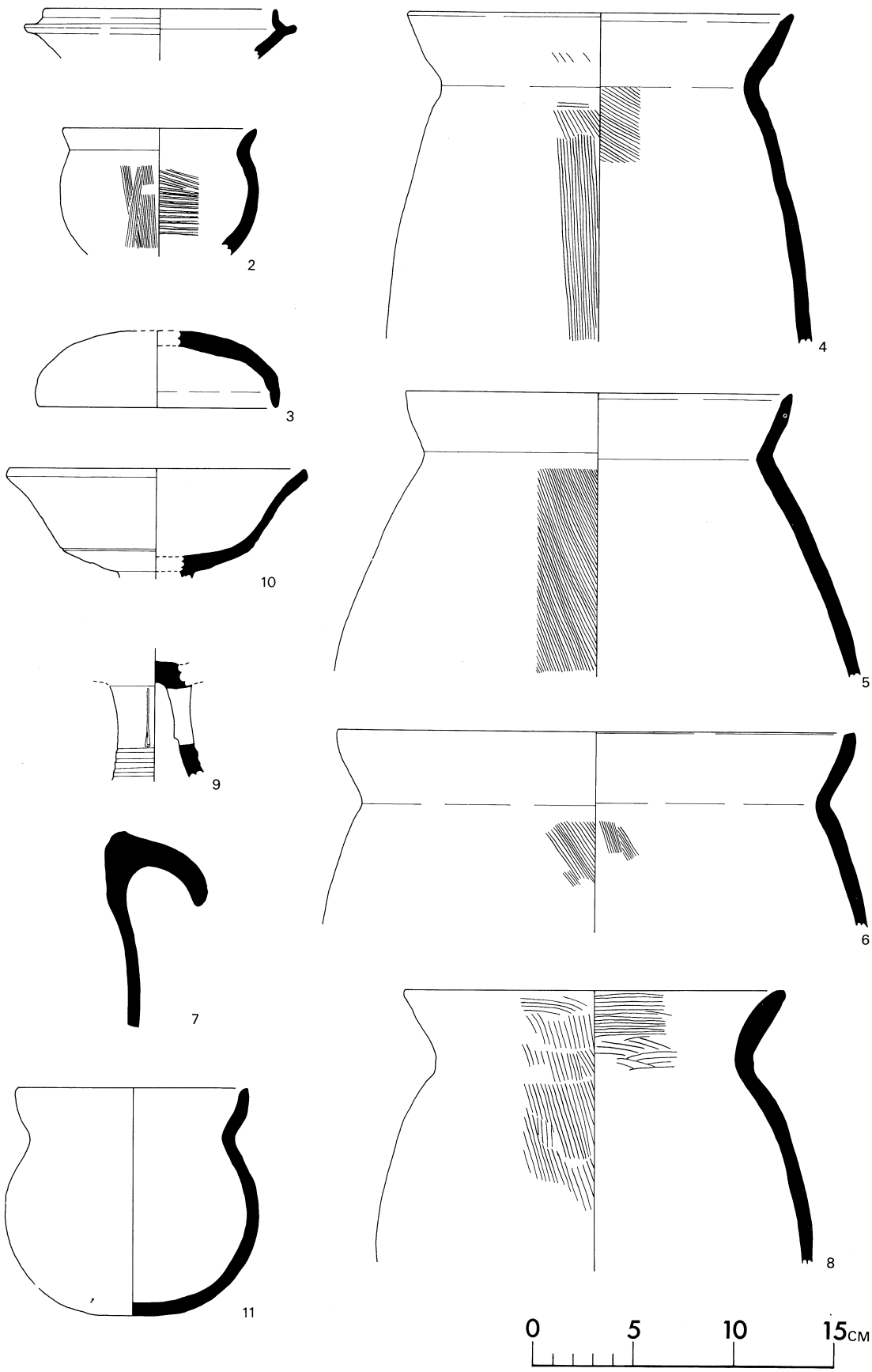
４は頸部を丸く屈曲させ，口縁部は外上方へのび，体部の肩は張らない。体部の内外面をハケ目調整し，口縁部外面はハケ目調整後なでる。口径19.0cmを測る。胎土に砂粒を多く含み，焼成はよく赤褐色を呈する。５はく字状に屈曲する口頸部の口縁端部に内傾する面をもち，体部の肩は張らず，体部の最大径は下位にある。体部外面はハケ目調整し，内面をヘラ削りする。胎土に石英を含み，焼成は良く淡赤褐色を呈する。外面の一部は黒褐色である。６は内弯する口縁部の端部に面をもつものである。口径約26cmを測る。体部の内外面をハケ目調整する。胎土に砂粒を含み，焼成は軟質で淡赤褐色を呈する。７は把手のみ遺存し，端部はよく垂下する。体部内面にハケ目調整をみる。

ＳＫ8203　土師器甕（８）がある。口縁部の内面側を肥厚させ，先端を丸くおさめる。体部外面と口縁部内面をハケ目調整し，体部内面はヘラ削りの可能性がある。胎土にやや大粒の砂粒を含み，焼成はやや軟質で淡黄褐色を呈する。

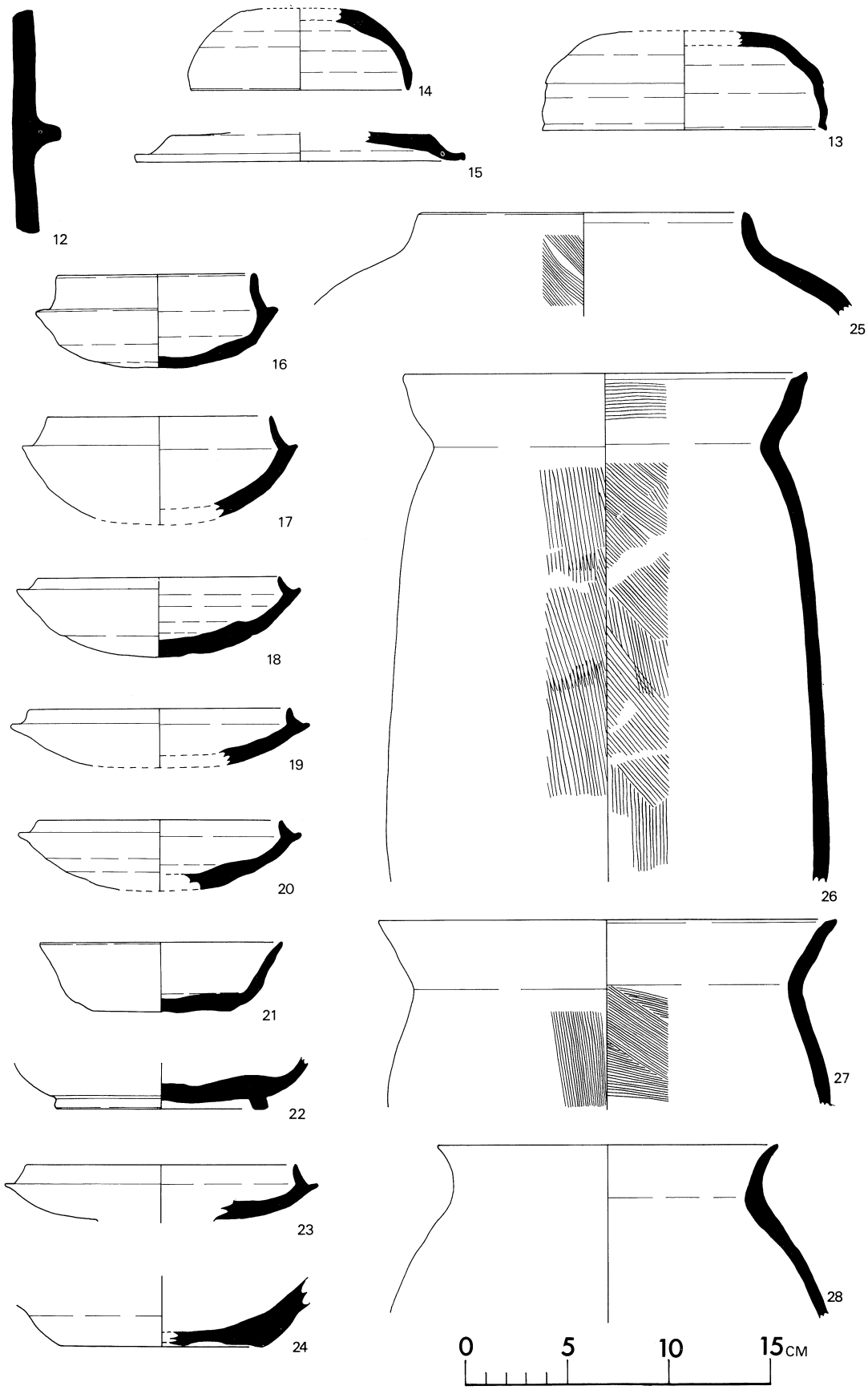
ＳＫ8204　須恵器高杯（９），土師器高杯(10)・壺(11)・甕(12)がある。９は脚柱部のみ遺存するもので，上下２段に３方向のスカシを穿ち，その中間に３条の凹線をめぐらす。スカシはヘラで細く切り込む程度である。胎土に石英を含み，焼成は堅緻で暗紫色を呈する。10は杯部のみ遺存する高杯で，底部と口縁部との境界に段がめぐる。口縁部はよく外反し，端部に面をもつ。口径14.7cmを測る。胎土に石英を含み，焼成は良く淡赤褐色である。11は内弯する口縁部と球状の体部からなる丸底壺である。外面はヘラ研磨を施すが摩滅のため明らかではない。口径11.3cm，器高11.4cmを測る。胎土は良く，焼成は軟質で淡茶褐色を呈する。12は体部のみ遺存するもので，外面に埴輪状の凸帯を付ける。外面に細いハケ目調整を施す。胎土に砂粒を含み，焼成は軟質で淡赤褐色を呈する。

掘立柱建物上層出土遺物　須恵器杯蓋(13～15)・杯身(16～22)・高杯(23)・壺(24)・土師器壺(25)・甕（27～29)・鉢(30)・高杯(31・32)がある。

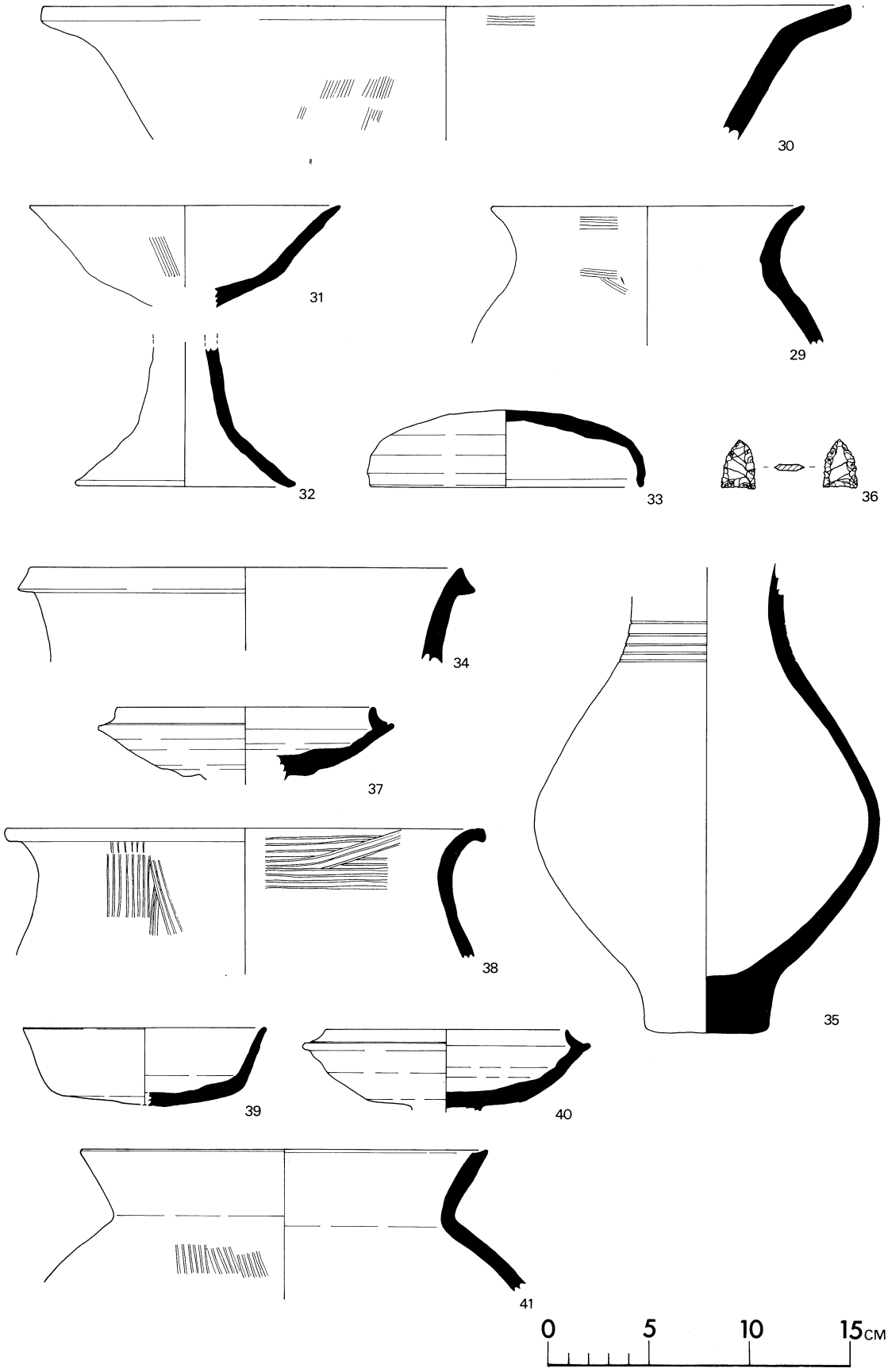
13は口縁部と天井部の境界に段をもち，口縁端部に内傾する面をもつもので，天井部の約１／３をヘラ削りする。口径14.0cm，器高約５cmを測る。胎土は精良，焼成は堅緻で灰白色を呈する。14は口縁部と天井部の境界を丸くおさめるもので，口縁端部は尖りぎみである。天井部の約１／４は未調整でヘラ切り痕を残す。復元



第７図　出土遺物実測図(1)



第８図　出土遺物実測図(2)



第９図　出土遺物実測図(3)

口径10.6cm，器高4.0cmを測る。胎土に細砂粒を含み，焼成は良く灰白色を呈する。15は口縁部の端部をごくわずかに垂下させるもので，天井部の約１／２をヘラ削りする。胎土は良く，焼成は堅緻で灰白色を呈する。16～20は立ち上りをもつ杯身で，16はよく立ち上り，先端を丸くおさめる。底部外面の約１／２をヘラ削りする。口径9.5cm，器高4.6cmを測る。胎土に微砂粒を含み，焼成は良く灰白色を呈する。17は内傾する立ち上りの先端を尖りぎみにし，底部は丸味をもつ。胎土にやや大粒の石英を含み，焼成は良く暗灰色を呈する。18～20の立ち上りは短く，よく内傾する。いずれも器高比数は低い。18は底部の約１／３をヘラ削りする。口径12.0cm，器高4.9cmを測る。胎土，焼成はよく白灰色を呈する。19・20は胎土に微砂粒を含み，焼成はやや不良で淡褐灰色を呈する。21は平底の杯身で口縁部をやや外反さす。底部外面の中央部にヘラ切り痕を残す。口径12.0cm，器高3.4cmを測る。胎土に石英を含み，焼成は良く灰白色を呈する。22は高台付杯身で，高台は低いが外方へふんばる。底部外面はヘラ切りのままである。胎土に砂粒を含み，焼成は良く灰白色を呈する。23は有蓋高杯の杯部のみ遺存するものである。立ち上りはよく内傾し，器高は低い。胎土に石英を含み，焼成は良く淡灰色を呈する。24は壺の底部とみられるもので，底部は平底を呈し，器壁は薄い。胎土に微砂粒を多く含み，焼成は良く明白灰色を呈する。

25の口頸部はゆるいカーブをえがいて立ち上り，先端は尖る。外面に荒いハケ目調整を施し，口縁部と体部の一部にススが付着する。胎土に砂粒を含み，焼成は良く淡黄褐色を呈する。

27～29は肩の張らない甕で，口縁部を外反させる。27は体部の内外面をハケ目調整する。29は外面をハケ目調整し，内面は摩滅のため不明である。胎土は27に石英が認められ，他は大粒の砂粒を含む。焼成はともに軟質で，色調は27は灰褐色，28・29は淡褐色を呈する。30は鉢の口頸部で，口縁部は外方へのびる。体部外面と口縁部内面をハケ目調整する。口径は約40cmを測る。胎土に石英を含み，焼成はやや軟質で明褐色を呈する。31・32は高杯の破片で，31の杯部は体部と口縁部の境界に段をもち，口縁部を外反させる。口径15.4cmを測る。32は下位を屈曲させる脚部である。調整はともに摩滅のため明らかではない。胎土・焼成は良く赤褐色を呈する。

Ｂトレンチ出土遺物　遺物包含層から須恵器杯蓋(33・43)・甕(34)，土師器甕(42)などが出土した。33は天井部に丸味をもち，口縁端部を外方へわづかにつまみ出すもので，天井部の約1／4はヘラ削りする。口径13.4cm，器高3.8cmを測る。胎土に石英を含み，焼成は良く灰白色を呈する。43は口縁端部を垂下させるもので，天井部は扁平である。天井の約１／２をヘラ削りする。胎土に砂粒，石英を含み，焼成は良く白灰色を呈する。34は口縁端部を外方へ折りまげ，先端を尖す。胎土に石英を含み，焼成は堅緻で暗灰色を呈する。42はいわゆる近江型の甕の体部で，内外面細いハケ目をていねいに施す。胎土に砂粒を多く含み，焼成はやや軟質で，淡黄褐色を呈する。

Ｄトレンチ出土遺物　遺物包含層から弥生土器壺(35)，石鏃(36)などが出土した。35は頸部に５条の凹線をめぐらす。体部最大径はほぼ中位にあり，底部は平底で器壁は他と比して非常に厚い。体部内外面はヘラ研磨と思われるが摩滅のため明らかではない。胎土に砂粒を多く含み，焼成はやや軟質で暗赤褐色を呈する。36は平面二等辺三角形に近い石鏃で，長さ2.4cm，底径1.6cm，厚さ0.2cmを測る。石材はチャート質で，光沢のある暗黒褐色を呈し，斜方向に白色の脈が数条はしる。

Ｅトレンチ出土遺物　遺物包含層から須恵器高杯(37)，弥生土器甕(38)などが出土した。37は杯部のみ遺存するもので，形態は23と似る。脚部の直径は杯部との接続痕から約４cmを測る。胎土，焼成は良く暗灰色を呈する。38は口縁部を丸く外反させるもので，口縁端部も丸くおさめる。肩は張らない。内外面を太くて荒いハケ目調整を施す。胎土に砂粒を含み，焼成は良く淡褐色を呈する。

Ｆトレンチ出土遺物　遺物包含層から須恵器杯身(39)・高杯(40)・甕(41)などが出土した。39は平底の杯身で，口縁部はわづかに外反し，底部は丸味をもち外面は未調整である。口径12.0㎝，器高3.8㎝を測る。胎土に砂粒を多く含み，焼成は良く灰白色を呈する。40は23・27より器高は少し高く，内外面に横ナデ痕を良く残す。胎土，焼成とも良く，暗灰色を呈する。41はく字状に屈曲する口頸部をもち，口縁端部に内傾する面をもつ。体部外面はタタキ調整を施し，内面はナデ調整である。胎土に石英を含み，焼成は良く白灰色を呈する。

6．まとめ

今回の調査の結果，小字鳥，倉地区から掘立柱建物が7棟検出された。建物は柱穴の重複関係，方位などから大きく3群にわけられそれが時期差を示しているといえる。

Ⅰ群とされる建物はＳＢ8021，8203～8206の5棟，Ⅱ群はＳＢ8202，Ⅲ群はＳＢ8207である。この中でⅢ群としたＳＢ8207は束柱のみ方形を呈し東西に建物がのびることから他と異なる柱格をもつとみられる。その位置は鳥，倉の南辺側の東部の位置に相当し，門跡と推定されるものである。このことから，Ⅰ・Ⅱ群とは方位を異にするがどちらかの群に属するものと考えられる。

建物の時期については柱穴出土遺物に6世紀後半から7世紀初頭の細片が含まれ，古墳時代後期に属する建物の可能性をもつ。しかし，耕作土床面直下から検出されたこれら遺構は土壙以外，時期決定に躊躇する。床工等からは比較的時期の新しい遺物も出土し，今後調査が計画されている愛知川町市遺跡に含まれる鳥ノ蔵の結果を待って判断したい。なお，古墳時代後期の掘立柱建物群の類例としては，守山市赤野井遺跡[13]がある。Ⅰ群（6世紀後半），Ⅱ群（7世紀前半），Ⅲ～Ⅴ群（8世紀前半～9世紀後半）の5群のうちⅠ・Ⅱがそれで，屯倉の性格をもつと推定されている。また，7世紀中葉頃の群構成（Ⅰ群）をみる美園遺跡[14]は高島郡の地方官衙として比定されている。このことは，早くから渡来人が居住し開発された当郡においても，上記のような官衙的要素をもつ遺跡の存在を想起することができる。

矢守遺跡は市遺跡を含めて『和名称』で言う愛知郡大国郷に比定でき，大国郷の西郷境は中山道（旧東山道）に想定されることから，大国郷は愛知郡の中心部に位置していたといえる。中山道の近くには，未だ明らかでない愛知郡衙を求めることができ当遺跡の位置は愛知郡でも重要な所であったとみられる。その中枢部が鳥，倉（蔵）ではなかったか。

現在，大国郷には野々目廃寺と畑田廃寺の2寺が確認され，畑田廃寺は隣接する勝堂古墳群との関係から，当群に本拠をかまえた愛智秦氏の氏寺として，野々目廃寺は大国郷の大国寺伝承の寺院に比定することも可能である。当遺跡と野々目廃寺は位置的関係から本来包括される遺跡としてとらえることができ，その相関関係を解明することが，当遺跡の性格を明らかにする鍵であるといえる。

ともあれ，当遺跡は弥生時代から古墳時代後期，更には市遺跡第一次調査で確認された12世紀中頃の掘立柱建物の存在は，連綿と当地に人々が生活をした証しである。また，遺跡の北側に存在する愛知郡条里制地割の水田や建物の検出されない地区から検出されるであろう南北地割をもつ畦畔は，愛知郡における古代から中世に変貌する村落の経営状態を如実にあらわしたものとして注目される。

註

① 葛野泰樹・徳網克己「市遺跡発掘調査概要」Ⅰ　（愛知川町教育委員会　(財)滋賀県文化財保護協会　昭和58年）

② 中野栄夫「近江国愛智荘故地における開発と灌漑」（『地方史研究』138号　昭和50年）

高橋誠一・小林健太郎「愛知川扇状地北半部の開発と条里」（『滋賀大学教育学部紀要』27号　滋賀大学教育学部　昭和52年）

葛野泰樹「愛知川流域の灌漑施設」（『滋賀文化財だより』№66号　(財)滋賀県文化財保護協会　昭和57年）

③ 昭和53年発掘調査

④ 近藤　滋「秦荘町野々目遺跡」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅴ　滋賀県教育委員会　(財)滋賀県文化財保護協会　昭和53年）

⑤　近藤　滋「小八木廃寺調査報告」（『滋賀県文化財調査年報』昭和49年度　滋賀県教育委員会　昭和51年）

⑥　昭和53年度発掘調査（第１次調査）

第２次調査　本書掲書第Ⅳ章

⑦　昭和53年度発掘調査

⑧　葛野泰樹・山中仁志『大間寺遺跡発掘調査報告書』（滋賀県教育委員会　（財）滋賀県文化財保護協会　昭和57年）

⑨　昭和53年度発掘調査

⑩　昭和53年度発掘調査

⑪　田中勝弘・近藤　滋「愛知郡秦荘町コクヨ敷地内古墳調査報告」（『滋賀県文化財調査年報』昭和48年度　滋賀県教育委員会　昭和50年）

近藤　滋　「秦荘町上蚊野古墳郡」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅳ－Ⅱ滋賀県教育委員会　（財）滋賀県文化財保護協会　昭和52年）

近藤　滋・藤川清文他「秦荘町上蚊野古墳群」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅴ　滋賀県教育委員会　（財）滋賀県文化財保護協会　昭和53年）

⑫　近藤　滋・石橋正嗣・石原道洋『軽野正境遺跡発掘調査報告書』（秦荘町教育委員会　昭和54年）

⑬　山崎秀二他「守山市赤野井遺跡」（『滋賀県文化財調査年報』昭和51年度　滋賀県教育委員会　昭和53年）

⑭　林　博通・松浦俊和・宮成良佐・葛野泰樹『美園遺跡発掘調査報告』（滋賀県教育委員会　（財）滋賀県文化財保護協会　昭和50年）

1　矢守遺跡調査地遠景（東から）

2　矢守遺跡調査地遠景（南西から）

1　Bトレンチ　掘立柱建物群（南から）

2　Bトレンチ　掘立柱建物群（北東から）

1　Bトレンチ　掘立柱建物群（北から）

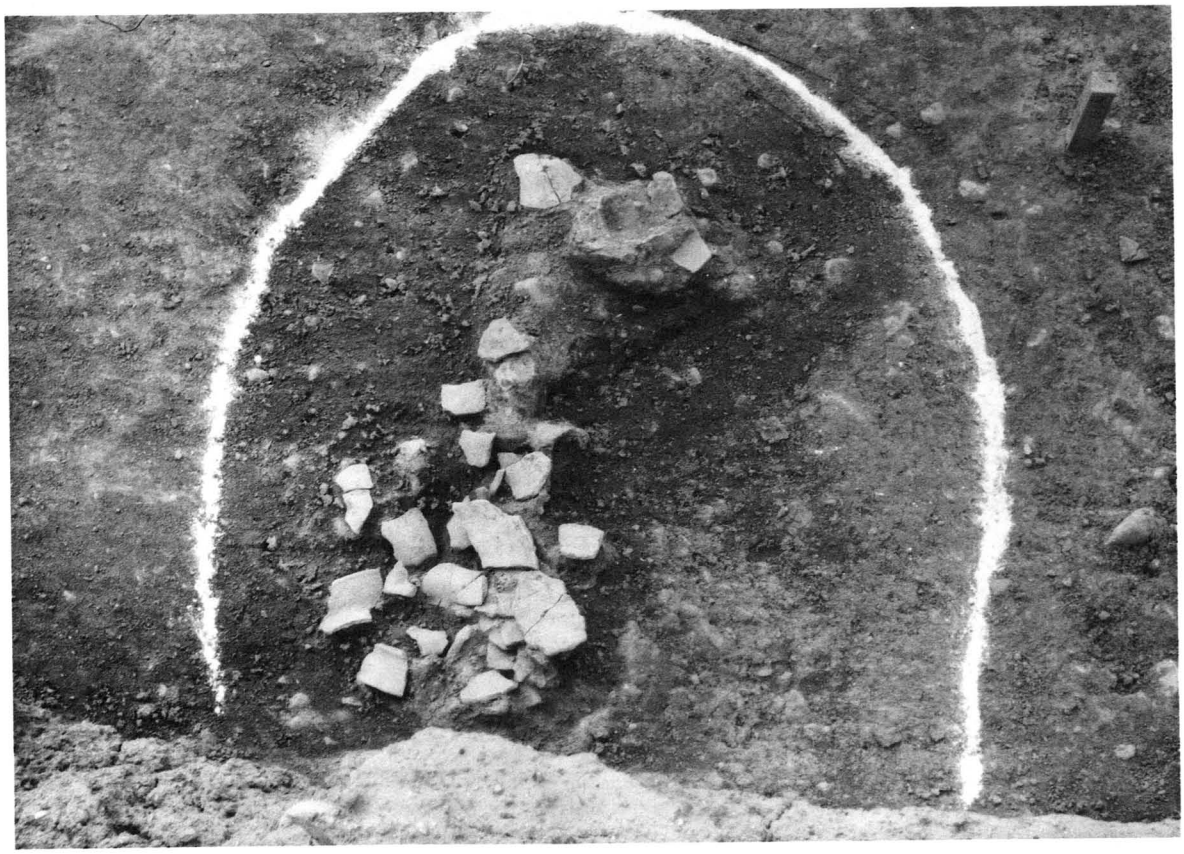
2　Bトレンチ　SB8204（南から）

1　Cトレンチ　SB8206（北から）

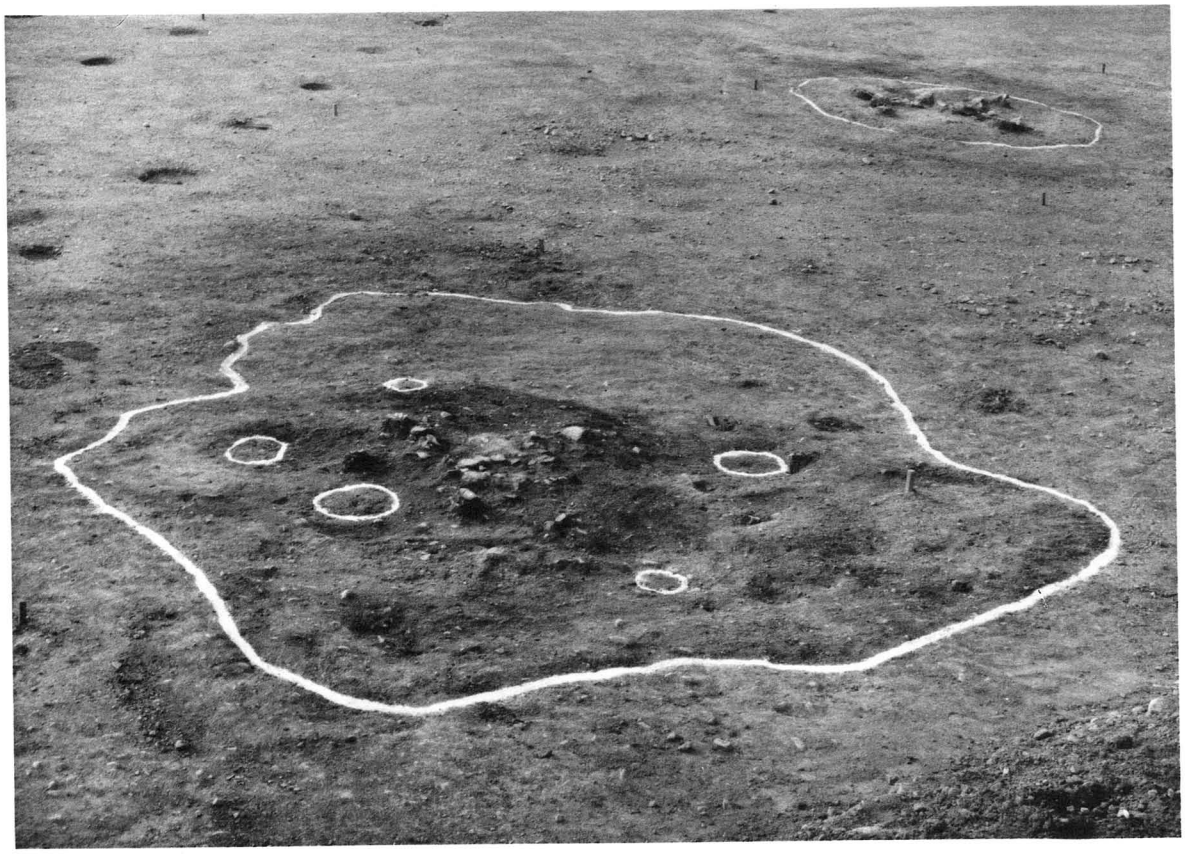
2　Cトレンチ　SB8205（北から）

1　Dトレンチ　SB 8207（南から）

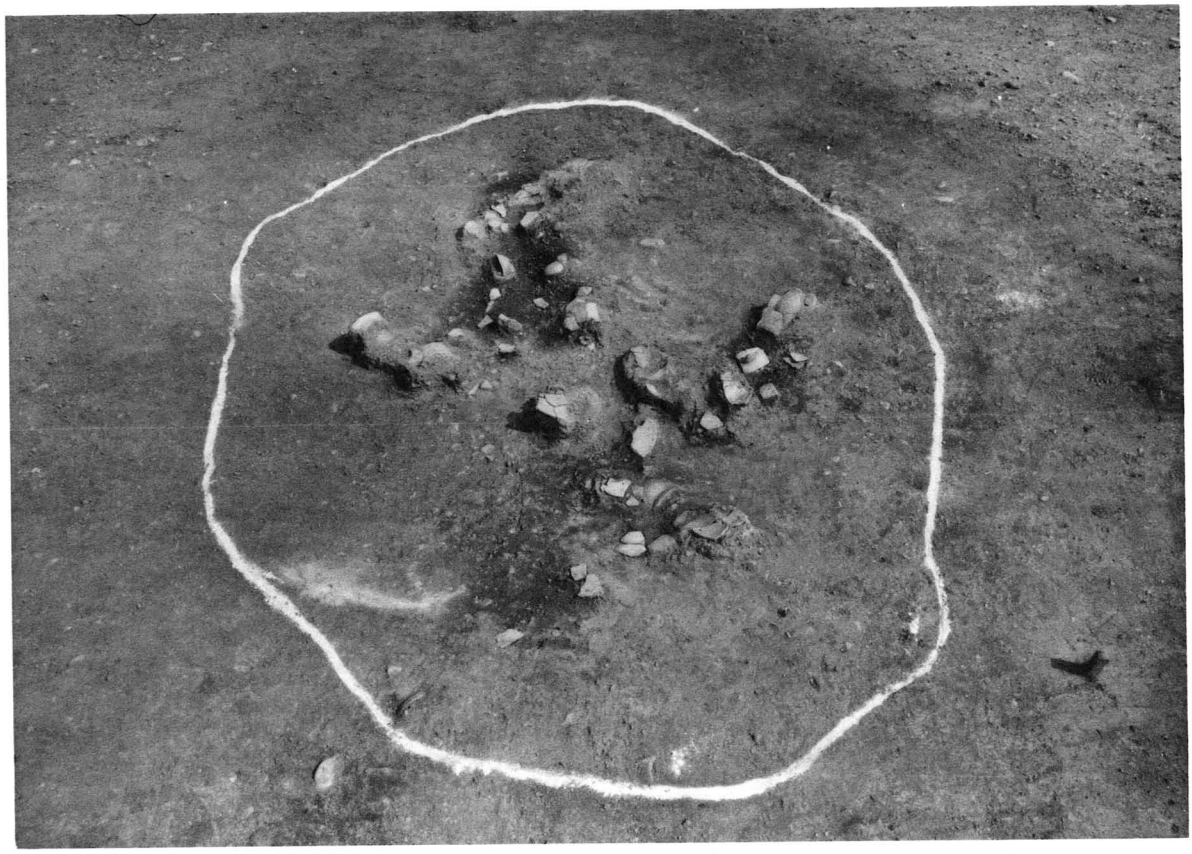
2　Bトレンチ　SK8201（南から）



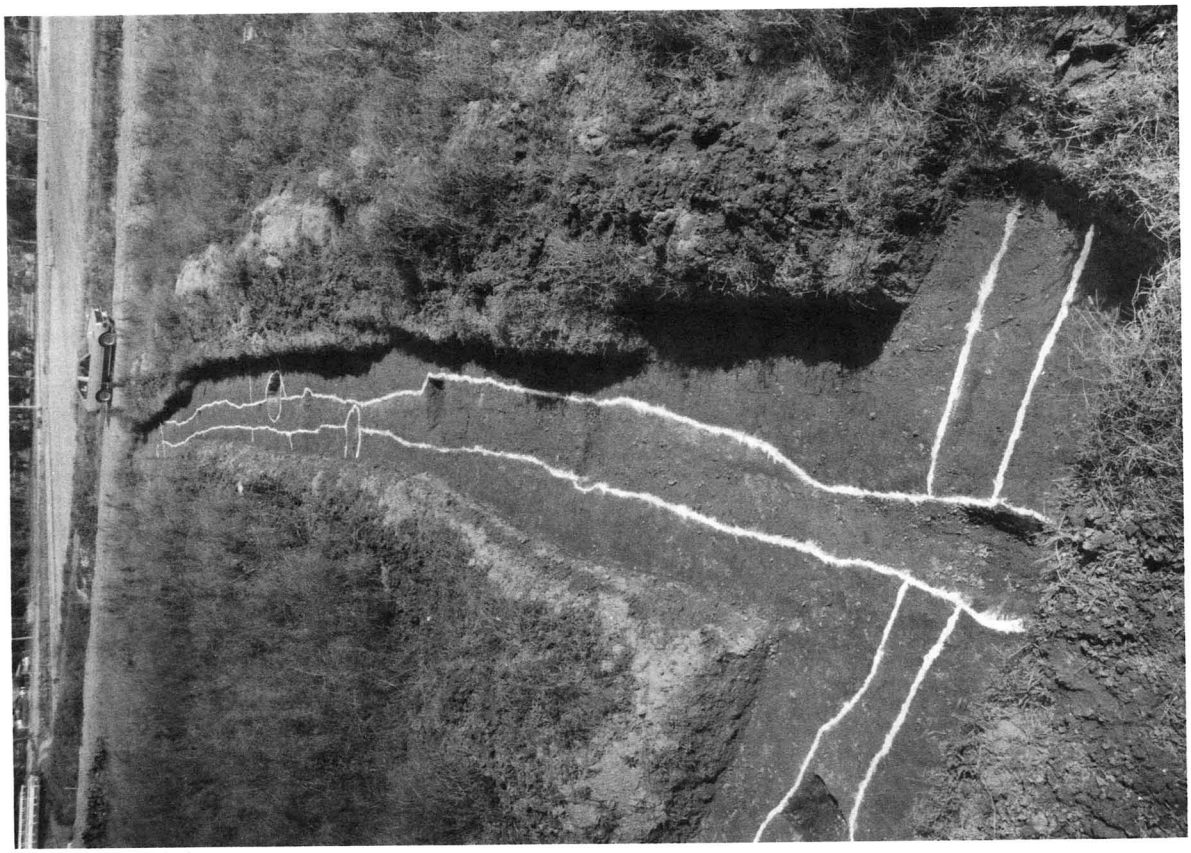
1　Bトレンチ　SK8203（東から）



2　Bトレンチ　SK8204（南から）

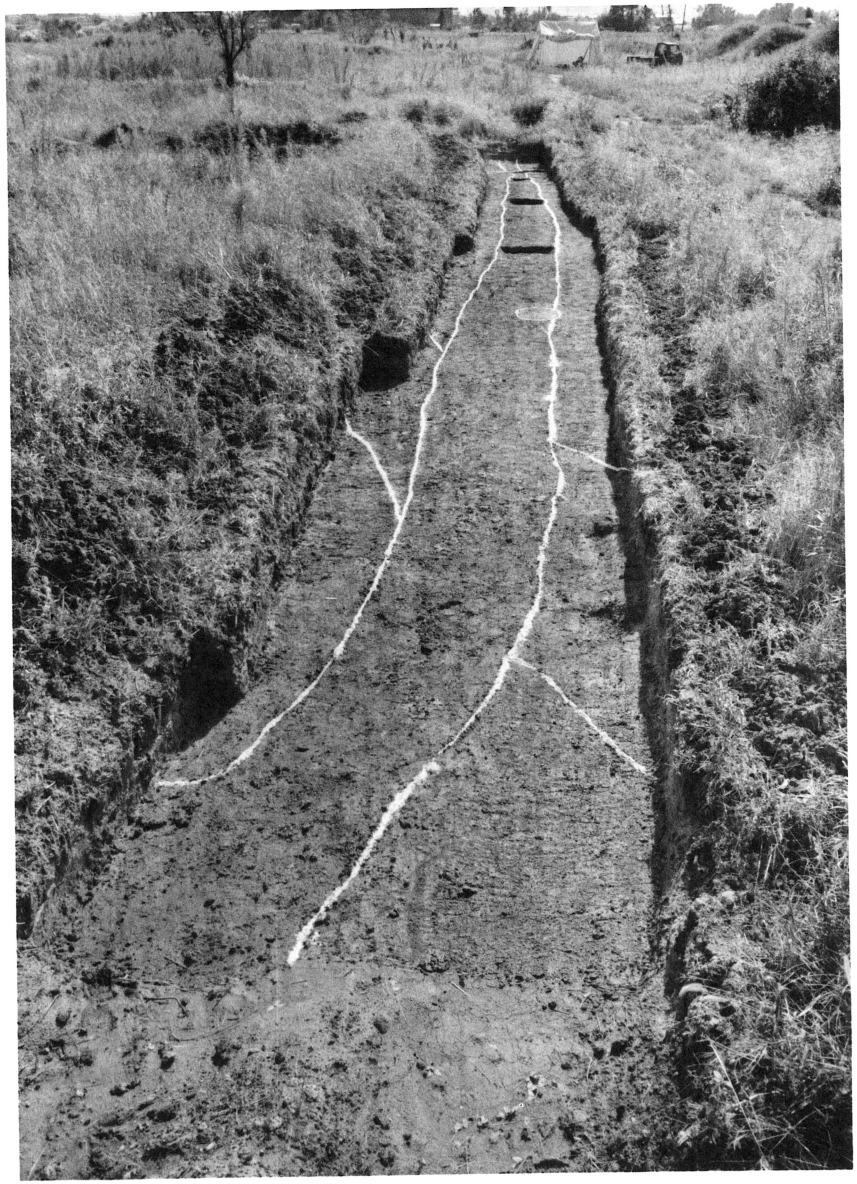


1　Bトレンチ　SK8205（南から）



2　Kグリット　SD8214（東から）

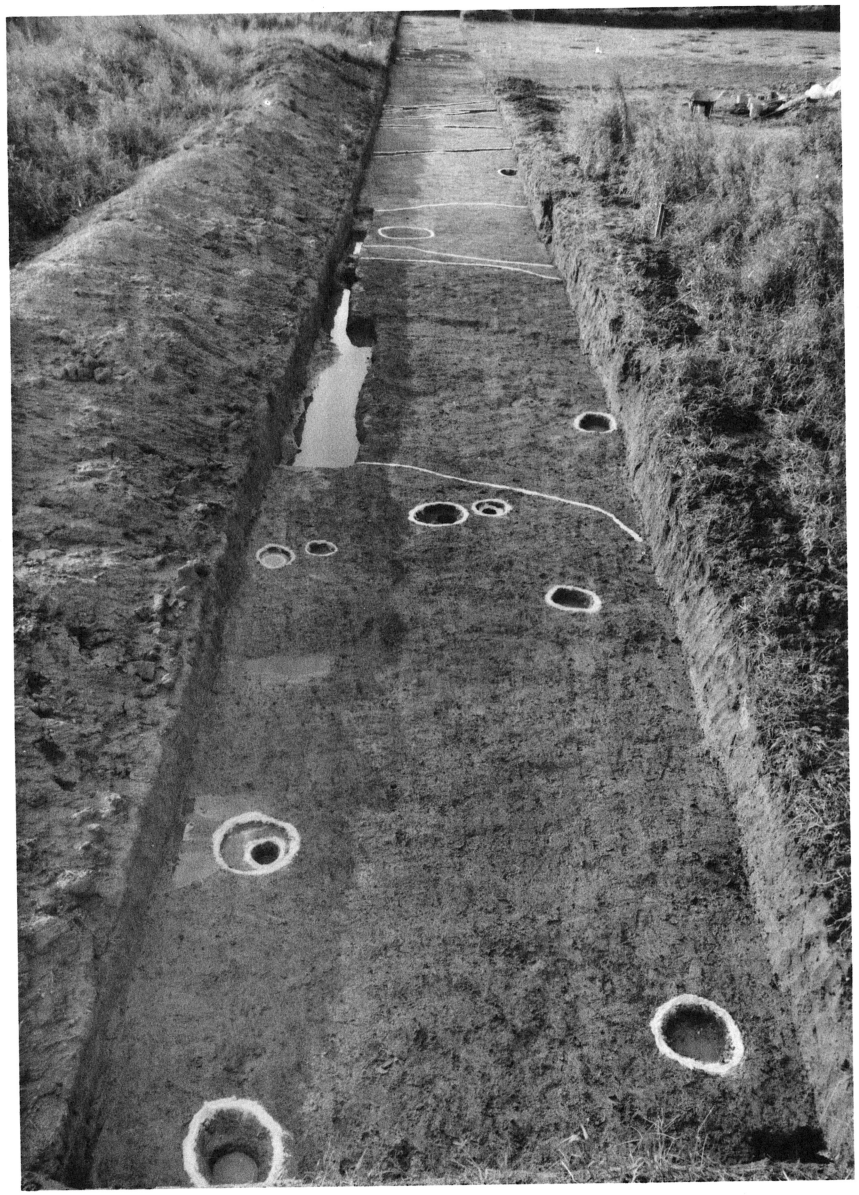
図版八　矢守遺跡



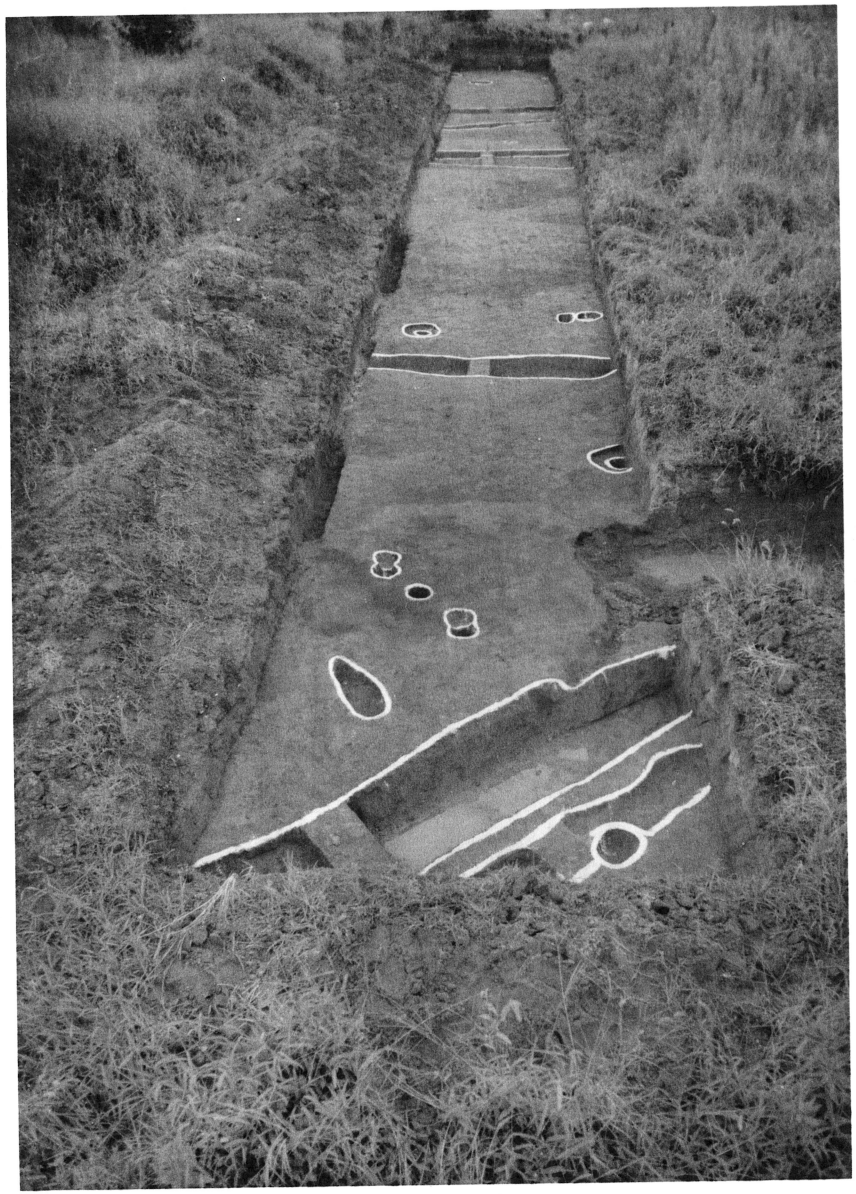
1　Kグリット　SD8216・8218（北東から）

2　Dトレンチ（南西から）

図版九　矢守遺跡



1　Cトレンチ（南東から）

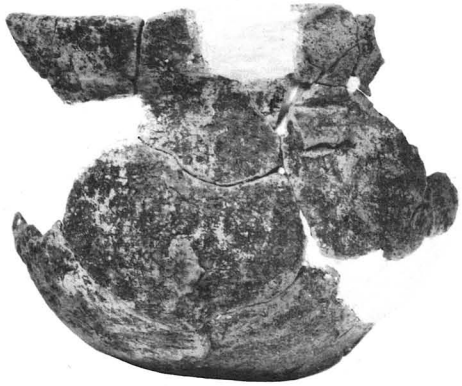


2　Cトレンチ　拡張部（南東から）

2

10

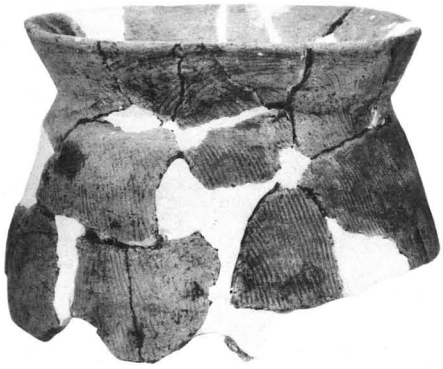
4



11

5

12



8

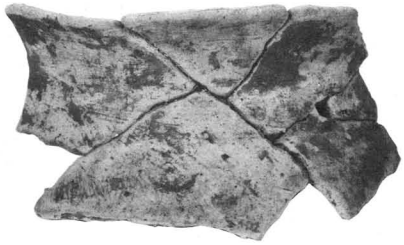
15

43

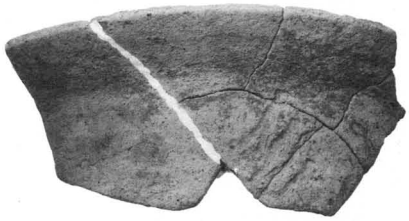
18

出土遺物

26



29



30

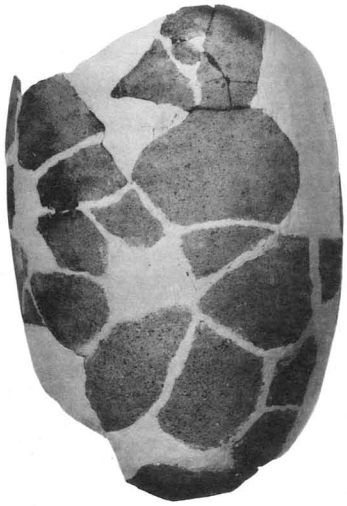
31

32

33

35

36



42

出土遺物

第４章 愛知郡秦荘町軽野遺跡

1．はじめに

本調査は、滋賀県が実施する県営ほ場整備事業暗渠排水工事（蚊野工区）に伴うものである。軽野遺跡は古から瓦の出土が知られ、また、小字に塔ノ塚をみることから『近江愛知郡志』には「丘地（塔ノ塚）の南方、水田中に一巨石ありて古寺全盛時代の塔の礎石なるを慥めたり、依て丘地に入り草を分けて土中を探りしに優秀なる唐草瓦の破片や平瓦の破片を発見したり。（中略）昔時七堂伽藍の大刹聳之しを證す。」と記述し、寺院の存在を示唆していた。当該地には愛知郡で遺存する古代寺院跡と同じく、南北方向を基準とした方格地割が残っており、そこが軽野塔ノ塚廃寺の推定地とされていた。

昭和53年度ここにほ場整備事業が実施されることになり、同年水路予定地と削平部分を中心に発掘調査が行なわれた。その結果、寺域の西と南を画する溝と南門（３×２間）が検出された。しかし、北東限を画する施設や主要伽藍部分は未確認に終り、寺院の構造は明らかにされていない。ただ、出土遺物に大量の瓦が含まれ白鳳期から鎌倉時代にかけてのものであることが判明した。

この調査によって、塔推定地は現状で保存し、寺域内は削平をさけることで遺跡の保存がはかられた。

しかし、今回の暗渠工事は前回保存をした主要伽藍部分にも工事を行われることになり、事前に発掘調査を実施し遺跡の保存策を講じることにした。

調査は文化財保護課が県農林部耕地建設課より予算（4,440,000円）の再配当をうけ、財団法人滋賀県文化財保護協会へ委託して実施した。調査・整理期間は昭和57年10月から昭和58年３月までとした。

なお、この調査にあたっては秦荘町教育委員会をはじめ地元の方々にお世話になった。さらに、瓦類の整理・報告については西田　弘先生に多くの御教示を得た。ここに記して謝意を表します。

第１図　軽野遺跡位置図およびその周辺の遺跡（S＝1/50000）

１．軽野遺跡　２．妙園寺廃寺　３．小八木廃寺　４．目加田廃寺　５．野々田廃寺　６．畑田廃寺　７．報恩寺遺跡　８．常安寺遺跡　９．光林寺遺跡　10．金台寺遺跡　11．西明寺遺跡　12．金剛輪寺遺跡　13．軽野正境遺跡　14．大間寺遺跡　15．市・矢守遺跡　16．市・矢守遺跡鳥ノ蔵地区　17．二子塚古墳　18．金剛寺野古墳群　19．平柳古墳群　20．長塚古墳　21．塚原古墳　22．栗田古墳群　23．勝堂古墳群　24．高坪山遺跡　25．斧磨遺跡　26．愛知井跡

2．位置と環境

軽野遺跡は滋賀県愛知郡秦荘町大字軽野・蚊野に所在する。古から寺院跡と推定されていた遺跡で、寺域は1.5町から2町四方の規模を有した大寺院と考えられている。創建期はこれまでの調査によって白鳳期に比定され、鎌倉時代まで存続していたとしられている。

当地は宇曽川の右岸に位置し、宇曽川によって形成された扇状地の中位にあたる。かっては扇状地を地形にみあったように開墾していた水田の影環を眺望できたのであるが、今は大規模ほ場整備事業によって、画一化された水田形態をみる。ただ、地形が扇状地であるため、現在の水田も一筆づつ西側へ段々状に形成され、往時の地形をそこに彷彿させられる。しかし、現地形からは当時の小字名や畦畔を追求することはできない。

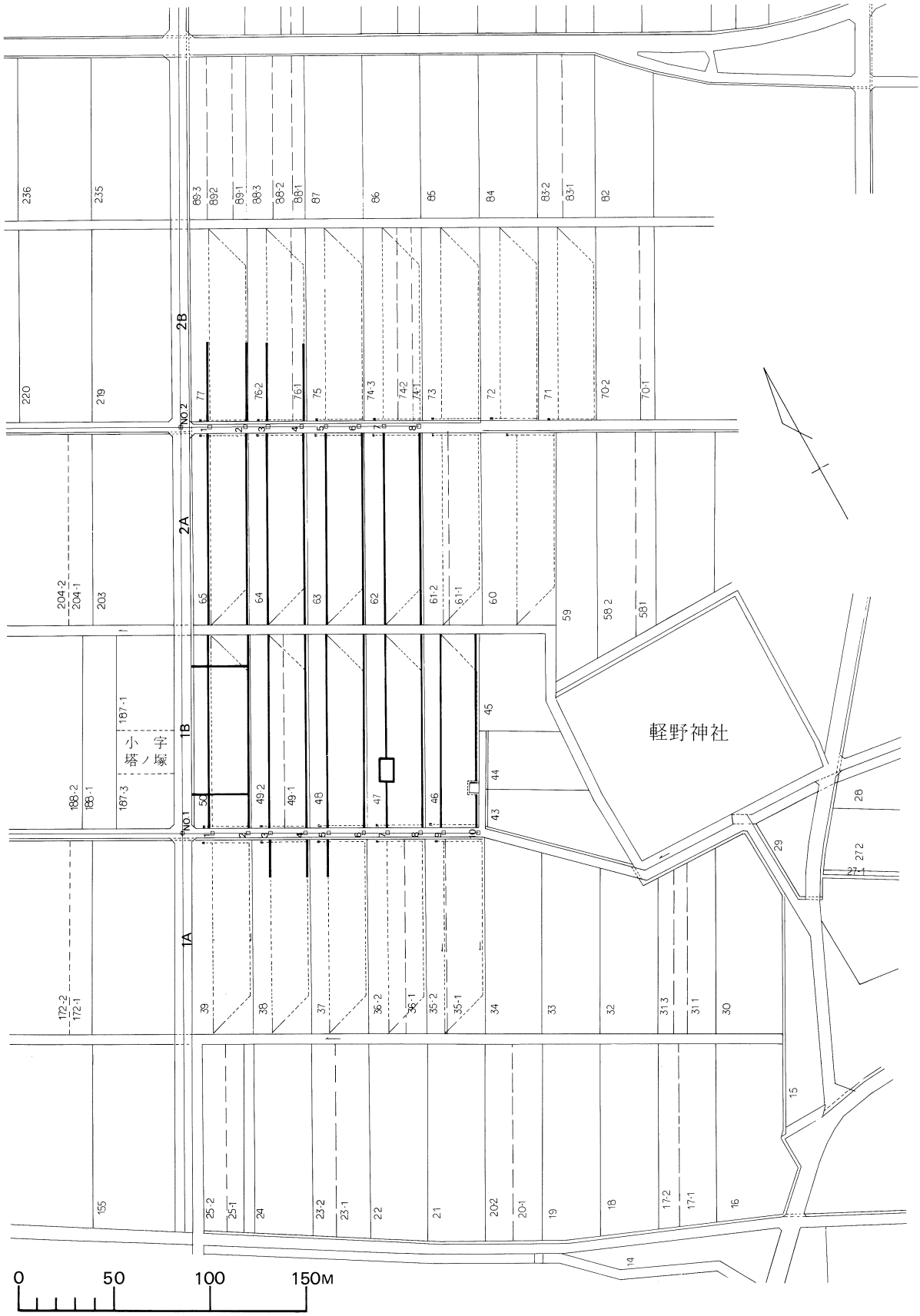
軽野遺跡はこのように区画整備された水田の中に拡がり、塔跡として推定されている1区画（30m四方）のみ緑地公園として保存され、遺跡の説明板も設置されている。

当遺跡の周辺には南北方向を基準とする方格地割をもった寺院跡や集落跡がある。寺院跡では北から目加田廃寺①、妙園寺廃寺、小八木廃寺②、野々目廃寺③、畑田廃寺④がそれで、1町ないし2町四方の寺域をもつ。これら諸寺院は愛知郡内に居住した渡来系氏族愛智秦氏や軽野氏と緊密な関係にある氏寺に相当するものと郡寺的性格をおびたものとがある。しかし、今のところどの寺院をそれに比定するか明らかにされていない。

ただ、当遺跡に隣接する蚊野には軽野神社が鎮座し、大字名に軽野の名をみることができ、さらに、宇曽川右岸堤には当郡最大の規模をほこる金剛寺野古墳群（約300基⑤）が位置することから、当遺跡を軽野氏と関連づけ、また、畑田廃寺はこれまでの調査によって2町四方の寺域をもつ大寺院であることが判明し、「秦」と銘記した墨書土器の出土、さらに、隣接地に大円墳で構成される勝堂古墳群（48基）が遺存することなどから、畑田廃寺を愛知郡の雄、愛智秦氏と関連づける説がある。そして、大国寺伝承のある寺院を野々目廃寺に求め、郡寺をそれに比定づけることも可能ならしめている。いづれにしても、今は推定の域を脱しきれづ今後の調査、研究が必要である。

集落跡では、当遺跡の北東部に毛入堂遺跡⑥が隣接し、6世紀後半から12世紀中頃にかけての遺物の出土をみる。南方約1kmには6世紀前葉の竪穴住居で構成された軽野正境遺跡⑦があり、宇曽川対岸には地方官衙と考えられている大間寺遺跡⑧がある。その西方約1kmには本報告書にも掲載した矢守遺跡⑨と市遺跡⑩がある。大間寺遺跡、市・矢守遺跡とも1町から2町四方の方格地割をもち、上記の寺院との相関関係が注目される。

第２図　軽野遺跡調査範囲図



第３図　軽野遺跡トレンチ位置図

3．調　　査

1．調査経過

昭和57年度の調査は、蚊野工区約4.5 haを対象とした。調査は暗渠排水溝布設工事のため排水溝予定地にトレンチを設定し遺構の有無を確めた。（第２図）

調査用基準点は第３図のように定め、各トレンチを便宜的に１Ａ－１・２……、１Ｂ－１・２……、２Ａ－１・２……、２Ｂ―１・２……と番号を付した。トレンチは合計で27本設定し、遺構の確認された１Ｂ―１、７トレンチを拡張した。（第３図）

検出された遺構は１Ｂ－１トレンチで礎石、瓦列、溝、瓦敷整地層、１Ｂ－７トレンチで瓦窯２基と柱穴である。その他には５本のトレンチからほ場整備の実施される昭和53年まで存続していた河川跡を検出したのみで、直接寺院に関連づけられる遺構は検出されず、伽藍配置を明らかにする資料は得られなかった。

遺物としては、１Ｂ－１トレンチから大量の瓦類の出土をみた。瓦類には完形の軒平瓦もある。瓦窯からは灰原も含めて、遺構の遺存度の低さから遺物の出土量は少なかった。

2．調査日誌（抄）

昭和57年

10月４日　本日から発掘調査を開始する。調査地遠景写真撮影および調査地踏査。

10月５～９日　１Ａ・Ｂ区基準杭設定作業。

10月12～16日　２Ａ・Ｂ区基準杭設定作業。

10月18～21日　１Ｂ区トレンチ設定作業。

10月22日　１Ｂ－１トレンチ掘削作業。表土下0.5～0.7mから大量の瓦と礫、溝検出。

10月23日　１Ｂ－１トレンチ北東部掘削。心礎とみられる礎石を検出。

第４図　暗渠排水工事状況

第５図　1B－1トレンチ調査状況

10月25・26日　１Ｂ－２・３トレンチ掘削。２トレンチでは表土下0.2～0.3mで地山層をみる。瓦の出土量は少ない。３トレンチの南東部から池(沼)を検出する。耕土直下は地山となる。

10月27・28日　１Ｂ－４トレンチ掘削。北東部で河川跡検出。

10月29日　１Ｂ－５トレンチ掘削。１Ｂ－１トレンチ断面実測。

10月30日　１Ｂ－６トレンチ掘削。中央部で河川跡検出。焼土のかたまり混入する。

11月１日　１Ｂ－７トレンチ掘削。トレンチ中央部で河川跡を、その南側で焼土・灰原を検出する。瓦の出土をみる。

11月２日　１Ｂ－８トレンチ掘削。何ら遺構は検出されず。

11月３日　本日文化の日。発掘調査を作なう。１Ｂ－２・３トレンチ断面実測作業。

11月４日　１Ｂ－７トレンチ焼土部分拡張。瓦窯２基を検出する。瓦窯は耕土直下にあり、床面のみ遺存する。

11月５～10日　１Ｂ－８～10トレンチ掘削作業。耕土直下地山層となり何ら遺構は検出されない。

11月11日　２Ａ－１・２トレンチ掘削作業。耕土直下地山層となり、少量の遺物を出土するも遺構は検出されない。

11月12日　２Ａ－３・４トレンチ掘削作業。遺構はない。

11月13日　２Ａ－５・６トレンチ掘削作業。依然遺構は検出されず、これより北東部への追求は止める。１Ｂ－４～６断面実測作業。

11月14日　日曜日にかかわらず作業を行なう。１Ｂ－８～10断面実測作業。

11月15・16日　２Ｂ－１～３トレンチ掘削作業。遺構は検出されず。

11月17・20日　１Ａ－３～５トレンチ掘削作業。沼跡検出するのみ。２Ｂ－１～３トレンチ断面実測作業。

11月22～27日　１Ｂ－１トレンチ清掃作業。および写真撮影。

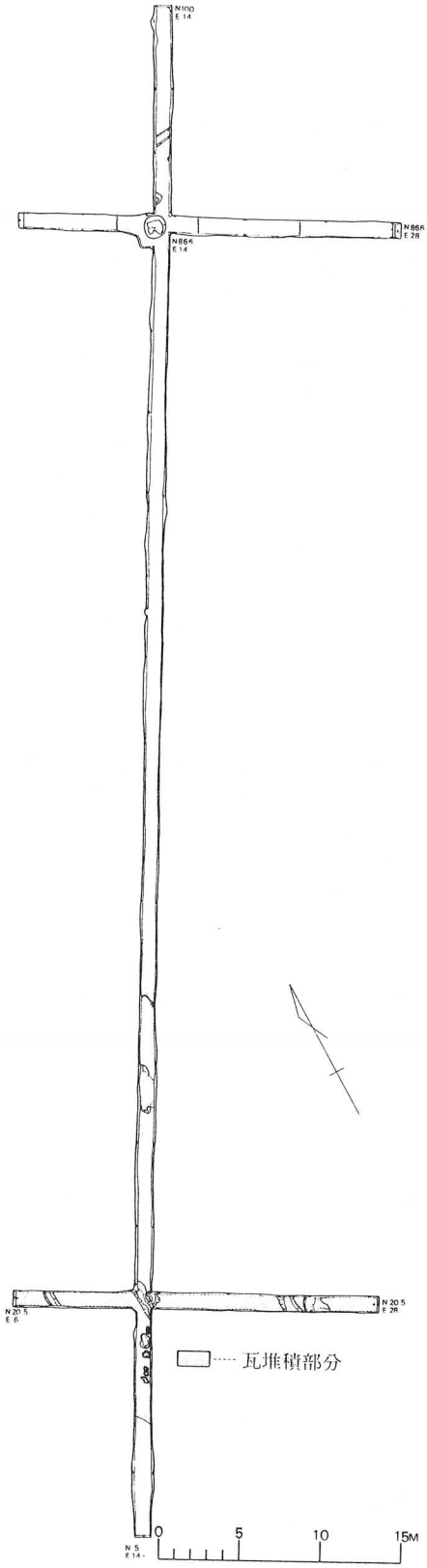
11月29・30日　１Ｂ－１トレンチに直交するトレンチ２本掘削。瓦・礫敷追求。

12月１～11日　１Ｂ－１トレンチ平面実測作業。

12月13～18日　瓦窯追求。写真撮影と実測作業。

12月20～27日　２Ａ－１～６トレンチ断面実測作業。これにて現地調査を完了する。なお、年をあけてトレンチの埋め戻し作業を行なう。

4．遺構（第6図、図版一～十）



第６図　軽野遺跡１Ｂ－１トレンチ平面実測図

今回の調査では１Ｂ－１トレンチから礎石、溝、礫・瓦敷遺構を、１Ｂ－７トレンチから瓦窯等を検出した。他には、沼跡、河川跡等があるがこれらは昭和53年度のほ場整備事業を実施するまで存在していたものであり、ここでは割愛する。

１Ｂ－１トレンチ（第６・７図、図版二～四・七）

礫・瓦敷遺構　群を構成して検出された。大きく５群に分かれ、第１～５群とする。

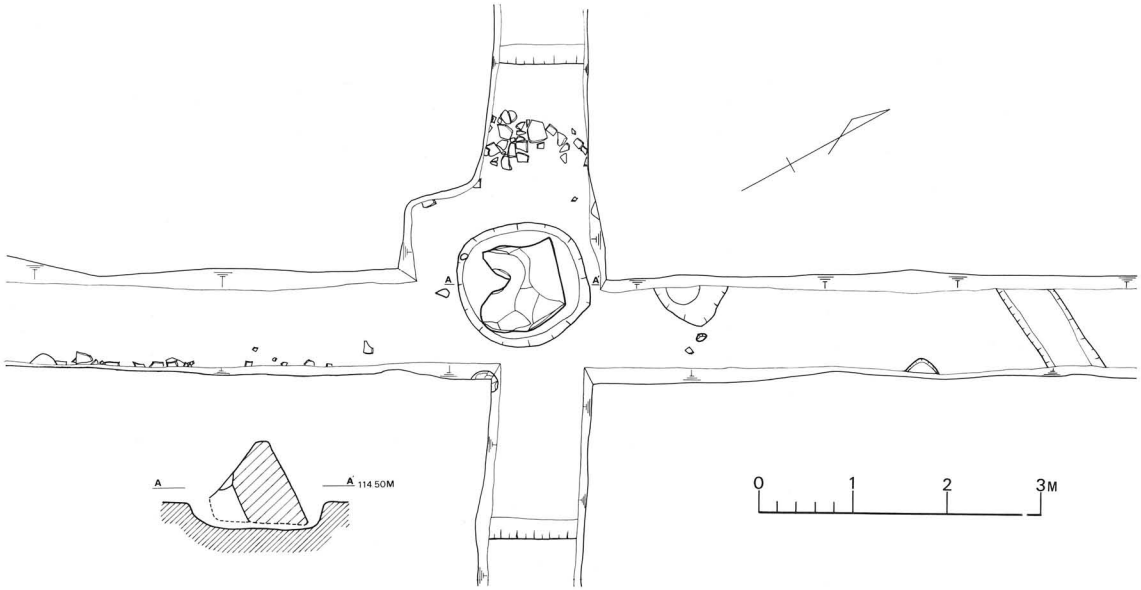
第１群：トレンチの０点から11～26mの15m間にあり、３～７㎝の小礫と細片瓦とが一面に敷かれる。南側は沼によって消滅し、北側は溝（ＳＤ４）で終る。23mから北側は平瓦の破片が多くなり、24.5m地点で重弧文軒平瓦が出土し、溝の落ちぎわは平瓦が溝方向に折り重なるように出土する。第１群の東西幅は20m以上あり、西側へつづく。20～21m地点には南北方向に主軸をもつ溝ＳＤ１とその東約10mにＳＤ２、ＳＤ１の西5.7mにＳＤ３があり、いづれも南北方向をむく。ＳＤ１は幅0.46～0.8m、深さ約0.1mを測り、東側の肩が凸凹する。ＳＤ２は幅約2.8mあり、東側壁は段々に落ち込み、溝の底部は西側にある。深さは0.12mである。ＳＤ３は幅0.6m、深0.15mを測り、断面Ｕ字形を呈する。ＳＤ４はＳＤ２の北延長13.5mにあり、幅2.1m深0.16mを測り、西側壁に0.3～0.4mの花崗岩の自然石が４個存在する。並んであるか判然としない。溝中央部には直径25㎝の丸太がある。流木とみられる。溝ＳＤ１～ＳＤ４は同一方位をとり、平行関係にある。

第２群：ＳＤ４の東側から35.5mの7.5m間にあり、28mから32mまでは崗は少なく、32～35.5mの3.5mの間は第１群と同じく小礫、小瓦片を敷く。29m付近に平瓦の破片が散乱し、34m付近に単弁八葉軒丸瓦（Ａ型式）が出土する。

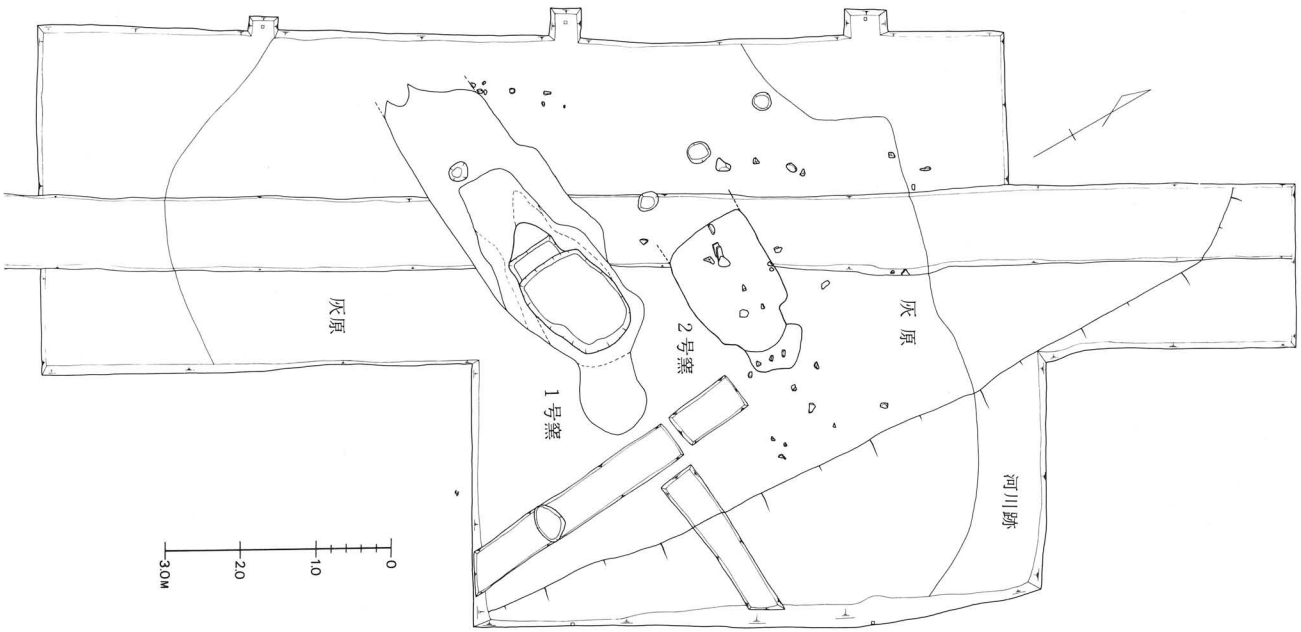
第３群：37mから45mがそれで、37～41mは比較的少なく、41mに0.12mの落ち込みがありそれより４m間は礫敷となる。この間は特に瓦の堆積が多く約0.2mの厚さを測る。平・丸瓦の出土が多く、単弁八葉軒丸瓦（Ｂ型式）も出土する。

第４群：49.5mから55mの5.5mの間で、この群は礫は少なく多量の瓦堆積をみる。整地面とするより瓦堆積地で、軒丸瓦（Ｃ型式）や唐草文軒平瓦（Ｂ型式）が出土する。

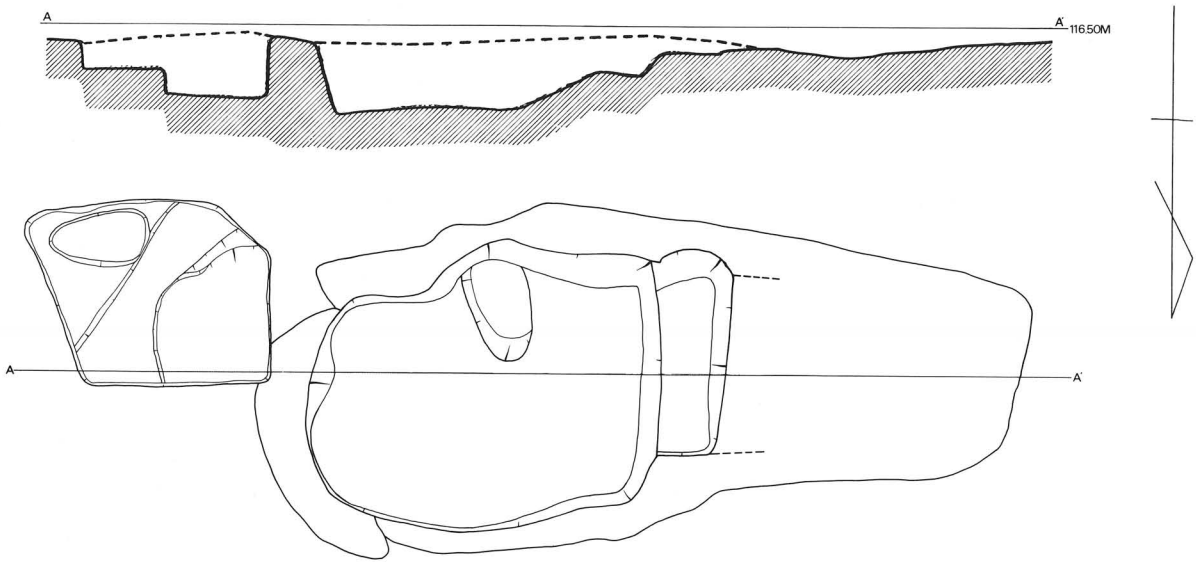
第５群：81mから85mの４mの間で、約0.1mの瓦の堆積をみる。平瓦が多く礫は少なく地山は粘土となる。



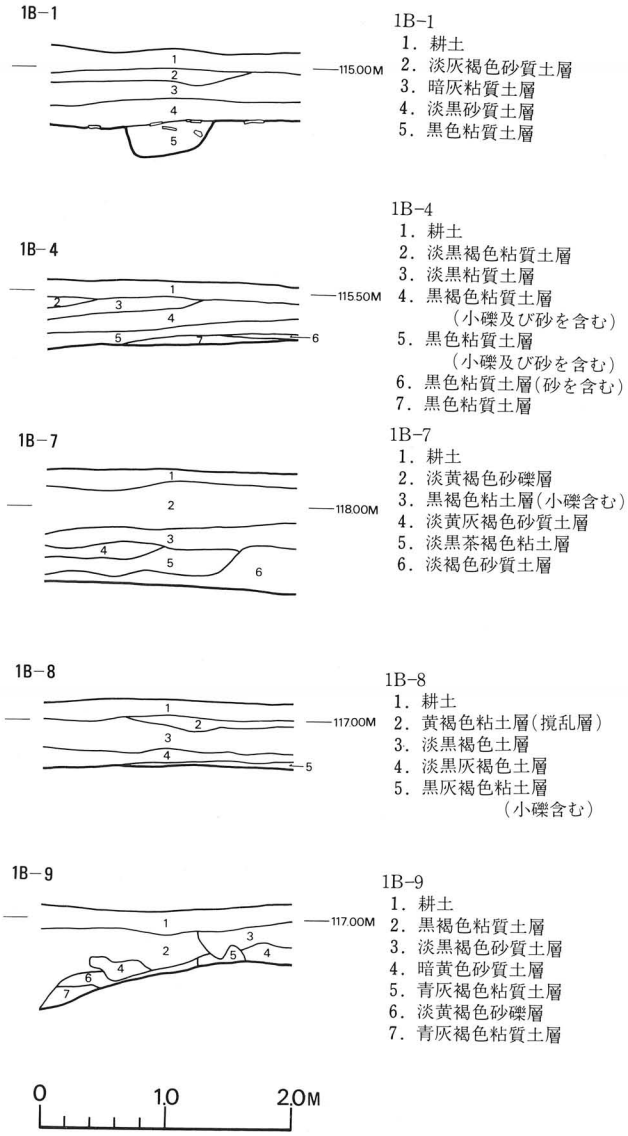
第７図　軽野遺跡１Ｂ－１トレンチ礎石周辺平面実測図



第８図　軽野遺跡瓦窯平面実測図



第９図　軽野遺跡１号瓦窯実測図



第10図　軽野遺跡1Ｂ区トレンチ断面図

礎石　トレンチ86mの表土下約0.4mから検出された大きな礎石で、南側へ大きく傾むく。南側約1／4は欠失する。表面は平坦で中央に円孔をもつ。側面を５角形にカットし、直径は東西0.9m、南北約1.0mを測り、高さは約1.0mあったとみられるが、南側の底部も欠失し断面三角形を呈する。中央の円孔は直径0.24m、深0.08mあり、底部は丸い。使用石材は花崗岩である。礎石は直径1.4mの土壙内にすえられ、深度は約0.3mを測る。埋土は淡白褐色粘土で、黒色土器片が出土した。

礎石の周囲には瓦列、溝等がある。瓦列は礎石の西1.4mにあり、トレンチの方位と平行する。平瓦・丸瓦の破片を２ないし３片を組み合せ１列にしたもので、幅は0.5mある。１段のみの遺存である。瓦列の0.55m西は大きく落ち込み沼状を呈する。

溝（ＳＤ５）は礎石の5.5m北にあり、東西方向を主軸にもつ。幅0.54m、深0.19mあり断面Ｕ字形を呈す。礎石と溝との間には柱穴が２基あり南側は直径0.8m、北側の柱穴は直径0.35mを測る。

礎石の東側は何ら遺構はなく、除々に地山面は高くなるが、約2.4mのところで0.1mの段をみる。

１Ｂ－７トレンチ（第８・９図、図版四～七）

瓦窯　トレンチの約40m地点で瓦窯２基と灰原、河川跡を検出した。瓦窯は２基並んであり、その東側に灰原は拡がり、河川となる。河川は最近まで存

在していたものである。

瓦窯は水田耕作土直下の地山面から検出され、標高116.5mの地点にある。地形は西側に傾斜する扇状地を呈し、その中央部に構築されたことになる。寺院の東側に位置し、眼下に寺院を見る。窯体の大半はすでに削平されているが、窯の方位は確認でき、ともに地形の高い方に焚口を設ける。ここで便宜的に南側から１号窯、２号窯と番号をつける。

１号窯：焚口から燃焼室と焼成室の１部を遺存する。遺存する窯の構造から登窯と想定される。焼成室から西方へつづく焼土面を含めると残存長3.0m、最大幅1.35mを測る。

焚口幅は0.8m、残存高約0.3mを測り、燃焼室の側壁からつづく黄青色焼土を壁とする。石、瓦等の施設はみられない。

燃焼室は奥行1.2m、幅0.85～1.0mあり平面楕円形を呈する。両壁厚は0.1～0.18mあり、床面は２回認められ、ほぼ平坦である。燃焼室には炭が充塞していたが、瓦は平瓦片が数点出土したのみである。

焼成室は１段目のみを残す。奥行0.2m前後、幅0.8mを測り、0.1mの階段高をみる。２段目は0.06mの階段高を残すのみで、２段目以降の階段床面は消失する。わずかに黄赤色の焼土痕が1.2mつづく。

焚口の外方には古い灰原を切り込んだ幅約1.4mの落ち込みがあり、焼土・炭・原が充塞する。床面は舟底状を呈し、２次操業以降の掘り込みとみられる。

２号窯：１号窯の北0.5mにあり、床面のみ遺存する。床面は東西に長い方形を呈し淡緑青色の固く焼きしまったものである。東西0.9m、南北0.63mを測り、その東側に半月形の赤く焼け固まった部分がある。幅は0.4mあり、おそらく焚口に相当するところとみられる。このことから、方形の床面は燃焼室に当ると思われる。床面に数片の平瓦片をみる。この床面は厚さ約0.05mあり、その約0.1mにも焼土と床面をみる。２回以上の床の貼り替えが行われたとみてよい。

灰原：１号窯の焼成窯残存部から西側１mから、河川跡まで東西10m以上、南北10mに灰の拡がりをみる。西側の堆積は薄く、河川にむかって厚くなる。最大厚は河川の肩付近で約0.3mある。２号窯周辺の灰原から軒丸瓦（Ａ型式）、軒平瓦（Ａ型式）の出土をみた。なお、１号窯の焼成室から２号窯の西側にかけて５個の柱穴が認められた。１号窯と重複する柱穴は１号窯を切り込む。

5．遺物 (第1～14図、図版十一～十五)

1 瓦 類

今回の調査では１Ｂ－１トレンチから大量の瓦類の出土をみた。大部分は細片の平瓦でトレンチの南東側には瓦を敷いたとみられる約10㎝の堆積層も確認された。その中に、完形の平瓦や瓦当部をよく残す軒丸瓦が含まれていた。１Ｂ－７トレンチから検出された２基の瓦窯からは若干の平瓦・丸瓦の細片の出土があったのみで、灰原から数点の軒丸瓦軒平瓦の出土をみただけである。

軒丸瓦 合計で９点の出土であるが、文様、構成、形体から大きくＡ～Ｃの３型式に分類され、さらに細部の構成により細分される。

Ａ(１～４)単弁蓮華文軒丸瓦で、細分の文様構成の相違からａ～ｃに細分される。ａ(１)は小型の軒丸瓦で中央を盛り上げた中房の中央に１つの蓮子と、盛り上りの外周圏線をめぐらし、その外側に９個の珠文を配する。２重の蓮弁の中央に稜のある弁６葉と、外区内縁に21個の珠文を配し、２重圏文の周縁からなる。彫刻は深く子弁・間弁の端部はよく盛り上がる。焼成は堅緻で灰色の須恵質を呈する。丸瓦部凸面中央に×と直線を組み合せた窯印をつける。ｂ(２)は丸く突出する中房はＡａと同じであるが、中央部は丸く山形に盛り上る。蓮弁は６葉でやや肉厚の丸味をもつ。外区内縁には11個以上の珠文を配するが前回調査出土の同型式の珠文は27を数える。周縁は低く１重の重圏文である。丸瓦は瓦当外周いっぱいに付ける。胎土に砂粒を含み焼成は軟質で表面を黒くいぶし黒灰色を呈する。素地は黄褐色である。ｃ(３～５)は８葉の蓮弁を配するもので中房はＡｂに似るが中房外周の珠文は７個になる。子弁は３重となり彫りは明瞭で中央に稜をもち、端部はよく盛り上る。外区内縁の珠文は密に配され30数個はあったとみられる。周縁は２重圏文となる。４・５の瓦当裏面の外周は丸く盛り上り、丸瓦との接続用補強粘土は下半分はしない。３点とも胎土にやや大粘の砂粒を含み焼成は良く、５は灰白色の須恵質で、３は淡黄褐色を呈し、４は表面を黒くいぶしたとみられる。

Ｂ（６・７）単弁蓮華文軒丸瓦で２点出土した。中房周縁は素文である。８葉の蓮弁をもち、間弁は大きくて厚く全体がつながる。文様構成は簡素文様で彫りは浅く各文様は太めである。胎土に２・３㎜の砂粒を含み、焼成は７は軟質で淡赤褐色を呈し、６は良く赤褐色で堅い。６は丸瓦部の凸面を縦方向にヘラ削りし、凹面も補強粘土後、縦方向になでる。

Ｃ（８・９）複弁蓮華文軒丸瓦で中房の直径は大きく１＋８の蓮子をもつ。細弁の複弁８葉の蓮弁を配し弁の先端は尖りぎみである。弁のまわりを細線でかこむ間弁はＹ字状を呈する。外区内縁には圏線を配し周縁は素文である。全体的に彫りは浅く面的構成である。丸瓦部の接続は瓦当外周の２㎝内側に溝を彫り、そこに丸瓦をさしこむ印籠付けであるが、外側の補強粘土は少なく極端なカーブを描き段をなす。８は溝の奥まで丸瓦を挿入せず、0.8㎜のすき間をみる。胎土はともに２㎜前後の砂粒を含み焼成は５は良く暗灰色を呈し、８は軟質で黄褐色である。

軒平丸 合計で６点出土した。これも文様構成などからＡ・Ｂの２型式に分類できる。

Ａ(10～12)重弧文軒平瓦で３種類に細分される。Ａａ・ｂは櫛書きによって重弧文を表わし３重弧となる。その下部を等間隔に指圧し顎とするが補強粘土はしない。ａ(10)は弧の間隔の大きなもので、指圧は右手親指で右上方向に圧し６個配する。平瓦部凹面の前約５㎝をなで調整し後半に細い布目を残す。そこに粘土板切り離し痕をみる。凸面は縄目タタキ後ていねいになでてタタキを消す。ｂ(12)は弧の内隔の狭いもので、顎指圧は右手親指で左上方向に施す。平瓦部の凹面は先端まで布目を残し、凸面は顎裏に縄目タタキを残し他を縦方

軽野遺跡軒丸瓦計測表

（単位＝mm）

遺物番号	型式	直径	内区					外区						備考
			中房径	蓮子数	弁区径	弁幅	弁数	広	内縁		外縁			
									幅	文様	幅	高	文様	
1	A－a	103	19	1＋K＋9	61	15	T 6	18	6	S 21	8	5	J 2	灰原出土
2	A－b	(156)	24	1＋K＋8	123	31	T 6	20	10	S 11以上	8	5	J 1	
3	A－c	(142)	20	1＋不明	(108)	22	T 8	19	8	S 16以上	12	7	J 2	
4	A－c	(151)	21	1＋K＋7	(105)	20	T 8	21	9	S 15以上	12	7	J 2	
5	A－c	(150)	－	不明＋4以上	(108)	19	T 8	17	7	S 13以上	11	6	J 2	灰原出土
6	B	144	27	O	106	19	T 8	14	6	O	8	3	O	
7	B	148	31	O	104	18	T 8	14	6	O	9	3	O	
8	C	167	56	1＋8	110	26	F 8	24	10	K	13	3	O	平城宮6225型式
9	C	153	58	1＋8	103	24	F 8	22	10	K	12	3	O	平城宮6225型式、灰原出土

軽野遺跡軒平瓦計測表

（単位＝mm）

遺物番号	形式	瓦当面													全長	顎の形態			備考
		上弦巾	弧深	下弦巾	厚さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	上外区文様	下外区厚さ	下外区文様	脇巾	脇区文様	文様の深さ		直	曲	段	
10	A－a	286	56	314	35		G3							2			O		押圧文6
11	A－c	259	51	302	32		G2							1	342	O			瓦当面ヘラ削り
12	A－b	－	－	－	30		G3							2			O		灰原出土 押圧文2個以上
13	B	228	61	272	58	26	KK	17	K	20	K	19	K	2	369		O		平城宮6663型式
14	B	225	64	272	62	25	KK	19	K	19	K	19	K	2	332		O		平城宮6663型式

軒瓦計測表記号

- ●T　単弁　　●S　珠文
- ●F　複弁　　●K　圏線・界線
- ●G　重弧文　　●J　重圏文
- ●KK　均整唐草文　　●O　素文

向にヘラ削りする。c(11)は瓦当部をヘラ削り後上端にやや太目の2条の弧を配するもので重弧文の軒平瓦としてよいと考えられA型式とした。平瓦凹面には模骨痕が残る。凸面は縄目タタキ後縦方向に荒くヘラ削りする。顎は直線顎である。胎土はいずれも微砂粒を含み、焼成は10・11は軟質で黄褐色を、12は良く暗灰色を呈し須恵質である。

B（13・14）均正唐草文軒平瓦で3点出土した。いずれも同笵品であり、ここでは完形品の2点について取り上げる。文様は左右対称の3回反転の唐草文を配しやや肉厚に表わす。外区内縁は圏線を配す。顎は断面三角形状に粘土を補強し曲線顎を呈する。14の平瓦部凸面は縦方向に大きく7面にヘラ削りし面取り状を呈する。13は細かくヘラ削りを施こす。両者とも平瓦部凹面先端を横方向にヘラ削りする。また、両側面はヘラ削りを施こすのであるが、所々に樋巻造り分割法により生じた剝離痕をみる。この瓦は4分割によって製造されたものである。両側端部の約2/3を剝離させている。これは丸瓦をかみあわせる時の調整の為打ちかいた痕跡とみられる。胎土は1～5㎜の砂粒を含み、焼成については13はやや軟質で淡褐色を、14は良く暗灰色を呈し須恵質である。

丸瓦(15・16)ともに行基型式のもので、今回の調査では玉縁丸瓦の出土はなかった。ともに、凸面を縄目タタキ後ヘラ削りを施し、15は縦方向に、16は細かくていねいに行なう。両側面はヘラ削りし、1方の内外面もヘラ削りするが他方は内側だけである。いずれも胎土は1～3㎜の砂粒を多く含み、焼成は堅緻で暗灰色を呈

し須恵質である。なお、両者とも狭端部の側端を三角形にかく。

小結　これら瓦類のうち軒丸瓦Ａａ（１）、Ａｃ（５）、Ｃ（９）、軒平瓦Ａｂ(12)、丸瓦(16)は瓦窯灰原から出土し　軒丸瓦９は焼土片とともに出土した。他は１Ｂ－１トレンチの南側から出土したものである。軒丸瓦の瓦当と丸瓦の接合法はＡ型式は溜付けでＣ型式のみ印籠付けである。

ここで軽野遺跡出土の文様瓦について他の遺跡との検討を行ってみよう。軒丸瓦Ａ型式の単弁六葉軒丸瓦は野々目廃寺からも出土するが他に出土例はない。しかし、軒丸瓦Ａｃ型式の八葉系の軒丸瓦は蒲生郡雪野廃寺、宮井廃寺、綺田廃寺、愛知郡妙園寺遺跡、小八木廃寺、野々目廃寺からも出土し、更に湖北地方の井ノ口遺跡、今西遺跡（浅井寺）からも同型式のモチーフを持つ瓦が出土している。[11] 野々目廃寺、今西遺跡の瓦当中房には＋印の稜線をみる。このことから軒丸瓦Ａｂ型式は愛知郡のみの特徴と思われる。また小型のＡａ型式も同じであろう。Ｃ型式の複弁八葉軒丸瓦は平城宮6225Ｂと似る。[12] 法華寺、唐招提寺、長岡宮等で同笵品が出土している。

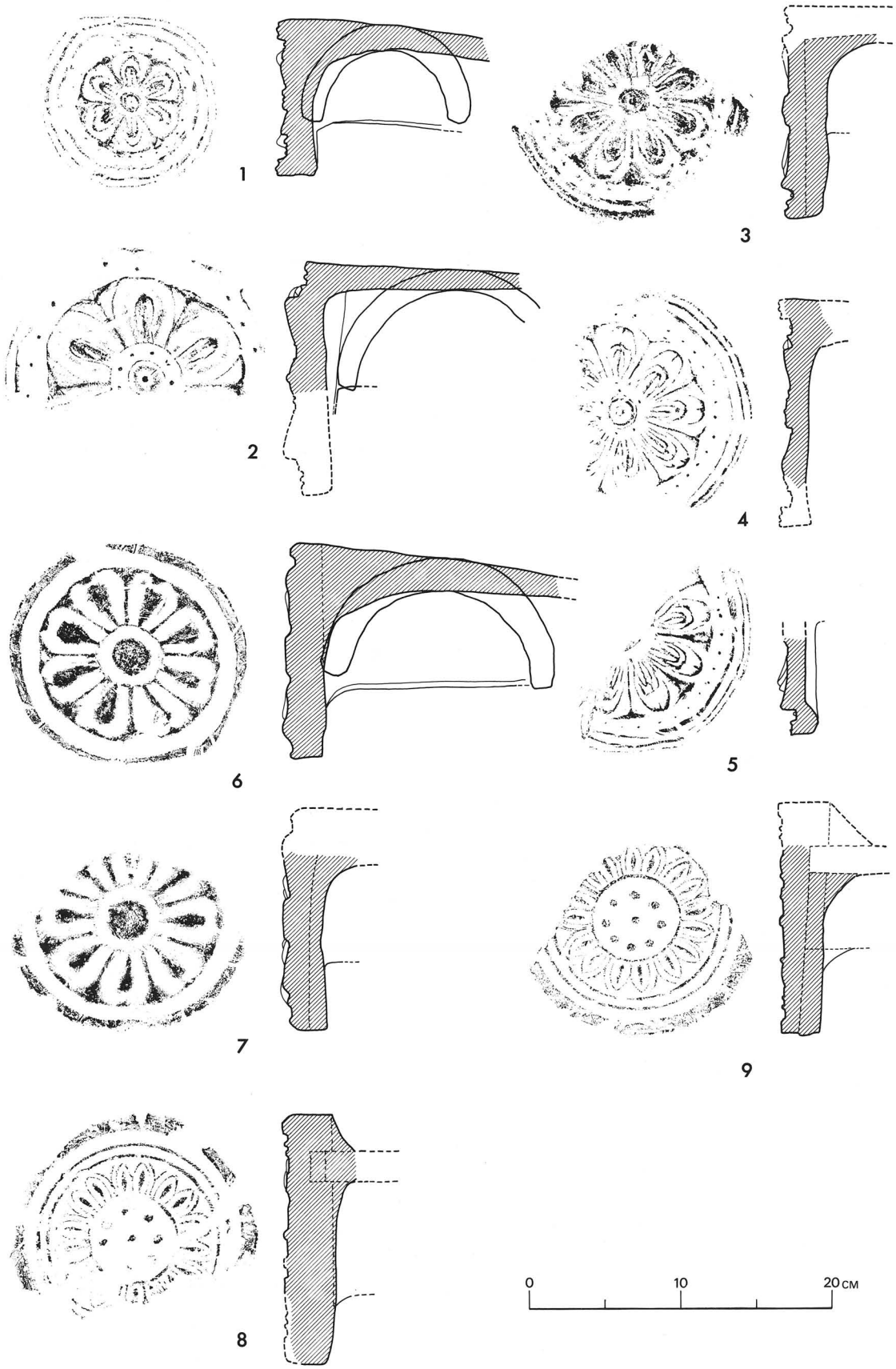
軒平瓦Ａ型式の指圧をした重弧文軒平瓦は小八木廃寺、野々目廃寺、雪野廃寺から出土している。小八木廃寺の重弧は２重弧となり指圧の数ははるかに多い。宮井廃寺の指圧は大きく重弧の線の細さはＡｂ型式に近い。Ａｃ型式については、神崎郡五個荘町小流廃寺、野々目廃寺出土瓦によく似た文様をみる。Ｂ型式の外区を圏線で表わしたものとしては大津市南滋賀町廃寺と彦根市恒河寺遺跡（竹ヶ鼻廃寺）がある。また、綺田廃寺からは唐草を縦長に表現したものが出土している。[13] この型式は平城宮跡6663Ｃ[14]と極似し法隆寺・唐招提寺・長岡京久世廃寺からも出土する。この型式は軒丸瓦6225型式と組み合うもので平城宮第二次朝堂院から出土する。このことから軒丸瓦Ｃ型式と軒平瓦Ｂ型式はセット関係にあるといえる。ただ、平城宮6663Ｃ型式の唐草文様の左側第３単位は第１支葉を欠き、左側第２単位にも違いをみる。また、軒丸瓦も同様で所々に相違をみる。両者とも平城宮出土瓦より少し小ぶりである。しかし、同笵品といっても良いほど似る。

なお，今回の調査では出土しなかったが前回の調査において，軒平瓦の中に３重弧文様の上弧線と下弧線の間をヘラ状工具で縦に線を等間隔に入れ，顎に指圧を施したものが出土している（図版十一）。ここでこの軒平瓦を仮に軒平瓦Ａｄ型式と分類しておきたい。

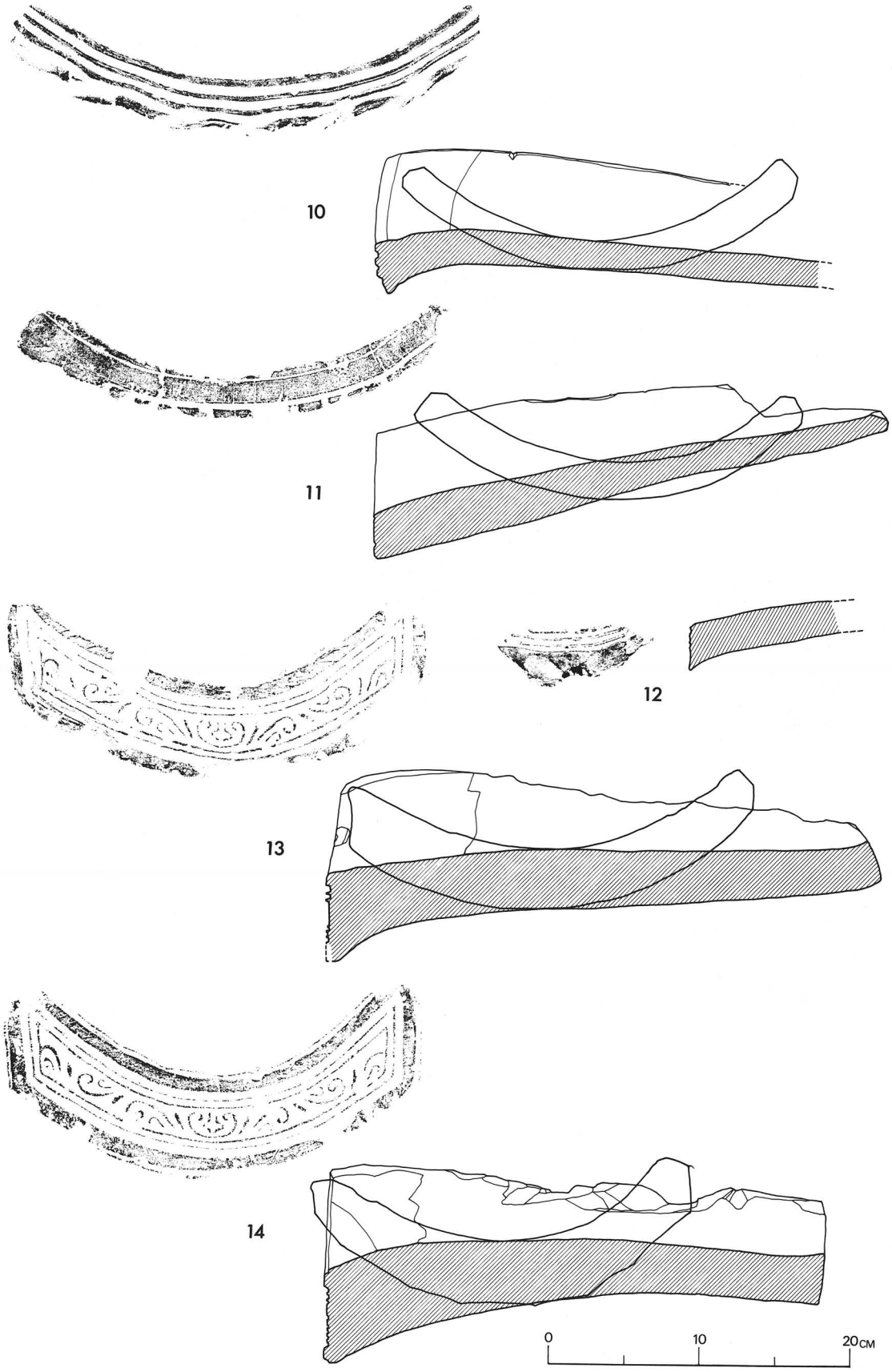
つぎに、軒丸・軒平瓦のセット関係についてふれておこう。軒丸瓦Ｃと軒平瓦Ｂが組み合うことは上記で述べたとおりである。軒丸瓦Ａは軒平瓦Ａと組み合わせることはできよう。その中で、小型の軒丸瓦Ａａは、重弧文の細い軒平瓦Ａｂとセットになると思われる。両者は瓦窯灰原からも出土しており、同時期のものと考えられる点などの理由にもよる。そうなると、大型の軒丸瓦Ａｂ・ｃは軒平瓦Ａａと組み合わせることができるが、軒平瓦にはＡ－ｄ型式のものもあり、詳細なセット関係については軒丸瓦Ｂ型式も含め後日の研究にゆづりたい。

これら上記の軒瓦の時期については、軒丸瓦Ｃおよび軒平瓦Ｂは平城宮第二次朝堂院出土瓦と全く同様であり、法隆寺、唐招提寺、長岡宮、久世廃寺などにもこの系統の瓦の出土がある。天平期から長岡京期に位置づけが可能で、８世紀後半頃に比定されよう。

軒丸瓦Ａと軒平瓦Ａは、当廃寺創建時に伴うものと考えられ、軒平瓦の重弧文の特徴からこれまで白鳳期と考えられてきた。しかし、同伴する土器をみるとその製作は白鳳期まで遡らすことは困難であり、また、軒平瓦の顎をみると白鳳期の特徴である段顎はなく、むしろ奈良時代の形態にある曲線顎となる。このことから、軒平瓦Ａ型式は白鳳期の文様をそのまま奈良時代まで受け継いだ工人が製作したと考える。奈良時代前期の要素をもつ瓦として位置づけられよう。このようにみると、軒丸瓦Ａ、軒平瓦Ａが軒丸瓦Ｃ、軒平瓦Ｂ型式より先行し、連続した時期として位置づけられる。



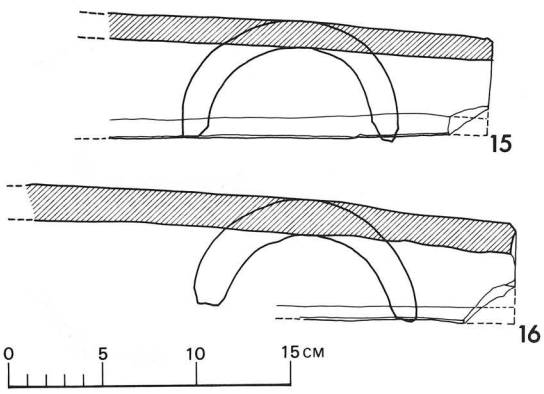
第11図　軽野遺跡出土遺物(軒丸瓦)実測図



第12図　軽野遺跡出土遺物(軒平瓦)実測図

2　土　器　類

今回の調査は細長いトレンチ調査のため、遺構から出土した遺物は少なかった。さらに、出土遺物の中にはほ場整備事業によって動かされ、細片化したものが多く、資料的価値を失なったものがあった。このような状況下において、遺構面および地山面から出土した土器は比較的信憑性をおけるものとして述べてみよう。ここでは器種ごとに記述する。



第13図　軽野遺跡出土遺物(丸瓦)実測図

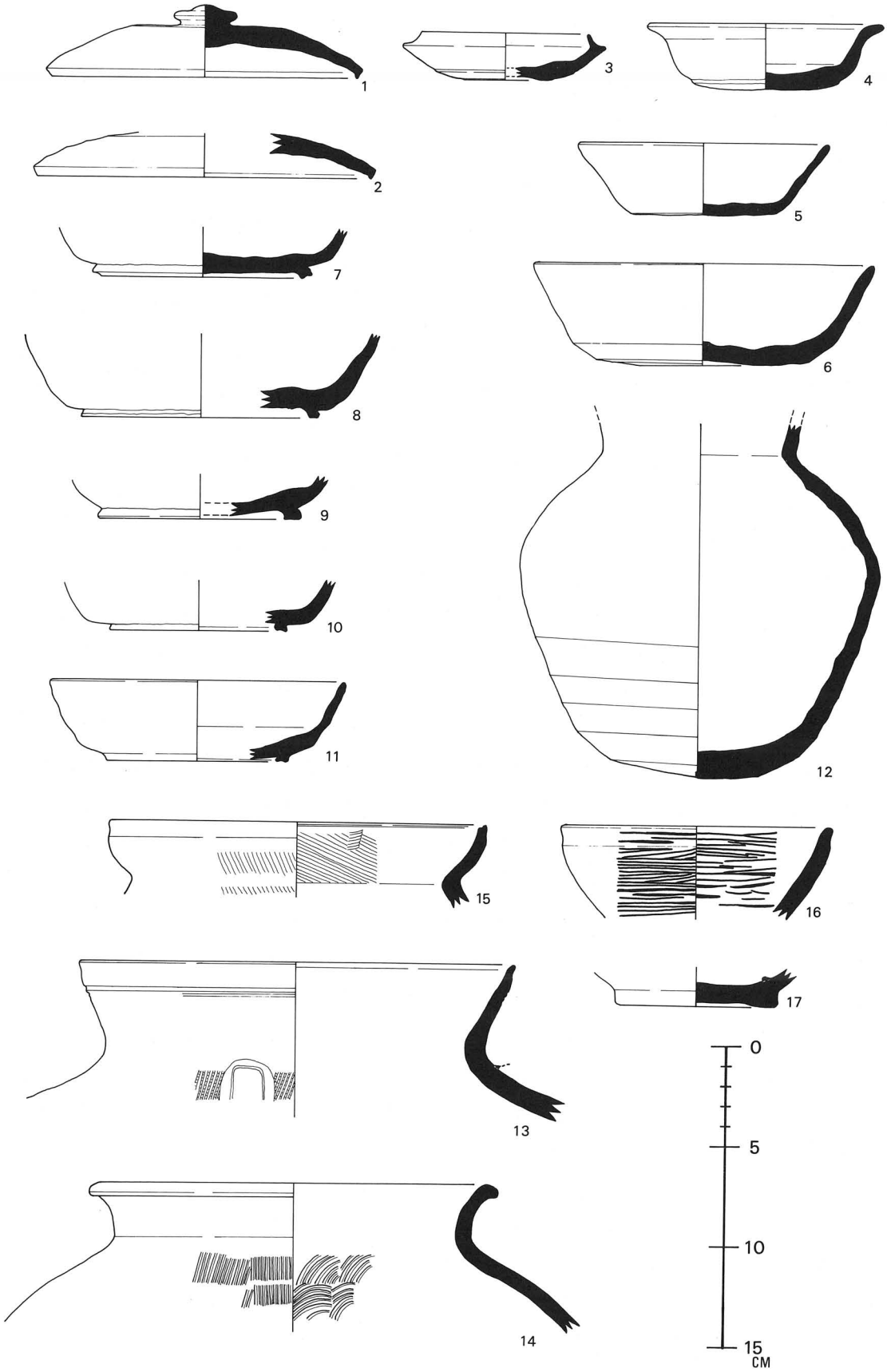
須恵器　杯蓋(1・2)、杯身(3～11)、壺(12)、甕(13・14)がある。

杯蓋はいづれも口縁端部をわずかに垂下させるもので、1の端部は尖りぎみである。天井部は平坦に近く、1は天井の約1/3をヘラ削りする。1は口径15.2㎝、器高3.6㎝を測り、胎土は精良、焼成は良く暗灰色を呈する。2は胎土に微砂粒を含み、焼成は良く灰白色である。1は1B－10、2は1B－3トレンチ地山面から出土した。

杯身は立ち上りのある3と平底4～6、高台付の7～11がある。3は1B－1礎石東拡張トレンチから出土した。小型の杯身でこの型式の終末期のものである。底部外面は未調整で、胎土に砂粒を含み、焼成は良く灰白色を呈する。4は口縁部を大きく外反させ、体部と底部との境界に段をもつ。底部は粗雑ヘラ削り調整を施こす。復元口径11.4㎝、器高3.3㎝を測る。胎土に微砂粒を含み、焼成はやや不良で淡灰褐色を呈する。1B－1礎石西拡張トレンチから出土した。5・6は1B－3トレンチ東北部から出土した。5の器壁は薄く、底部は平坦になる。底部外面はヘラ切り後ナデ調整する。口径12.4㎝、器高7.2㎝あり、胎土に石英を含む。焼成は良く灰白色を呈し、外面の約1/3は黒灰色である。6は大型の器で、口縁部をわずかに外反させる。底部外面はヘラ切り後かるくなで、体部との境界屈曲部のみヘラ削りする。口径16.8㎝、器高5.0㎝を測る。胎土に微砂粒を少量含み、焼成は軟質で白灰色を呈する。高台付杯身は完成品はなく、高台の特徴的なものを取り上げた。高台はいずれも低く接続後の調整は粗雑である。7は外方へふんばり、内端の接地するものである。8は外方へふんばり端面全面が接地する。大型の杯身で底部外面はナデ調整する。7・8は1B－4トレンチ中央付近から出土した。胎土・焼成はともに良く、7は淡灰色、8は灰青色を呈する。9は内弯する高台で、底部外面をナデ調整する。胎土に1㎜前後の砂粒を含み、焼成は良く灰白色を呈する。1B－3トレンチから出土した。10は底部外内の約1㎝内側に短い高台を付けたもので、1B－1トレンチの礎石横から出土した。11は内傾する短い高台を呈し、体部内外面に横ナデ痕をよく残す。1B－1トレンチ南西端から出土した。10・11とも胎土に微砂粒を含み、焼成は良く灰白色を呈する。

壺12は1B－7トレンチの瓦窯から約20m北東の地山面から出土した。口縁部を欠失する。体部下位をヘラ削りし、底部は丸味をおび坐りは良くない。器面の内外面に緑色系と黄褐色系の自然釉が多量に付着し、特に外面肩より上位、内面下位は著しく、内面は約3㎜の厚さで付く。また、自然釉の気泡も密にある。素地を残す部分は少ない。体部最大径18.1㎝、残存器高17.5㎝で、胎土に微砂粒を含み、焼成は堅緻で灰白色を呈する。この器はおそらく瓦窯で焼成したが、自然釉が付きすぎ放棄された可能性がある。

甕13・14は1B－4トレンチの地山面から出土したもので、13は口縁端部をつまみ上げ、口縁部外面に凹線が2条めぐる。体部の肩に耳を付してあったとみられ、その痕跡を残す。14は口縁部を外反させ、体部外面を



第14図　軽野遺跡出土遺物(土器)実測図

平行タタキ、内面に円形浮文をみる。胎土はともに石英を含み、焼成は良く、13は暗灰色、14は灰白色を呈し、内面は黒灰色である。

土師器　甕(15)が１Ｂ－４トレンチから出土した。内弯する口縁部の端面に段をもつ。外面は縦方向のハケ目後かるくなでて、内面は傾め方向にハケ調整する。胎土に砂粒を含み、焼成は軟質で黄褐色を呈する。

黒色土器　埦(16)が１Ｂ－１トレンチ礎石横から出土した。破片は２点あり礎石の南側と東側に礎石の底部近くから接するように出土した。口縁部はわずかに内弯し、端部を外反させる。内外面横方向にていねいなヘラ研磨する。外面の方が密である。復元口径13.4cmを測る。胎土に微砂粒を含み、焼成は良く素地は淡灰褐色である。内外面黒色を呈する。

山茶埦　埦(17)が１Ｂ－７トレンチから壺12と伴に出土した。断面三角形の低い高台を付け、その端部に多くのキズが付く。底部外面の切りはなしは糸切りとみられる。底径8.1cmを測る。内面に重ね焼きによる他の器種の破片が付着する。胎土・焼成とも良く淡灰色を呈し、表面に黒色斑文をみる。

小　結　今回出土した土器の中で比較的年代をとらえられるものは須恵器の杯蓋で、奈良時代でも古い時期まで遡のぼり、平城宮Ⅰもしくは Ⅱに相当するとみられ、８世紀前葉に比定される。この時期に属するとみられる土器には、杯身６、壺12がある。高台付の杯身にはこれより１段階新しい要素を持つ７～９がある。奈良時代後半の特徴をもつものとしては甕13・14と杯身５があり、特に５は平城宮Ⅲに近似し、８世紀第３四半期頃に位置づけできる。

杯身11は高台、口縁部の特徴から平安時代に相当するとみられ、９世前葉から中葉に比定される。黒色土器16も同時期とみてよいであろう。

6．ま　と　め

今回の調査は、暗渠排水予定地に細いトレンチを約30本設定した。これは軽野廃寺の東域約1/3に対応し、前回の調査で明らかにできなかった寺域の確認および伽藍配置を確証づけられるものとして期待された。

しかし、検出された遺構は上記の問題を解決する資料としては充分ではなかった。その中で、礫・瓦敷遺構や礎石、瓦窯および軒瓦類の検出は、廃寺の性格を裏づけるものとして満足させられる。

前回の調査では廃寺の南門や西・南を限る溝等の検出があり、今回検出の１Ｂ－１トレンチ第１群礫・瓦敷遺構は、その南門の北側にあたり、南門からつづく整地面として位置づけられよう。伽藍配置から想定すれば、寺院の中央の空間部分に相当する可能性をもつ。第３・４群は第１群整地層の北側正面にが当たり、南門から45～50mの位置になり、塔ノ塚（塔推定地）の約30m南東である。瓦の堆積層と軒瓦の出土から、この部分に何らかの建物の存在を示唆するものとして注目される。

礎石は第４群から約36m北東にあり、塔の塚の東約46mの位置になる。掘り形から出土した黒色土器は９世紀前半のものとみられ、この時期に礎石を中心とした堂宇が想起される。ただ、礎石は他から搬入された可能性も残し、詳細は明らかではない。

瓦窯については、伴出遺物が少なく時期決定に失くが、灰原から出土した軒丸瓦（Ａ型式）、軒平瓦（Ａ型式）および軒丸瓦（Ｃ型式）を当瓦窯焼成瓦とするならば、瓦窯は創建期に築造され、２次操業以降に軒丸瓦Ｃ型式が焼成されたとみられる。ただ、１号・２号の前後関係については明らかではない。なお、焚口の位置が扇状地の高い方に設けられていることは、大津市穴太瓦窯[15]と同形態を呈する。登窯の構築法を究明する上で注目される共通性をもつ。

この瓦窯の位置は、塔の塚から南東約120mに位置し、瓦窯を寺域内に構築したのか、それとも寺域外であったのかによって寺域の東西範囲を考える資料になる。

大津市榿木原瓦窯[16]は南滋賀町廃寺に伴う瓦窯で、廃寺の西築地の外側に瓦工房とともに築造されている。先述の穴太瓦窯は穴太廃寺の瓦窯とされているが、寺院の位置・範囲・規模は明らかではない。しかし、瓦の散布形態・地形構造等から穴太瓦窯は寺院外に立地する可能性をもっている。ただ、飛鳥期の寺院とされる衣川廃寺[17]は寺域内に瓦窯をもち、決して瓦窯は寺域外にあるとはかぎらない。一般的に生産遺構は寺域内に造られることは少なく、畑田廃寺[18]では寺域外から工房跡が検出されている。当瓦窯も寺域外に築造されたと考える方が妥当とみられる。

このことから、当遺跡の東限は瓦窯の西、小字塔の塚から120m以内に想定され、前回検出の西限から復元すると、東西距離を150m位にするのが最も妥当と思われる。寺院の東西幅を１町半と推定してよいであろう。

当遺跡の時期については、出土遺物は軒丸瓦Ａ型式、軒平瓦Ａ型式は須恵器蓋１・２と同時期といえ、奈良時代前葉の製品とみられる。軒丸瓦Ｃ型式、軒平瓦Ｂ型式は平城宮では天平年間の第二次朝堂院造営軒瓦とされ、長岡宮でも同笵品を使用している[19]。軒丸瓦Ａ、軒平瓦Ａ型式に続く奈良時代後半の軒瓦に比定してよいであろう。

このことから、軽野廃寺は奈良時代前葉も早い時期に創建され、以後連綿と寺院は存続し、山茶埡の出土する平安時代後半の12世紀から13世紀に衰退したといえる。それは律令国家体制の崩壊とともに寺院の生命も消滅したと考えることができる。

おわりに、１Ｂ－１、１Ｂ－７トレンチの遺構は、農林部との協議により暗渠排水溝の位置を変更し遺構を

現状で保存した。

註

① 昭和53年度発掘調査

② 近藤　滋「小八木廃寺調査報告」(『滋賀県文化財調査年報』昭和49年度　滋賀県教育委員会　昭和51年)

③ 近藤　滋「秦荘町野々目遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅴ　滋賀県教育委員会　(財)滋賀県文化財保護協会　昭和53年)

④ 昭和53年度発掘調査

⑤ 田中勝弘・近藤　滋「愛知郡秦荘町コクコ敷地内古墳調査報告」(『滋賀県文化財調査年報』昭和48年度滋賀県教育委員会　昭和50年)

近藤　滋「秦荘町上蚊野古墳郡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅳ－Ⅱ　滋賀県教育委員会　(財)滋賀県文化財保護協会　昭和52年)

近藤　滋・藤川清文他「秦荘町上蚊野古墳群」(『ほ場整備関係遺跡発掘報告書』Ⅴ　滋賀県教育委員会　(財)滋賀県文化財保護協会　昭和53年)

⑥ 昭和54年度発掘調査

⑦ 近藤　滋・石橋正嗣・石原道洋『軽野正境遺跡発掘調査報告書』(秦荘町教育委員会　昭和54年)

⑧ 葛野泰樹・山中仁志『大間寺遺跡発掘報告書』(滋賀県教育委員会　(財)滋賀県文化財保護協会　昭和57年)

⑨ 本書掲書第Ⅲ章

⑩ 葛野泰樹・徳網克己『市遺跡発掘調査概要』Ⅰ　(愛知川町教育委員会　(財)滋賀県文化財保護協会　昭和58年)

⑪ 西田　弘先生の御教示による。

⑫ 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所基準資料』Ⅰ　瓦編1(昭和49年)

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅶ　(昭和51年)

⑬ 西田　弘先生の御教示による。

⑭ 前掲書⑫

⑮ 林　博通・葛野泰樹「滋賀県大津市穴太遺跡の瓦窯跡」(『考古学雑誌』第64巻第1号　昭和53年)

⑯ 林　博通・葛野泰樹他『榿木原遺跡発掘調査報告』Ⅰ～Ⅲ(滋賀県教育委員会　(財)滋賀県文化財保護協会　昭和50・51・56年)

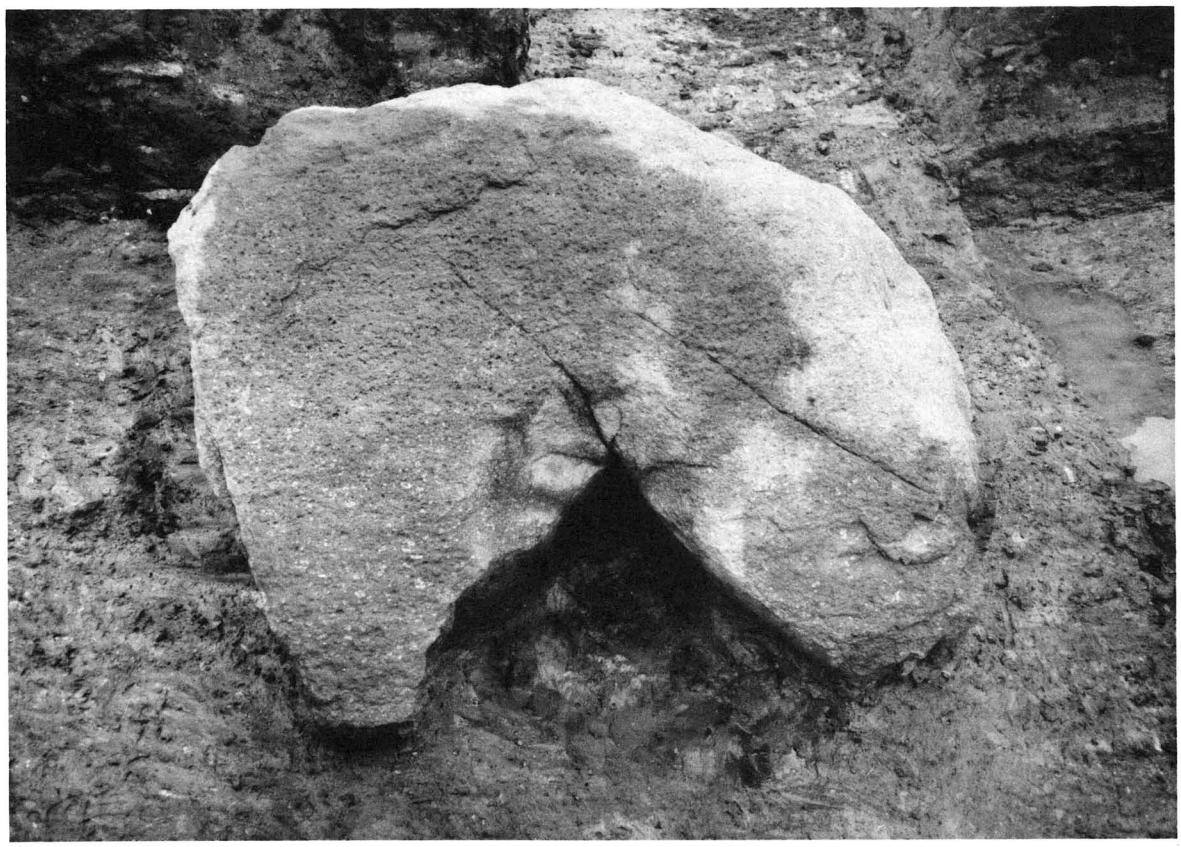
⑱ 丸山竜平他『衣川廃寺発掘調査報告』(滋賀県教育委員会　昭和50年)

⑱ 昭和53年度発掘調査

⑲ 前掲書⑫

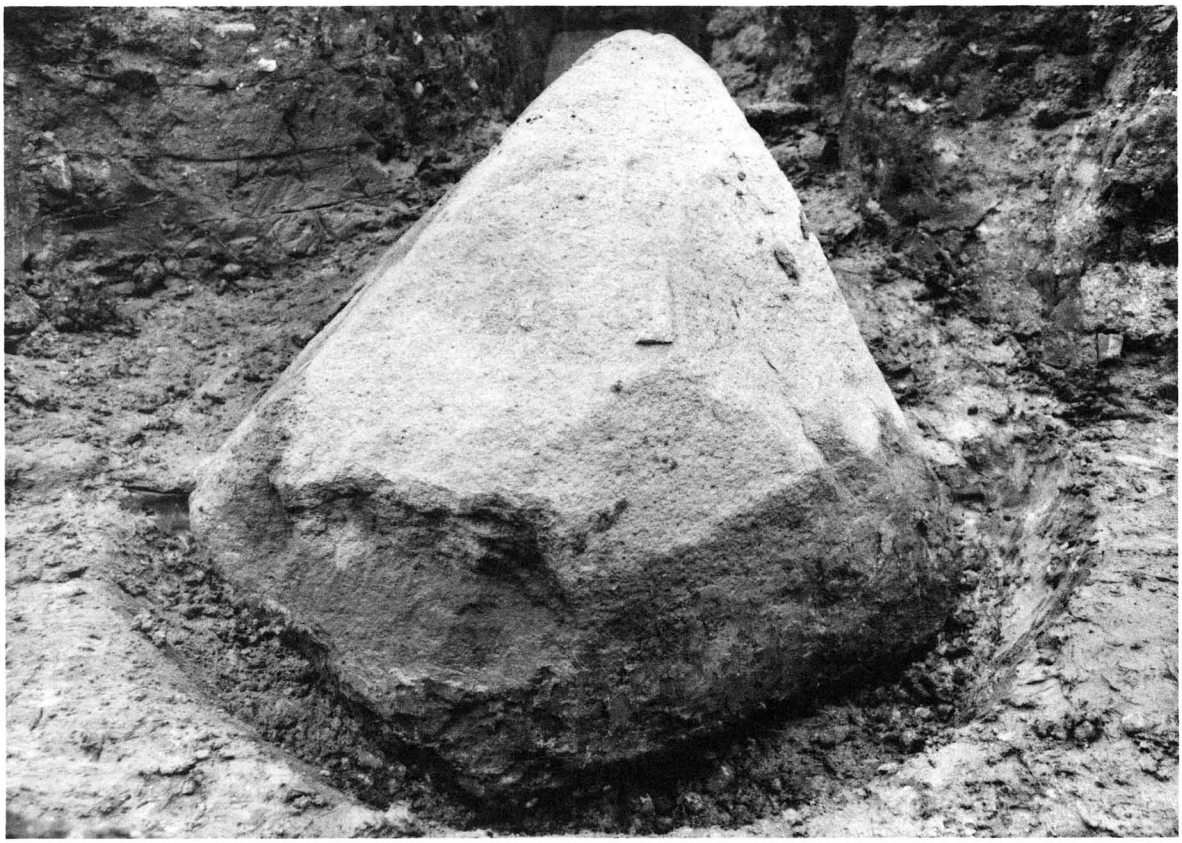
1　軽野遺跡遠景（北東から）

2　ＩＢ－１トレンチ　礎石（北西から）



1　1B—1トレンチ　礎石（南西から）

2　1B—1トレンチ　礎石（北西から）



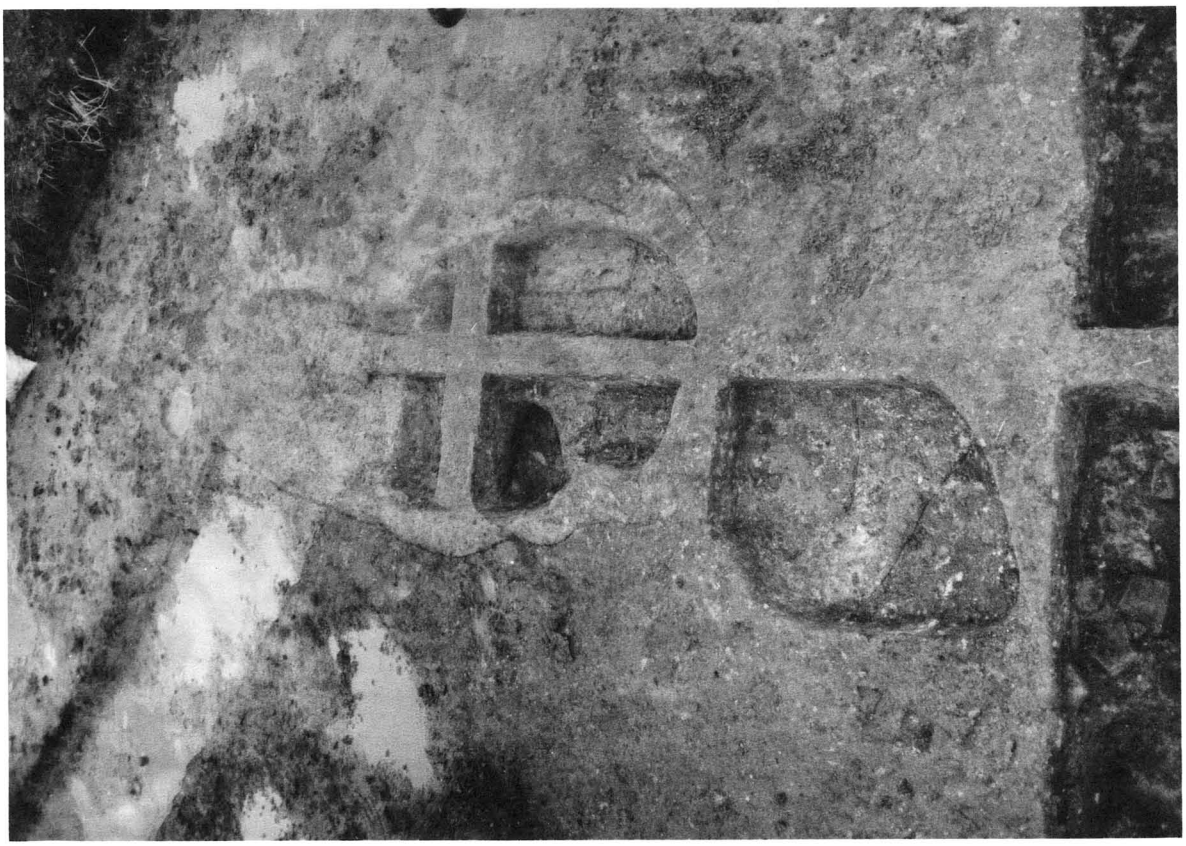
1　1B—1トレンチ　礎石（南東から）

2　1B—1トレンチ　礎石横瓦列

1　1B—1トレンチ　礎石構・溝（南東から）

2　1B—⑦トレンチ　瓦窯、左＝1号窯、右＝2号窯（東から）

1　1号瓦窯・灰原（東から）

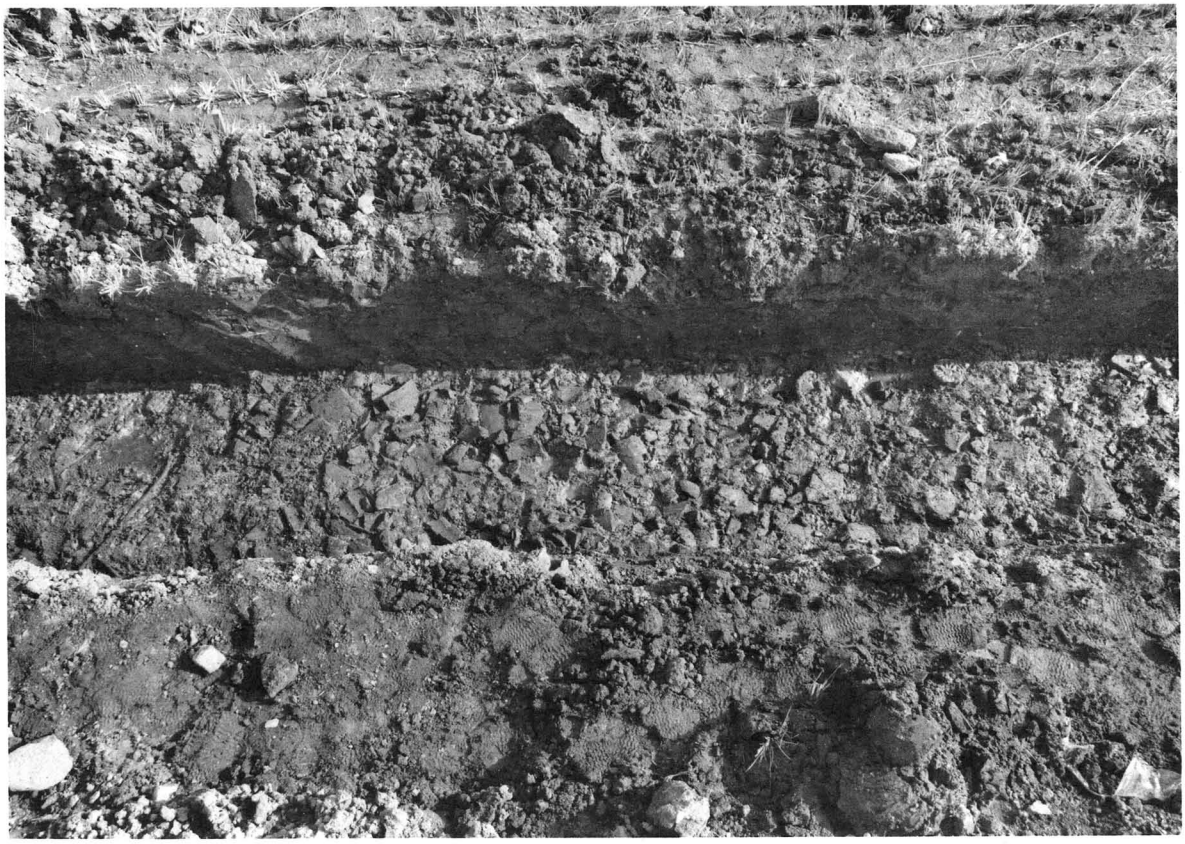


2　1号瓦窯（東から）

1　1号瓦窯燃焼室縦断面（南から）

2　1号瓦窯燃焼室横断面（東から）

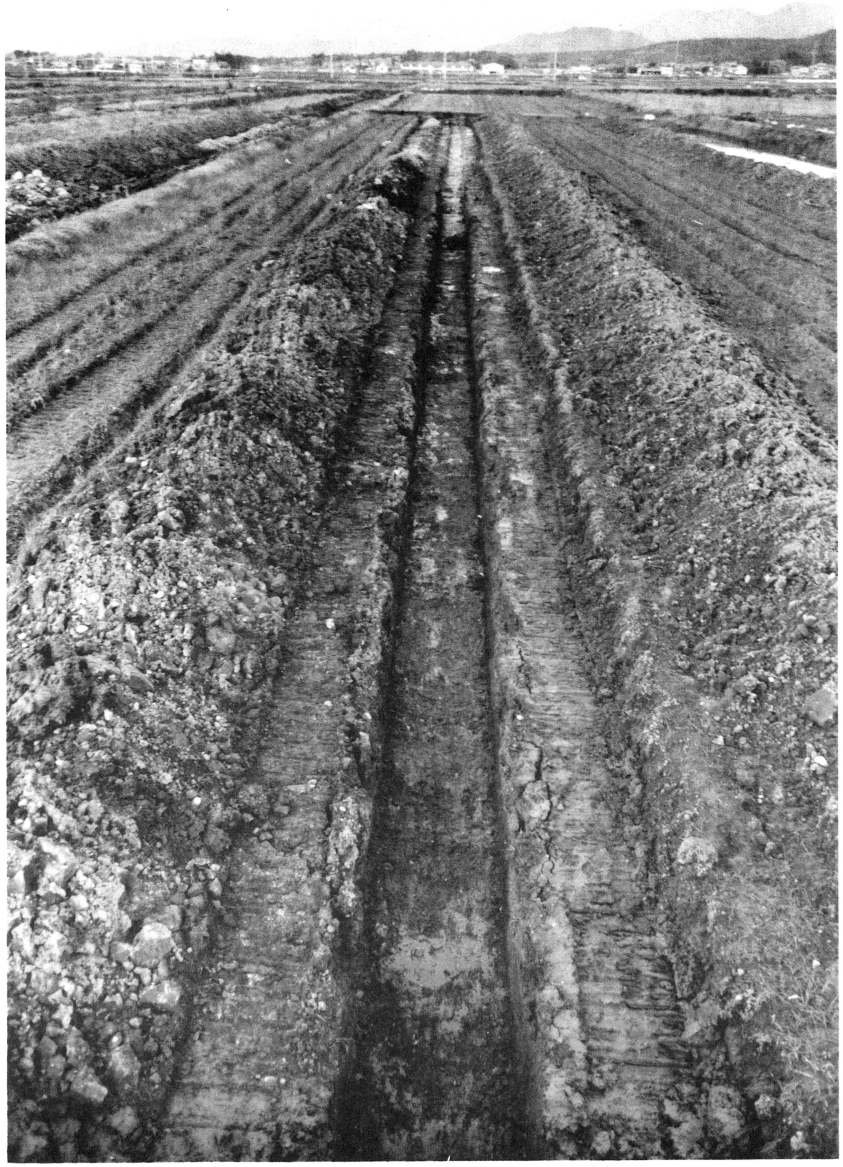
1　2号瓦窯（北から）



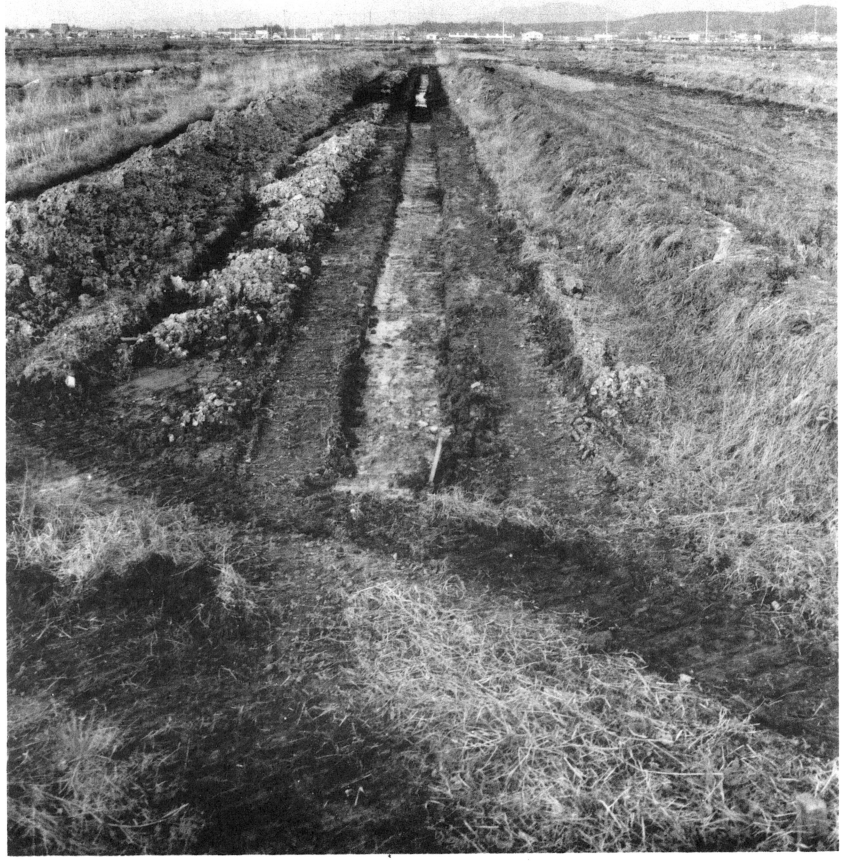
2　1B—1トレンチ　瓦堆積状況（北西から）

図版八　軽野遺跡

1　1B—⑤トレンチ（南西から）

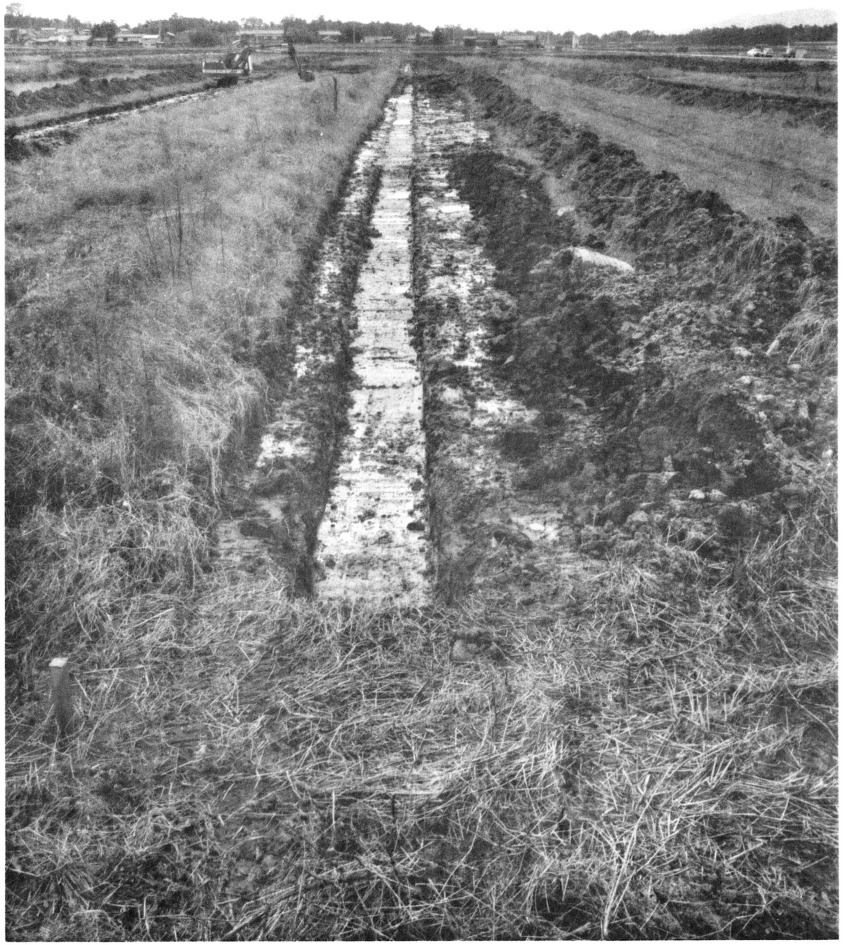


2　1B—④トレンチ（南西から）

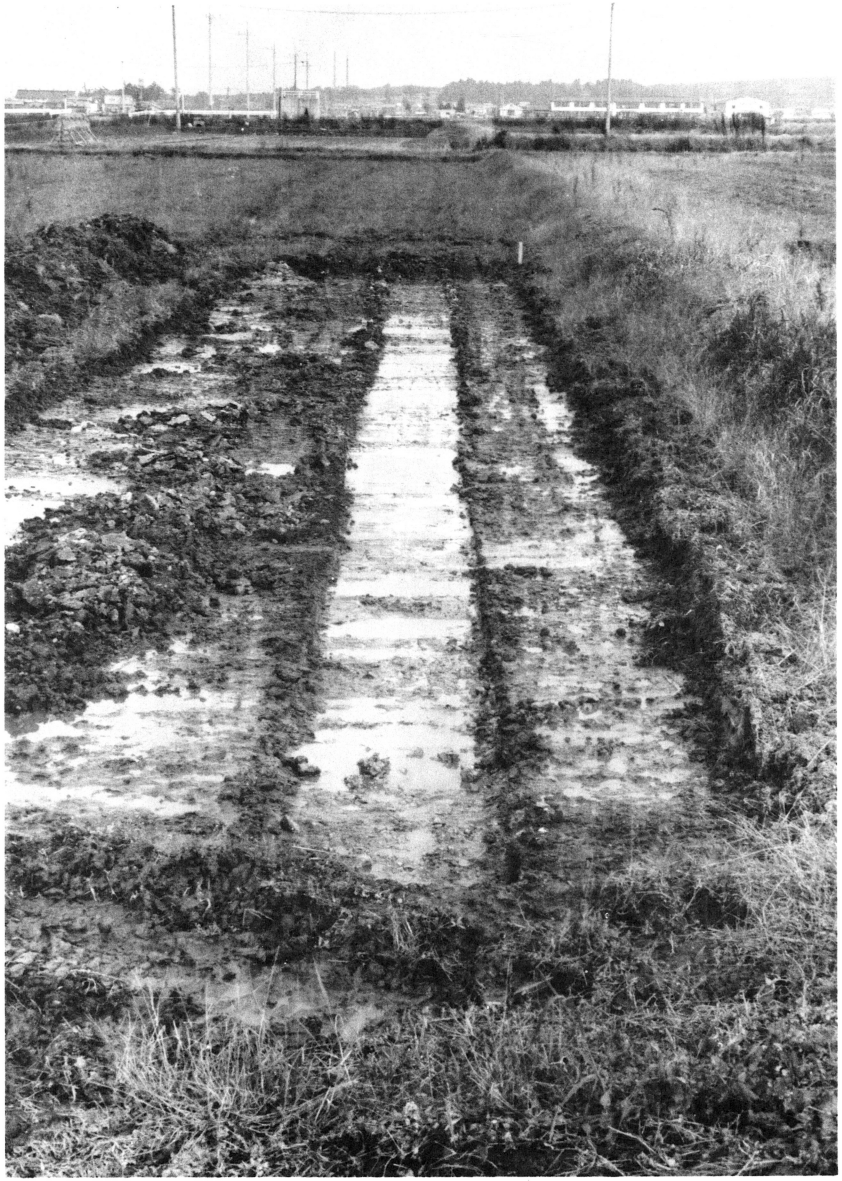


図版九　軽野遺跡

1　2A—4トレンチ（北東から）



2　2B—2トレンチ（南西から）



1　２Ａ―３トレンチ　旧河川跡（南から）

2　１Ｂ―５トレンチ　旧河川跡（南から）

図版一一　軽野遺跡

1

2

3

4

5

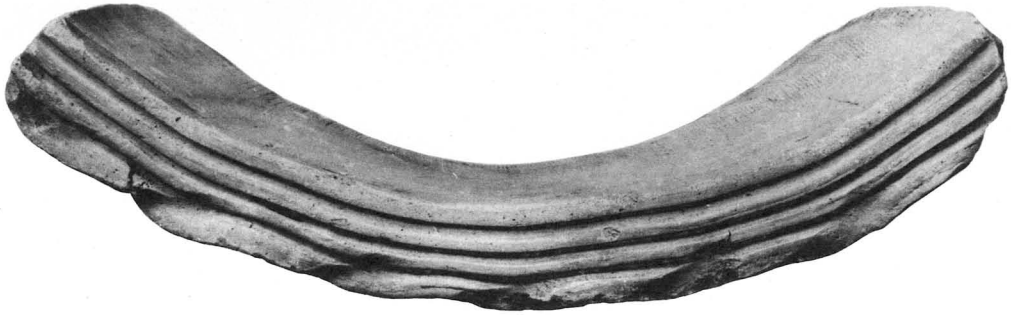
6

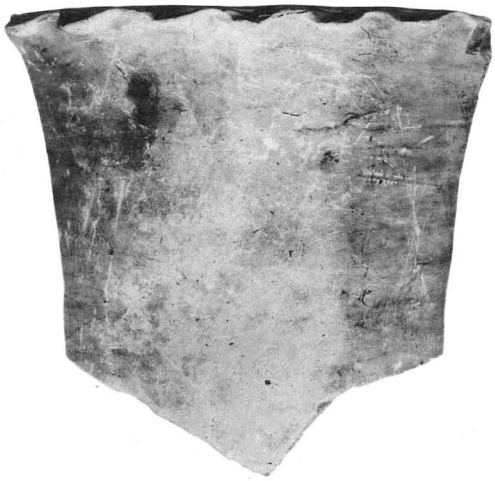
7

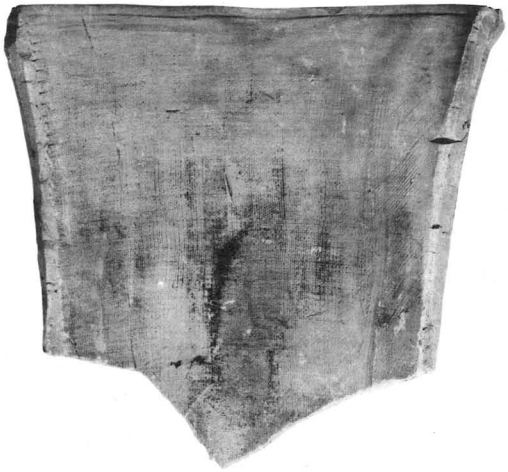
8

9

軒丸瓦







10

12

軒平瓦10（A—a），12（A—b）

11

A－d

15

16

軒平瓦11（A－c），（A－d），丸瓦（15，16）

13

14

軒平瓦13，14（B）

1

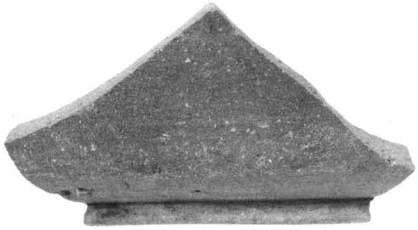
2

4

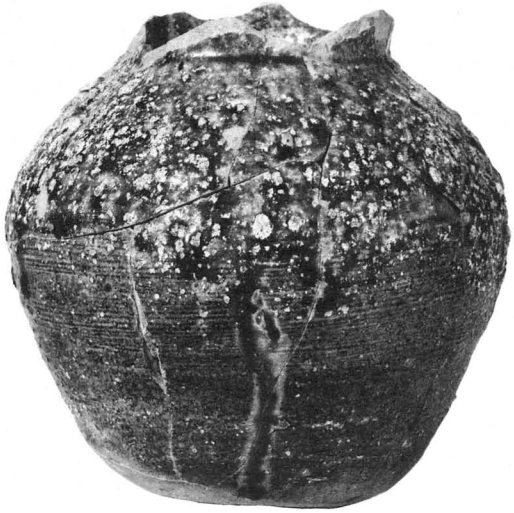
5

6

7


8

11


12

14

13

16

17

出土土器

昭和58年３月

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告Ｘ－１

編　集　滋賀県教育委員会

発　行　滋賀県教育委員会

財団法人　滋賀県文化財保護協会

印　刷　有限会社　真　陽　社

京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL　（０７５）３５１－６０３４